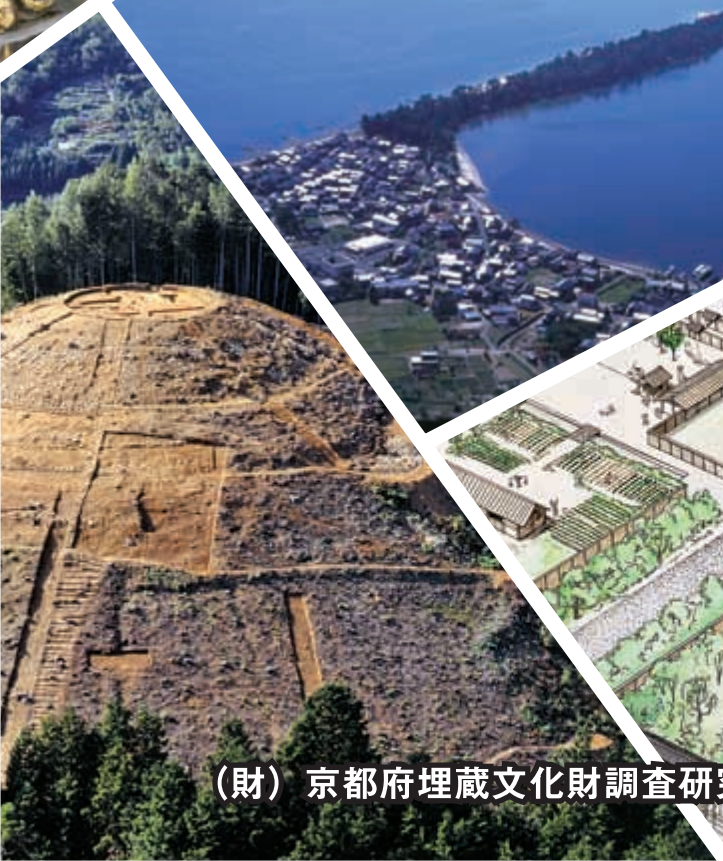
昔むかし・・・。

～京都府の遺跡をよむ～



（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

昔むかし・・・。

～京都府の遺跡をよむ～

（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

はじめに

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、京都府内における埋蔵文化財の調査・保存・活用及び研究を行い、文化財の保護を図るとともに文化財保護の普及啓発に努め、もって地域の発展に寄与する目的で、京都府教育委員会により昭和56(1981)年に設立され、本年で30周年を迎えました。

創立以来、当調査研究センターが実施した発掘調査は1000件以上を越え、その調査成果については調査報告書を刊行する一方、展覧会や埋蔵文化財セミナーなどの普及啓発活動を行ってまいりました。しかしながら、今日、社会の状況は大きく変化し、よりわかりやすく調査成果を府民の方々に伝えることやその活用を図ることが求められています。

こうした社会の要請に応えまして、これまでに当調査研究センターと京都府教育委員会及び府内各市町村教育委員会が発掘調査を実施した数多くの遺跡を通じて京都府内の歴史を描くことで、埋蔵文化財の保護と活用に寄与したいと考え、本書を刊行するはこびとなりました。

本書が京都府の歴史や文化をご理解いただく上での一助となることを願っております。

本書の刊行にあたり、ご指導、ご協力を賜りました京都府教育委員会及び調査に際してご協力いただいた府内各市町教育委員会関係者ならびに関係機関の皆様に心より厚くお礼申し上げます。

平成23年３月

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長　上田正昭

この冊子について

この冊子は、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターの30年にわたる京都府内での発掘調査成果を取り上げ、府民の方々を対象に、わかりやすく京都府の歴史を説明したものです。その元としたのは、調査を担当した職員全員で取り組んだ「遺跡でたどる京都の歴史」１～８（『京都府埋蔵文化財情報』第102・104～111号に収録）です。

当調査研究センターでは、埋蔵文化財の発掘調査を実施するだけでなく、その成果を府民の方々に知ってもらえるように、京都府教育委員会とともに年３回のセミナーや展示会などの普及啓発活動も実施しています。また、本冊子に先行して、平成17年度には、学校教材としても活用できるように「京都タイムスリップ」を刊行しています。

創立30年目を迎えた当調査研究センターは、これからも府民のみなさまに必要とされる組織をめざして、努力を重ねていくつもりです。本書が、京都府の歴史・文化財を理解する上で手助けになればと願っております。

平成23年３月

KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER

目　次

第１部　京都府の遺跡をよむ（旧石器時代～近世）・・・・・・・1
主な出来事と主な遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
丹後国・丹波国・山城国の成り立ち・・・・・・・・・・・・・4

旧石器時代の京都・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
旧石器時代の年代を測る・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

縄文時代の京都・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
浦入遺跡の縄文丸木舟・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
縄文時代の食生活・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
狩猟と採集・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
縄文時代のムラ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
縄文時代の習俗・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
けものをもとめて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24

弥生時代の京都・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
丘の上のムラ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
玉作りのムラ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
船着き場・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
海を臨む貼石墓・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
王の墓・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
戦いの犠牲者・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40

古墳時代の京都・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
首長の墓・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46

割られた銅鏡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
辟邪の埴輪・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50
剣は語る・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52
方形壇をもつ古墳・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54
倭国女王の翡翠勾玉・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・56

飛鳥・奈良時代の京都・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57
官衙施設と官道・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・62
山城の古代寺院・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・64
謎の寺院見つかる！・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・66
恭仁宮の四至・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・68
奈良山丘陵の瓦窯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・70
丹波国分寺とその前史・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・72
塩と鉄・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・74
離宮か、寺院か？・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・76

長岡京期の京都・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・77
条坊制の変遷・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・82
１町域の貴族の館・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・84
地鎮の起源と都の地鎮・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・86
轍から見た長岡京の造営・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・88
部屋を飾った唾壺・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・90

平安時代の京都・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・91
平安京の邸宅・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・96
尊勝寺と六勝寺・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・98
丹波国府を求めて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・100
天橋立～宮津市府中の賑わい～ ・・・・・・・・・・・・・・・102

都人の器生産 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・104
直線道路『久我畷』・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・106

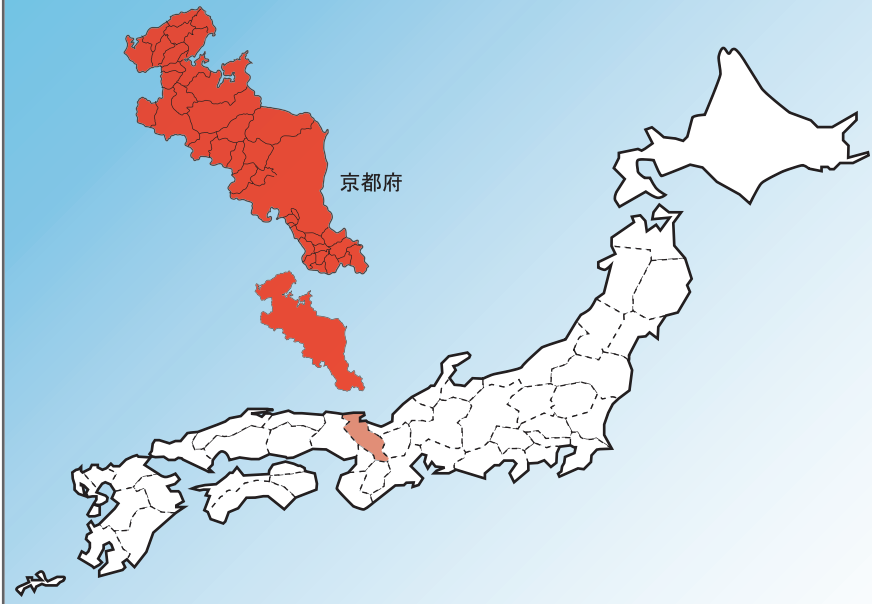
中世の京都 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・107
荘園領主の館 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・112
居館を囲む巨大な濠 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・114
中世の城 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・116
地震痕跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・118
お経を埋める ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・120
高僧の墓 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・122

近世の京都 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・123
天下人の政所 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・128
木幡城の盛り土・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・130
宮津城の変遷 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・132
勘兵衛の屋敷跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・134
江戸時代の陶磁器 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・136
いかさま師の末路 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・138

第２部　解説した主要遺跡一覧・・・・・・・・・・・・・・・・139
丹後地域・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・140
丹波地域 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・142
山城地域 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・144
特選遺物写真 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・146

昔むかし・・・。

～京都府の遺跡をよむ～



第１部　京都府の遺跡をよむ

（旧石器時代～近世）

年代	日本	主な出来事と主な遺跡	朝鮮	中国
3万年前	旧石器時代	列島が寒冷気候におおわれる 亀岡市鹿谷遺跡、同案察使遺跡	旧石器～新石器時代	旧石器～新石器時代
13000年前	縄文時代	列島の温暖化が進む 土器の出現・集落の定着が始まる 福知山市武者ヶ谷遺跡、京丹後市松ヶ崎遺跡、舞鶴市浦入遺跡、同志高遺跡、同桑飼下遺跡、南丹市天若遺跡、長岡京市伊賀寺遺跡、京田辺市薪遺跡		
400				殷～秦
紀元前		稲作が定着 京丹後市扇谷遺跡、同奈具岡遺跡、		
西暦	弥生時代	京丹後市赤坂今井墳墓、与謝野町温江遺跡、同日吉ヶ岡遺跡、同大風呂南遺跡、同寺岡遺跡、宮津市難波野遺跡、舞鶴市志高遺跡、南丹市今林遺跡、同池上遺跡、長岡京市雲宮遺跡、京都市東土川遺跡、大山崎町下植野南遺跡、久御山町市田斉当坊遺跡、木津川市木津城山遺跡	三韓	漢
200			漢の支配など	
400	古墳時代	古墳がつくられる 京丹後市大田南5号墳、同網野銚子山古墳、同湯舟坂2号墳、福知山市広峯15号墳、綾部市私市円山古墳、同山尾古墳、同奥大石2号墳、南丹市城谷口2号墳、同黒田古墳、向日市元稲荷古墳、木津川市椿井大塚山古墳	三国	三国～南北朝
600	飛鳥	律令国家へと進む 舞鶴市桑飼上遺跡、京丹後市俵野廃寺、綾部市綾中廃寺、木津川市高麗寺跡		隋
	奈良	710年平城京遷都 亀岡市池尻遺跡、同丹波国分寺跡、南丹市八木嶋遺跡、木津川市恭仁宮跡、同馬場南遺跡、同樋ノ口遺跡 784年長岡京遷都 京都市長岡京跡左京二条三坊十五町、同二条条間北小路	新羅	唐
800	平安時代	794年平安京遷都 京都市平安京跡右京一条三坊九町、亀岡市千代川遺跡、同篠窯跡群	高麗	五代

年代	日本	主な出来事と主な遺跡	朝鮮	中国
1000	平安時代	右京の衰退 996 年藤原道長左大臣となる 京都市平安京跡左京一条二坊十四町 1086 年白河天皇院政をひく 京都市六勝寺（法勝寺跡、尊勝寺跡）、京都市鳥羽殿跡、宇治市平等院、久御山町佐山遺跡、精華町椋ノ木遺跡 1156 年保元の乱がおこる（武士が勢力をもつ） 宮津市エノク経塚、福知山市大道寺跡経塚、同高田山経塚 1185 年平氏一門が滅亡 宮津市難波野遺跡、福知山市大内城跡	高麗	宋
1200	鎌倉時代	1333 年鎌倉幕府滅亡		
1300	南北朝時代			元
1400	室町時代	1392 年南北朝合一 舞鶴市中山城跡、同大俣城跡、綾部市平山城館跡、京田辺市田辺城跡 1467 年応仁・文明の乱がおこる	朝鮮	明
1500	戦国時代	1568 年織田信長、足利義昭を奉じて入京 宮津市宮津城跡、舞鶴市田辺城跡、京都市聚楽第跡、同指月伏見城跡、同御土居跡 1585 年豊臣秀吉、関白となる		
1600	江戸時代	1603 年徳川家康、江戸に幕府を開く		

－丹後国・丹波国・山城国の成り立ち－

京都府は、令制国（奈良～明治時代までの地方行政区分）では、山城国の全域、丹波国の大半、丹後国の全域に該当します。山城国には、恭仁宮（740 年遷都）、長岡京（784 年遷都）、平安京（794 年遷都）と都が置かれ、日本の中心でした。

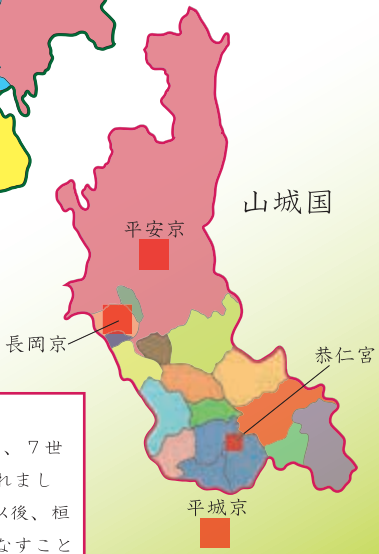
－丹後国－

和銅６年（713）に丹波国の北部、加佐郡、与謝郡、丹波郡、竹野郡、熊野郡の５郡を割いて、丹後国が置かれました。

丹波国が令制国として成立した７世紀頃には、丹波郡・丹波郷（現在の京丹後市峰山町）があり、丹波国の中心であったという説があります。

－丹波国－

丹後国を分国した後の領域は、現在の京都府中部と兵庫県北東部の一部、および大阪府高槻市の一部・大阪府豊能郡豊能町の一部に該当します。



－山城国－

「やましろ」は、古くは山代と書き、７世紀に山背国という表記で国が建てられました。延暦 13 年（794）の平安京遷都以後、桓武天皇が山河が襟帯して自然に城をなすことから「山城国」に改称されました。

旧石器時代の京都

はじめに

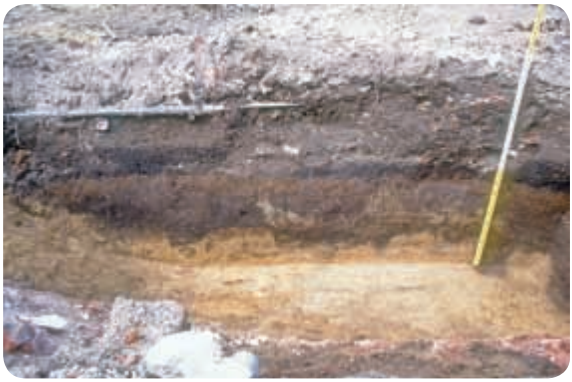
京都府内には旧石器時代の遺跡が非常に少なく、その内容も乏しいものと捉えられています。ここでは、これまでの京都府内での旧石器時代や縄文時代草創期の遺物の発見と発掘調査を振り返って、問題点を整理していきます。

1949年の群馬県岩宿遺跡の発見によって、日本ではじめて旧石器時代遺跡の存在が明らかになりました。京都府内では、1970年に京都市西京区大枝遺跡において旧石器時代の遺構・遺物を求めてはじめての発掘調査がおこなわれました。発掘調査の結果、縄文時代早期の押型文土器などとともに瀬戸内技法で製作されたサヌカイト製の石器群を採集することはできましたが、旧石器時代の包含層を確認することはできませんでした。

遺跡における降下火山灰

旧石器の編年には、「広域火山灰」と呼ばれる火山灰層を基準におこなわれます。火山灰は広い範囲に降下し堆積するので、その火山灰層を基準にすると、広い範囲で石器の前後関係を比較することができるからです。ここでは京都府内の各遺跡で見つかった火山灰層を中心に見ていきます。

京都府内では平安神宮周辺の火山灰堆積層が有名です。1989年の京都市左京区岡崎遺跡の調査では、姶良火山灰層直上の泥炭層から大型偶蹄類の足跡化石が検出されました。これらの足跡は最終氷期（約２万年前から１万５千年前）のものとされています。1998年の調査では、大山系の火山灰（約２万年前）と姶良火山灰（約２万５千年前）をそれぞれ単一の層で検出しました。それらの間には1.4ｍの堆積物があり、泥炭層も複数枚検出しましたが、遺物は



成勝寺跡の火山灰堆積

出土しませんでした。

向日市殿長遺跡の調査では、姶良火山灰層直上の泥炭層からウシ類と考えられる足跡化石が発見されています。この足跡も最終氷期のものと考えられています。

亀岡盆地では、鹿谷遺跡の発掘調査において、泥炭層とともに姶良火山灰層が検出されています。盆地南部の案察使遺跡では、後背湿地と考えられる場所からアカホヤ火山灰層（約 7,300 年前）とともに、層厚約 10cm の隠岐鬱稜火山灰層（約 1 万 7 百年前）が検出され、その下層から縄文時代早期の押型文土器が出土しています。

石材の利用

近畿地方では、奈良県葛城市と大阪府南河内郡太子町を跨ぐ標高 517 m の二上山で産出するサヌカイトが、ナイフ形石器の主要な石材として用いられています。特に瀬戸内技法で製作された石器はすべてサヌカイト製です。この現象は丹波山塊中に位置する京丹波町蒲生遺跡でも認められ、採集された国府型ナイフ形石器はサヌカイトで作られていました。

一方、旧石器時代に用いられた石材で、京都府内で産出するものにはチャートがあります。チャートは丹波山地にあたる丹波帯の露頭面や転石から入手できます。また、丹波帯より南部の地域では、丹波山地を源とする河川により運ばれた堆積物の中や大阪層群中から採集できます。

国府型ナイフ形石器以外の 2 側辺加工のナイフ形石器は、チャートの使用率が著しく増加します。京都市右京区菖蒲谷池遺跡、八幡

市荒坂遺跡、平安京右京五条二坊九町・十六町、京都市西京区大枝遺跡、綾部市以久田野遺跡、綾部市旗投遺跡、南丹市八木町池上遺跡などでチャート製のナイフ形石器が出土しています。

近畿地方以外で産出する石材には、黒曜石と硬質頁岩があります。宇治市二子塚古墳から信州産と考えられる黒曜石製の茂呂型ナイフ形石器が出土しています。亀岡市鹿谷遺跡からは、黒色の黒曜石製の槍先形尖頭器が出土しています。

丹後地域では、まだ確実な旧石器時代の遺物は発見されていませんが、縄文時代の遺跡の石材利用状況を見ると、北陸地域の安山岩や在地流紋岩、緑色凝灰岩、玉髄などの使用の可能性も考えられます。緑色凝灰岩は旧丹後町から旧久美浜町（現京丹後市域）の海蝕崖に露頭があり、多くは軟質ですが、転石の中には硬質なものも含まれるという報告があります。また、玉髄は丹後半島の竹野川・溝谷川・宇川の河原、丹後町や網野町の海岸部分で採集できます。京丹後市弥栄町の鳥取城跡では、玉髄製の削器と鉄石英製の素材が出土していますが、確実に旧石器時代と断定できる資料ではありません。

旧石器時代の石器（縄文時代草創期の石器を含む）

（中川和哉）

旧石器時代の年代を測る

よく考古学考関連の本では、「これは何年前」、「これはあれより新しい」ということが書かれています。発掘調査によって明らかになった前後関係をもとに決められた遺物の年代を「相対年代（そうたいねんだい）」と呼びます。一方、遺物そのものに書かれた年号や、科学的な分析によって決められた年代を「絶対年代（ぜったいねんだい）」と呼びます。

文字資料のない旧石器時代では絶対年代を明らかにするには、科学的な分析が不可欠です。そのため、地中の炭に含まれる炭素が利用されます。炭素の中には２種類の炭素があり、動植物が死んだ後に炭化し、その炭素が一定の比率で変化していきます。その原理を利用して、年代測定を行うのが放射性炭素測定法（ほうしゃせいたんそそくていほう）（C^{14} 年代測定法）と言われる方法です。この方法は、５万年をこえる古い時期を測定することはできませんが、日本考古学が扱う時間に対しては、旧石器時代の一部を除いてほぼ十分な範囲です。しかし、分析資料に新しい時代の炭素を含む物質や地中の生物が混じったりすると、その資料の正しい年代がずれて、誤差が生じることもあります。

旧石器時代の年代を決めるもう１つの重要な方法は、日本列島の広域に降った火山灰（かざんばい）を検出することです。火山灰にはガラスが含まれます。火山によって火山灰中に含まれるガラスの屈折率が異なっていることを目安に、火山灰を特定していきます。日本列島に何度となく降灰した火山灰のそれぞれの年代は、多くの測定からほぼわかっていますので、年代のわかる火山灰の上や下から遺構・遺物が見つかれば、その火山灰の年代よりも新しいことや古いことがわかります。

こうした作業を通して、旧石器時代の年代が決められていきます。

（中川和哉）

縄文時代の京都

はじめに

京都府内の縄文遺跡の発見は、明治時代の末から大正時代にかけて、京丹後市函石浜（はこいしはま）遺跡や京都大学構内の北白川小倉町（きたしらかわおぐらちょう）遺跡に始まります。しかし、東日本のように畑に縄文土器が散らばっているような遺跡はほとんど無く、遺跡が加速度的に増えたのは、1980年代以降、開発に伴う発掘調査が増加してからです。

縄文時代の時期区分

約２万年前、最後の氷河期（ヴェルム氷河期）が終わり、山や海を覆っていた氷が溶け、海水面が上昇し、徐々に日本列島が現在の形に近づいていきました。気候の温暖化により西日本ではカシ・シイなどの照葉樹林帯に、東日本はクルミ・トチなどの落葉広葉樹林帯が広がっていきました。旧石器時代の人々は、捕獲したケモノの肉や堅果物を生で食べるか､火にあぶって食べていました。しかし、縄文時代の人びとは粘土を焼いて「土器（どき）」を作り始めた結果、肉や堅果物を煮て食べることができるようになりました。これが縄文時代の始まりです。

縄文時代とは、土器の使用が始まって以後、中国・朝鮮半島から稲作文化が伝来し、日本に稲作が定着する弥生時代までの、およそ１万年余りの期間を

縄文時代のムラの想像復原図（早川和子作画）

いいます。１万年を越える長期間の縄文時代は、ムラの様子や道具の進歩、土器の模様や形態の変化から、草創期、早期、前期、中期、後期、晩期の６期に区分されています。

ある遺跡が縄文時代のどのあたりにあたるのか（相対年代）は、土器や石器の形態から推定できますが、土器や石器だけではそれが今から何年前なのか（絶対年代）を明らかにすることはできません。そこで、近年は理化学的な方法（C^{14}年代測定法、熱ルミネッセンスなど）や火山灰などで年代を推定したり測定したりしています。

京都府内では、京丹後市松ヶ崎遺跡で見つかった縄文時代前期前半の炭化物が5,600～5,800年前、舞鶴市浦入遺跡で見つかった縄文時代前期後半の丸木舟が5,260年前という年代が得られています。また、亀岡市案察使遺跡では、およそ10,700年前、韓国の鬱稜島が噴火し、それにより堆積した鬱稜隠岐火山灰層の下から縄文土器が出土し、縄文時代早期前半のものであることがわかりました。

縄文土器

縄文時代と旧石器時代の違いとして、まず土器の使用があります。人類史上最初の化学変化を利用した発明とも言われる土器は、日本ではその表面に縄目の文様がよく付けられることから、「縄文土器」と呼ばれ、この時代の名前にもなりました。その文様や器形の変化が、遺跡の時期を決める一つの物差しになっています。

舞鶴市志高遺跡の縄文土器

京都府内で最も古いと考えられている縄文土器は、福知山市武者ヶ谷遺跡の小形の鉢です。府内出土の草創期の土器はこの１点だけで、早期前半

のものも、案察使遺跡と京都市西ノ京南上合町遺跡の２か所が知られるに過ぎませんが、早期後半から遺跡の数は増えていきます。

「縄文土器」と言われるように、縄目の文様は各時期に多用されますが、縄目以外の文様もあります。棒に楕円や山形の文様を刻んで土器の表面に転がした押型文や竹管などを押し付けた爪形文、貝殻を使った文様など多種多様です。

縄文時代も終わりに近づくと京丹後市平遺跡の土器のように、文様をつけない土器が多くなります。

土器の効用は、食物を煮ることにより、食べられる動植物の種類が飛躍的に増加したことです。また、煮沸することで殺菌効果が得られ、人々の健康にも大きく寄与したものと考えられます。

縄文のムラ

人々が同じ場所に長く住み始めるのも縄文時代からです。生活条件の良い所では、家が何軒か建ち並ぶ集落（ムラ）が形づくられました。ただ、縄文時代早期の段階では、南九州などきわめて限られた地域だけで大規模な集落が存在しますが、多くの地域では数軒の住居が並ぶ小規模なムラであったようです。温暖化が進み、食糧採取が安定した前期になると大規模なムラが多くなります。ムラは中央に広場があり、その周りを囲むように竪穴式住居

浜詰遺跡の復元竪穴式住居（京丹後市教育委員会提供）

竪穴式住居の想像復原図

石囲い炉をもつ竪穴式住居跡（伊賀寺遺跡）

や平地式建物が造られ、イエの背後や外周部には貝塚（ゴミ捨て場）があったようです。また、ムラの中やあるいはそのそばに墓や祭祀施設が造られるようにもなります。

縄文時代後期になると地域を代表する大規模なムラ（拠点集落）とその周辺に分散する小規模なムラに分かれていたようです。

京都府で現在見つかっている最も古い住居跡は、京都市上終町遺跡の早期後半のもので、平面形が長径 2.8 m の楕円形でした。

縄文時代中期～後期の長岡京市伊賀寺遺跡では 50 基程度の竪穴式住居跡が見つかり、そのうちの一部には石囲炉が組まれていました。中期末から後期の京都市日野谷寺町遺跡では 3 基の石囲炉と共に食物を保管する貯蔵穴があります。

舞鶴市桑飼下遺跡では、住居に伴ったと考えられる 48 か所の炉跡が残っていました。同時に何軒の家が建っていたかはわかりませんが、当時としては、相当大きな集落だったようです。

木津川を見おろす台地上にある城陽市森山遺跡では、後期中頃の住居跡が８基みつかり、公園として保存されています。

京都大学構内では、中期末の住居跡や後期の土器棺墓と配石墓が点々と発見されています。

京都市西京区上里遺跡で晩期中頃の集落が見つかりました。円形や楕円形の住居と近くに土壙墓や土器を利用した土器棺墓がありました。土器棺墓は京丹後市平遺跡や山城地域の京都市山科区中臣遺跡、宇治市寺界道遺跡、向日市鶏冠井遺跡、長岡京市馬場遺跡、大

山崎町下植野南遺跡などでも見つかっています。

石斧使用例

食物の狩猟と採取

氷河期である旧石器時代にはオオツノジカやナウマンゾウなど大形のケモノがいましたが、旧石器時代の終わり頃にはこのようなケモノは絶滅し、ニホンシカ・サル・イノシイ・ウサギなど、今の私たちが目にする小形動物が中心となります。

舞鶴市志高遺跡は、由良川の自然堤防上のムラですが、地表下４mから前期の住居跡が見つかり、当時の豊富な生活道具が出土しました。獣や魚を獲るための矢の先端に着ける石鏃や皮をなめしたり木を削ったりする万能小刀の石匙、魚網に使った石錘、家の柱や丸木舟を作る樹木を切り倒すための磨製石斧、土を掘る打製石斧、食料の木の実や地下茎などを磨り潰すための磨石と石皿など、大小様々な形のものが使われていました。

食料にした動植物や骨角および植物で作った生活用具は、腐るためほとんど残りませんが、京丹後市松ヶ崎遺跡では、地中で水に浸かり空気に触れなかったため、腐らずに残ったものがありました。その中のエゴマなどは栽培されていたとも考えられています。

かつて自然の恵みに頼るだけと考えられていた縄文時代の食糧ですが、近年の調査によって、小規模ながら食用植物の栽培や実のなる樹木の管理も行われていたと考えられるようになってきました。季節に応じた食糧を得て、保存食を作り、それを交易品として、陸路・海路を通じて他地域と交流していた姿も浮かび上がります。

（長谷川　達）

浦入遺跡の縄文丸木舟

丸木舟が出土した浦入遺跡

平成９年、舞鶴市の北端にある大浦半島の西端で、舞鶴湾口の東岸にあたる浦入（うらにゅう）遺跡で、縄文時代前期後半（今からおよそ5,000年前）の丸木舟（まるきぶね）が見つかりました。この丸木舟は直径１ｍ以上、長さ８ｍ前後の杉の巨木を半分に割り、石の斧を使って刳り貫いて作ったものでした。

縄文時代には全国で80例程度の丸木舟が見つかっていますが、舳先が細く、船本体部分が半円形に近いものと、船体が半円形ではなく、舳先のがっしりとしたものがあります。前者は、前からの波には弱い半面、小回りがきき、河川に適したもの、後者は外洋航海用と考えられています。

海抜０ｍの海岸で丸木舟を発見

京都府内では縄文時代の丸木舟の出土例としては、向日市森本町にある森本（もりもと）遺跡と浦

入遺跡のものがあります。

森本遺跡の丸木舟は完全な形では残っておらず、長さは3.7 m、幅50cmでした。その形態や出土場所から河川に適したものと考えられます。丸木舟周辺からは縄文時代晩期の土器が出土しています。

浦入湾に広がる浦入遺跡

一方、浦入遺跡の丸木舟は、残っていた長さが５m、最大幅１mで、丸木舟としては幅広のものでした。舟先端部の上端の板の厚さが９cm前後、船底の板の厚さが７cmでした。船体の長さは８m前後と推定でき、その特徴から外洋航海用のものと考えられます。浦入遺跡は外洋に面した岬の内側で、船着場のような場所にあり、この舟を利用して縄文人は外海へ漕ぎだしたものと思われます。

丸木舟が出土した地点には、丸木舟が作られた時期よりもやや新しい時期のものですが、桟橋（さんばし）に伴うと思われる杭や、舟を停泊させる碇（いかり）と思われる平石が見つかっています。

この浦入遺跡の調査では、北陸地方の特徴をもつ縄文土器のほか、富山県産とみられる蛇紋岩製の大形耳飾りやコハク製の玉類、少量ですが島根県隠岐産の黒曜石（こくようせき）などが出土しており、山陰地方や北陸地方へこの舟を利用して航海したと推定されます。

縄文時代、縄文人は狩猟を主体として、植物を採取して生活をしていたというイメージがありますが、ヒスイやコハク・黒曜石などの原石や製品を求めて、陸路や海路で広範囲にわたって交流をしていたことを浦入遺跡は教えてくれます。　（石井清司）

縄文時代の食生活

旧石器時代（今からおよそ２万年前）の平均気温は、今よりも７～８℃低かったといわれています。この最終氷河期（ヴェルム氷河期）が過ぎると、徐々に温暖化がすすみます。気候の温暖化により氷床が溶け、海面が上昇すると、魚貝類の生息に適した内海（湾・潟湖）が現在の海岸線沿いに生まれてきます。

日本は高温・多湿の気候ですが、このような現在の気候傾向は縄文時代に始まるようで、植生も旧石器時代の寒冷な植生から、クリ・クルミ・トチなどの落葉広葉樹林帯が広がる温暖な気候に変化していきます。

この頃、縄文人はクリ・クルミ・トチなどの堅果類（けんかるい）を食べていましたが、これらはそのままでは食べることはできません。堅果類についた虫を殺し、アクを抜くために真水か灰を混ぜた灰汁につけ、さらす必要がありました。

狩りで捕獲したケモノは、これまでの旧石器時代では火で炙（あぶ）るか生で食べていたようですが、「土器」が作られるようになった縄文時代では生活が大きく変わり、堅果類やケモノの肉を煮炊きできるようになります。

日本海に面した松ヶ崎遺跡

縄文人は自然の食物を採集して食糧を確保していましたが、最近の調査成果ではムラのまわりである程度、計画的に植物を管理・栽培する「半栽培」がおこなわれていたようです。ムラの周りに

はクリの木を植えていたようです。クリは成長が早く病気にも強い植物で、秋にはクリの実を食べ、伐採したクリの木は住居の柱材としても使用していたようです。調査により、ヤマイモ・エゴマなどの栽培植物が見つかった遺跡があります。

黒色粘土層から見つかった土器と骨

京丹後市網野町の西端近く、松ヶ崎（まつがさき）遺跡で、現在の地表下約1.8ｍの深さで縄文時代前期初頭（今から7,000年前）の炉跡を含む生活面と縄文時代前期の土器や堅果類、動物・魚類の骨を含む黒色粘質土層が見つかりました。出土した遺物から復元すると、縄文時代前期の松ケ崎のムラの人々は、スズキ・カワハギ・フグ・イワシ・マダイ・ヒラメなどを食べており、漁業をおもな生業としたムラであったことが推定できます。魚以外にも獣類では、タヌキ・シカ・サルの骨や角が残っていました。山野の幸として、エゴマ・サンショウ・トチ・ヤマイモなどが見られました。ヤマイモは自生もしますが、エゴマなどは半栽培食物の可能性があり、縄文人が半栽培をしていた資料になるのかもしれません。また、人の糞が化石化したもの（糞石（ふんせき））も出土しており、分析からは魚食の割合が多かったこともわかっています。

松ヶ崎遺跡から出土した魚や獣の骨

（戸原和人）

狩猟と採集

狩猟風景想像図（早川和子作画：亀岡市教育委員会提供）

石器時代ともいわれる縄文時代、この時代には槍先や弓の先端部、銛などの狩猟具、ケモノの皮を剝ぐ石匙や穴をあける錐などの工具があります。これらの工具は石材を加工して作られます。

石器製作は、厳選された石材を採取するところから始まります。ケモノの皮や肉を切断する石器には堅くて鋭利な刃先が必要で、矢に装着する石鏃にも鋭利な刃が必要です。そのため、黒曜石（天然の火山ガラス）やサヌカイト、硬質の安山岩やチャートといった石材で製作します。一方、堅果類を砕き、粉にする石皿や磨石、敲石には鋭利は刃先が必要ありませんので、砂岩や安山岩を使います。縄文人は作る道具によって石材を使い分けていました。

砂岩や安山岩は日本列島の広範囲に分布している石材で、どこでも採集できますので、ムラの近くの河原で採取されたのでしょう。それに対して、鋭利な刃物に加工する石材は限られた地域だけに分布しています。黒曜石はガラス質の火山岩で､石英を多く含みます。主な産地としては長野県和田峠周辺、東京都神津島、島根県隠岐島などが知られています。サヌカイトは輝石安山岩といい、紀伊半島中部から四国北部などに分布しています。奈良県と大阪府の境にある二上山や香川県に良質のものが産することが知られています。

黒曜石を使ったヤリの模型

これらの石材は産地が限定されるため、遠く原産地にまで石材を採りに移動したり、どこかの中継地で完形品や製作途上の半成品、または原石などを物物交換で手に入れたと考えられます。

京都府内では縄文時代草創期を特徴付ける槍先が各地で見つかっています。亀岡市鹿谷（ろくや）遺跡では黒曜石製の木の葉の形をした石器（木葉形尖頭器（このはがたせんとうき））、サヌカイト製では福知山市引地（ひきち）城跡、亀岡市千代川（ちよかわ）遺跡などで有舌尖頭器（ゆうぜつせんとうき）（有肩尖頭器）が出土しています。石材が遠隔地にしかないことから、縄文時代の早い段階から、遠い地域と交易をしていた証拠となります。

道具に適した石材を確保すると、石材（石核）を欠き砕き、用途にあった道具に加工していきます。加工する道具には石とともに鹿の堅い角などが利用されています。

もうひとつ縄文時代の主要な食物である植物類の採集や加工にも石器は用いられています。根菜類を掘るための打製石斧、ドングリなどの堅果類を磨り潰すための石皿と磨石は生活の必需品です。そのため、これらの石器は多くの遺跡から出土しています。おもしろい例として、舞鶴市桑飼下（くわがいしも）遺跡で打製石斧が 751 本も出土しています。何に使ったのでしょうか。　（黒坪一樹）

平石を台に丸い石で磨り潰す

縄文時代のムラ

旧石器時代の人々は、食糧を求めて移動を続けていたようです。人々の住まいの状況はよくわかっていませんが、洞穴で暖をとったり、木や枝を組合わせた骨組に覆いをかけた程度の簡単な住まいであったようです。

縄文時代は、温暖な気候になり植物も多く自生するようになったことから、人々は旧石器時代と同じく食物やケモノを求めて移動を続けますが、その行動範囲も狭くてすむようになり、ついには一か所に定住し、ムラを営むようになります。

縄文時代のムラの全容がわかる京都府内での発掘調査例は、縄文時代後期のムラである城陽市森山（もりやま）遺跡など数例に限られています。多くの遺跡では縄文集落の一画を調査できた程度です。

縄文時代草創期については、京都府内での発掘調査例はなく、よくわかっていません。やや遅れた早期後半段階では、京都市上終町（かみはてちょう）遺跡で長径2.8ｍの楕円形の住居跡が見つかっています。

縄文時代前期のイエの調査例として、舞鶴市志高遺跡や木津川市加茂町例幣（れいへい）遺跡がありますが、ムラの全容がわかるものはありません。他府県の例では、この時期に大規模なムラが各地で形成されていたようです。

４本の太い柱を使った竪穴式住居跡（薪遺跡）

縄文時代中期になると、京都府内でもムラの様子がわかる調査

例があります。京田辺市薪（たきぎ）遺跡では、一辺約５ｍを測る隅丸方形の竪穴式住居跡が１基とその南側に 20 数基の土坑群がありました。この竪穴式住居跡は壁に沿って溝が２条めぐっており、建て替えがあったようです。住居の床面には屋根を支える主柱穴が４か所あり、床面の中央やや北側に、底面に粘土を貼り付け、その上に礫が散乱する状態の炉が設けられていました。また、同じ縄文時代中期のムラとして、長岡京市伊賀寺（いがじ）遺跡があります。伊賀寺遺跡では、中期の竪穴式住居跡９基と後期の竪穴式住居跡 10 基が見つかっています。中期の竪穴式住居跡の中には床の中央に１ｍを超える炉跡があり、炉の外周には石を方形に組上げた石囲炉（いしかこいろ）がありました。石囲炉は中部地方で見られるものとそっくりなものでした。

縄文時代後期の竪穴式住居跡の外周部には、人を埋葬した墓穴が見つかっています。縄文時代の墓に数体の遺体を合葬する例は知られていますが、伊賀寺遺跡の墓穴からは下顎の数から８体の成人、１体の子供が別の場所で火葬され、その後に一括して長さ 100～120cm、深さ 50cm の穴に再埋葬されていることがわかりました。骨の上には土器が供えられていました。

この墓穴に埋められていた骨は、タテ方向の細かな亀裂があり歪んでいることから、骨が乾燥する以前、おそらく肉が腐りきる前に焼かれていたことがわかりました。

何か特別な事情で火葬されたのかもしれません。

縄文時代の火葬墓（伊賀寺遺跡）

（柴　暁彦）

縄文時代の習俗

大型の石棒（薪遺跡）

狩猟と食物採取を主体とした縄文時代。この時代には天候、気候、病など自然の脅威が数多くありました。縄文時代の人々は自然の脅威に対して祈る道具として、数多くの祭祀遺物を残しています。

槍・弓・石斧が食物生活に必要な「第１の道具」と呼ぶのに対して、食物生活を離れて祈りなどに使う道具は「第２の道具」と呼ばれています。残念ながら、この第２の道具は今の私たちに何も語ってはくれませんので、民俗資料などを手掛かりにその道具の使い方を想像するしかありません。

京田辺市薪遺跡では、縄文時代後期前半の土器や石器が出土した流路から近畿地方で最大級となる大型石棒１点が出土しました。この石棒は下半分が折れていますが、頭部の笠が２段に作られ、現存する長さは30.5cmを測ります。大きさや形態は、京都府綾部市の葛礼本神社に奉納され、今も脇社の御神体として奉られている全長104cmでほぼ完形品の石棒に類似しています。ムラの広場に石棒を立て、自然の恵みへの感謝と子孫の繁栄を祈念したマツリのシンボルだったと考えられています。

長岡京市友岡遺跡では、縄文時代後期の土器とともに石冠と呼ばれる石製品が見つかっています。この石冠については、木の柄に基底部を縛りつけて使う石斧のような道具かもしれません

用途がわからない石冠（友岡遺跡）

が、その用途についてはまだわかっていません。

何らかの祈りや願いを込めた宗教的・呪術的なものだったと考えられている道具に土偶（どぐう）があります。

福知山市三河宮ノ下（そうごみやのした）遺跡の土偶は、幅 4.8cm、高さ 3.2cm、厚さ 2.3cm でハート形の頭部をしています。この土偶は、顔面に一続きの粘土を貼って盛り上げて鼻と眉が表現され、ヘラ状の工具による刺突で表現されたおちょぼ口とやや吊上がった目が、顔の可愛さを引き立てています。頭部側面には粘土を貼り付けた耳があります。右耳は失われていますが、左耳には耳飾（みみかざり）の痕跡と見られる刻みが施されています。この遺跡では、多くの土器に混じってメノウ・ヒスイで作られた耳飾・石製装飾品なども出土しています。石製の装飾品は破損したり、磨り減ったものは、磨きなおし、穴を開け直して使われており、単なる装身具以上の扱いをされていたようです。

ハート形の頭部をした土偶（三河宮ノ下遺跡）

土偶に似た遺物として、与謝野町温江（あつえ）遺跡では弥生時代前期のムラを囲む溝の中から、目・鼻・顎などを立体的に描いた人面付き土器が出土しました。頭頂部から後頭部にかけて髷（まげ）または鶏冠（とさか）のような表現があります。このような人の顔を土器に付けた人面付き土器は、本体である土器の部分がなく、容器のふた部分や口の部分など、どこに貼り付けていたものなのかはわかりません。なお、容器に人面を付けた土器が関東では納骨の容器として使われた例があります。（竹原一彦）

人面付き土器（温江遺跡）

けものをもとめて

縄文時代の最初の頃は、旧石器時代と同様、獣を突くヤリが使われていましたが、徐々に弓矢に変わっていきます。

ヤリ・弓矢ではケモノを一撃で仕留めることは難しいでしょう。ヤリや矢を射かけて、ケモノが弱るのを追いかけながら、待っていたと思われます。しかし、縄文人はケモノの後を追いかけていただけではないようです。

落とし穴の復原図

南丹市天若（あまわか）遺跡では、直径１ｍ前後の大きさ、深さ50cmほどの穴が数多く見つかりました。この穴の底の中央には杭を固定したと推定される穴がありました。このような穴は集落の周囲で見つかっており、ケモノを捕獲するための「落とし穴」と考えられています。

杭跡を残す落とし穴（天若遺跡）

山に入ると草や樹木が途切れ、道になっているところがあります。これが「けものみち」と言われるものです。縄文人はそこに落とし穴をつくり、穴に落ちたケモノを槍で捕獲したと想像できます。　（石井清司）

弥生時代の京都

はじめに

弥生時代は大陸からの様々な影響を受けて、大きく生活様式が変化した時代です。西日本では弥生時代の始まりとともに米つくりが本格化したことが予想されます。

京都府内では京丹後市函石浜遺跡、京都市深草遺跡や長岡京市雲宮遺跡など弥生土器研究の基礎資料が出土した遺跡もあります。

弥生時代は土器の変化や文化内容から、前期・中期・後期に分けられますが、始まりと終わりの年代については現在様々な意見があり決着を見ていません。

弥生時代の集落

京都府内で最も古い弥生時代人たちの生活の跡は、京都市下鳥羽遺跡、長岡京市雲宮遺跡で発見されています。

前期の遺跡には京丹後市扇谷遺跡や京丹後市途中ヶ丘遺跡、亀岡市太田遺跡などが挙げられます。また、これらの集落の中には、平地につくられたものと、高地性集落と呼ばれる丘陵上につくられたものがあります。

中期になると自然堤防上や河岸段丘上に大規模な遺跡がつくられるようになります。福知山市観音寺遺跡、舞鶴市志高遺跡、南丹市八木町池上遺跡、長岡

弥生時代のムラの想像復原図

京市神足遺跡、久御山町市田斉当坊遺跡などでは広い範囲に遺構が分布しており、集落規模が大きかったことがうかがえます。

丹後地域では、与謝野町日吉ヶ丘遺跡や京丹後市奈具・奈具岡遺跡など台地上につくられた大型集落が認められます。斜面の山側を削り込んで、その土を谷側に盛土することによって住居を造る集落が特徴的で、このような形態の集落は古墳時代まで続きます。

食物の生産

弥生時代に入ると本格的に各地で水田耕作が行われるようになります。

灌漑用の矢板が打ち込まれた溝（蔵ヶ崎遺跡）

京都市京都大学構内遺跡では、前期の水田跡が見つかっています。与謝野町蔵ヶ崎遺跡からは、弥生時代中期の水路に矢板を打ち込んだ灌漑用水路と考えられる溝が見つかっています。また、八幡市内里八丁遺跡や京都市東土川遺跡では、小規模に区画された水田跡が多く見つかりました。

稲株痕跡がのこる水田跡（内里八丁遺跡）

農耕に必要な道具は集落内で生産されていたようで、雲宮遺跡や東土川遺跡では木製農耕具とともにその未製品も発見されています。

弥生時代には稲作に注目が集まりますが、雲宮遺跡ではシカ・イノシシ（ブタ？）の骨が出土しており、縄文時代の主要な獲物である２種類の動物が継続して捕獲され食べられていたことがわかります。また、京丹後市の奈具谷遺跡では、弥生時代のトチの実を加工した施設が発見されており、弥生時代においても狩猟と植物採集は一定の割合で続けられていたことがわかりました。

道具の生産

弥生時代の土器は、器面に施される文様に変化はあるものの、縄文土器と比べると造形的に簡素な形態のものが多くなります。

弥生時代前期の土器の形態や模様は、全国的に大きな違いはありませんが、中期以降では地域ごとの特色がでてきます。京都府の北部と南部においても土器の形態や文様に差異が生じており、文化圏の違いとして認識できます。

弥生時代には金属器が大陸からもたらされました。向日市鶏冠井遺跡では銅鐸の鋳型が出土し、青銅器を生産した形跡が認められます。隣接する長岡京市神足遺跡（長岡京跡右京第 807 次調査）では銅剣が出土しています。また、京都府内には銅鐸が発見された遺跡が７か所あります。

鉄器が出土した遺跡としては、京丹後市奈具岡遺跡があります。この遺跡では、玉作りに付随して鉄器が使われていました。分析により鉄素材は、朝鮮半島経由で中国からもたらされたことがわかりました。そのほか、鍛造鉄斧や鋳造鉄斧、鍛など多くの鉄器が出土していま

弥生中期の土器（池上遺跡）

磨製石剣（市田斉当坊遺跡）

す。全国的に見ても京都北部のこの時期の鉄器の出土量は多く、大きな勢力を有していたと考えられます。

鉄器が用いられていましたが、弥生時代においても石器は主要な道具でした。

石器は大きく分けると打製石器と磨製石器に分けられます。打製石器の多くは、サヌカイトと呼ばれる火山岩から作られており、石鏃・錐・石小刀・石剣などがあります。石材は香川県金山や奈良県二上山からもたらされました。磨製石器には、石剣・石庖丁・石斧・石鏃などがあります。磨製石器の石材となる粘板岩については丹波地域を中心に多くの露頭があり、京都では磨製石器の割合が他地域に比べ多い傾向が見られます。

弥生時代の墓

弥生時代になると一定の空間を持った墓が出現します。墓の多くは「方形周溝墓」と呼ばれるもので、四角く溝をめぐらせ、内側に墓穴を掘り、遺体を埋葬したものです。方形周溝墓は、南丹市池上遺跡、京都市東土川遺跡、大山崎町下植野南遺跡、久御山町市田斉当坊遺跡のように、溝を共有して連続的に築かれるものが一般的です。

密集してつくられた方形周溝墓（下植野南遺跡）

北部では、弥生時代

前期から中期初頭には集落から離れた丘陵上に「台状墓（だいじょうぼ）」と呼ばれる墓が築かれます。中期になると、南部と同様に集落の近くに墓を築くようになります。このなかには方形周溝墓より大きな「方形貼石墓（ほうけいはりいしぼ）」と呼ばれる墳丘を石で装飾した墓が見られます。この貼石墓は、与謝野町寺岡（てらおか）遺跡や宮津市難波野（なんばの）遺跡などで見つかっています。後期からは再び集落から離れた丘陵上に台状墓を築きはじめ、鉄製品や玉類などの副葬品が納められています。

墳丘を石で装飾した墓（寺岡遺跡：与謝野町教育委員会提供）

大型の墳墓（赤坂今井墳墓）

やがて、北部では京丹後市赤坂今井（あかさかいまい）墳墓のような大型の墳墓が出現します。こうしたことから、丹後を中心に畿内中央部とは異なる独自の勢力が存在したものと考えられています。南部の後期の墓としては、木津川市木津城山（きづしろやま）遺跡で３基の台状墓から木棺墓 14 基が見つかっていますが、木棺墓に大きな格差はありません。格差が顕著になるのはもう少し新しい時期である城陽市芝ヶ原（しばがはら）古墳が出現してからかもしれません。

（中川和哉）

丘の上のムラ

弥生時代、稲作の定着により人々は大規模なムラを形成します。

ムラには、生産地である水田に近い場所につくる「平地の集落」と丘陵の斜面や山頂に営まれた集落「高地性集落」があります。

縄文時代のケモノからムラ人を守るムラから、弥生時代には他のムラ人からムラを守るために集落の周りに堀をめぐらした「環濠集落（かんごうしゅうらく）」が生まれます。この環濠をもつ集落・ムラは、稲作文化とともに中国・朝鮮半島から伝わったムラの形態です。

平地のムラでは、数基の竪穴式住居からなる小規模なムラと、数十基の竪穴式住居と食糧としての米やムラの財産を保管する倉庫、時にはムラの代表者が儀式をおこなう大型建物をもつ大規模なムラがあります。

大規模なムラは、各河川流域単位で存在することが多く、その地域の「拠点（きょてん）となる集落」と考えられています。この拠点集落では、地域の代表者が生まれ、他地域からの交易品も運ばれてきました。

京都府内では、長岡京市神足遺跡、南丹市池上遺跡、京丹後市途中ケ丘遺跡などのムラが拠点集落と考えられます。

丘陵斜面に掘られた溝（扇谷遺跡：京丹後市教育委員会提供）

平地につくられたムラに対して、丘陵または山頂につくられたムラがあります。このような高い場所にあるムラは、生活していくのに不便なところです。たとえば、飲料水の確保や水田耕作のた

めに山の上と平地を行き来しなければなりません。このような高い場所にムラをつくったのはなぜでしょうか。最も有力な説は、なんらかの争いごとが起こったために、このような高い場所に集落を営んだと言う説です。

ムラの形態は、平地に営まれたムラとともに、ムラ・地域をまとめる過程で戦乱が生まれ、その戦乱時のムラとして山頂・丘陵に営まれた高地性集落が生まれます。『魏志倭人伝』に書かれた「倭国大乱」の頃に高地性集落が増加したとも言われています。

山頂につくられた高地性集落（今林遺跡）

丘陵につくられたムラ（木津城山遺跡）

丘陵・山頂にあるムラの例としては、京丹後市扇谷遺跡や南丹市今林遺跡、木津川市木津城山遺跡、同椿井遺跡などがあります。

木津川市木津城山遺跡は、現在の木津川の水面から 70 ～ 80 m も高いところで、10 基前後の竪穴式住居跡が見つかっています。椿井遺跡では竪穴式住居跡とともに焼け土を含む掘り穴があり、緊急時には「のろし」を上げて通信を行っていたとも言われています。

（筒井崇史）

玉作りのムラ

身体装飾という言葉があります。これは、服飾・アクセサリー・化粧などの総称です。

私たち現代人は、身だしなみとして、これらの装飾を日常のこととしていますが、古代においてはこうした装飾の一つ一つに特別な意味がありました。特に、貝・石・ガラス・金属など当時貴重だった材料で作られた首飾り・頭飾りなどの玉類は、社会的地位、役割などを示すシンボルとして重要なものでした。

縄文時代には、翡翠(ひすい)製の大珠や琥珀(こはく)製の玉、滑石製の耳飾りなどが作られましたが、こうした装身具は、ムラの中でもごく限られた人々が身につけたものでした。弥生時代には、朝鮮半島の影響を受けて、石製とガラス製の玉類が流行します。石製玉類の素材として、緑色凝灰岩製の管玉・勾玉がたくさん作られるようになります。

地域を代表するような大きなムラで玉作りをするようになり、出土例も増えます。それでも、誰もが玉で身体を飾ることができるというわけにはいきませんでした。

ムラの多くの人は、水田耕作に従事しますが、その反面、計画的に作業でき、水田耕作作業から離れた余剰が生まれ、鉄製品の加工、特殊な調度品、身につける装飾品などを生産する専門集団が生まれるようになります。

玉作りのムラ（久御山町市田斉当坊遺跡）

専門集団は、その製品の材料を仕入れ、特殊技

術によって装身具を製作するムラも生まれます。玉・鉄・塩などに従事する専門集団のムラが生まれるのもこの弥生時代です。

今から2,000年以上前の弥生時代中期（中期中～後半期）に、こうした玉類を専門に作っていた集団のいたムラが、京丹後市弥栄町奈具岡遺跡と久御山町市田斉当坊遺跡で見つかりました。

水晶製玉類の原石から製品まで（奈具岡遺跡）

奈具岡遺跡は、日本海に注ぐ竹野川右岸の狭い谷間にあり、緑色凝灰岩や水晶を材料として管玉や勾玉、小玉などいろいろな種類の玉が作られていました。玉を生産した竪穴式住居跡の遺物を観察すると、水晶を中心に玉を生産した工房、水晶よりも加工がしやすい緑色をした碧玉で玉をつくる工房、原石を管玉に作りやすいように荒割りして管玉に加工する前段までの作業をする工房など、それぞれの竪穴式住居内で分業をおこなっていることがわかりました。また、日本では数少ない鉄で玉作りの専用工具を作っていたこともわかりました。奈具岡の玉作り工人達は、広い範囲から貴重な材料を手に入れ、高度な技術を駆使して玉作りをしていたことが明らかになりました。

同じ玉作りの工房跡に久御山町市田斉当坊遺跡があります。この遺跡の竪穴式住居跡からは、多量の碧玉製の未製品や玉に加工するまでの石ノコや玉を磨く砥石、糸を通す穴をつくる石針など玉作りの工程を考える資料が多量に出土しました。

（田代　弘）

船着き場

私たちは、たくさんの荷物を運んだり、遠くへ出掛けるのに、船（海路）、自動車（陸路）、飛行機（空路）を利用することができます。自動車、飛行機がなかった昔は、その役割のほとんどを舟に頼っていました。

船の歴史は古く、人々が海峡を渡って移動をはじめた後期旧石器時代には、すでに利用されていたと考えられています。旧石器時代の船は見つかっていませんが、伊豆諸島神津島産の黒曜石を利用して作られた石器が関東地方一円に分布することや、西日本に分布する剝片尖頭器が朝鮮半島の旧石器文化と共通することなど、船を利用した行き来があったことを裏付けています。

縄文時代には、船が盛んに利用されたことが確かめられています。縄文時代の船は、丸太を刳り抜いて作った丸木舟で、日本全国で80例ほど出土しています。

縄文時代の舞鶴市浦入（うらにゅう）遺跡の丸木舟もその一つです。浦入遺跡の丸木舟が出土した場所では、長方形の平たい石が見つかっていて、舟を停泊させる碇石（いかりいし）と考えられるもの、その近くに船を括りつけた桟橋と思われる杭がありました。

由良川の自然堤防上につくられたムラ（志高遺跡）

弥生時代になると、準構造船が作られ、船が大型化します。積み荷も多く積める

ようになり、日本各地や朝鮮半島との間で往来が盛んになりました。鳥取県青谷上寺地遺跡では、板に船団を組んでいる様子を描いた絵があり、弥生人が海洋に出ていったようすが想像できます。

土や石を積み上げて造った船着き場（志高遺跡）

弥生時代中期には、船荷の積み下ろしや、補修をしたりする船着場が造られます。『魏志倭人伝』に登場する一支国と見られる長崎県壱岐にある原ノ辻遺跡では、弥生時代中期の石組みを持つりっぱな船着場が見つかっています。日本列島と朝鮮半島との交易で行き来した船が繋留された船着場でしょう。

舞鶴市志高遺跡で見つかった堤防状遺構も、こうした船着場の一つと考えられるものです。50ｍ前後の堤防状遺構の中央部に陸橋がついたＴ字形の遺構で、川に面する部分を貼り石で護岸していました。日本海側屈指の河川である由良川に面しており、由良川沿岸の水上交通の拠点として造られた船着場と考えられています。

由良川の河口部は、丹後半島の東の付け根にあり、丹後地域と丹波地域を結ぶ大動脈です。弥生時代後期の丹後地域は、たくさんのガラス製品、鉄製品を保有する豊かな地域であったことがわかっています。これらは海上交通を利用した交易により、もたらされたものと考えられています。

大型の準構造船が、日本海沿岸各地を旅して得た豊かな物産を積んで、由良川を遡上する様子が想像されます。

（田代　弘）

海を臨む貼石墓

弥生時代、稲作の定着により人々は肥えた土地をもち、多くの食糧・富をもつムラとそうでないムラとで貧富の差が生まれます。ムラのなかでは、ムラ人をまとめる役割の人、ムラとムラをまとめる人が生まれます。そして、ムラ人のなかにムラを代表する者が生まれます。これらの代表者はムラ人の墓とは違った埋葬がおこなわれていたようです。

弥生時代前期には、大陸から方形周溝墓と呼ばれる、溝で区画された墓が伝わります。この方形周溝墓の墓は、弥生時代前期の頃には時として石製の武器が含まれるだけで、墓のなかに特別な遺物（副葬品）は含まれません。中期になると墓の上や溝内および棺のまわりに土器を納めるようになります。時には二重の棺を作り、丁寧に死者を埋葬しています。後期になると棺の中には朱を敷き、多量の玉類を納めるものも見られます。墓の変遷をたどると、弥生人のなかで徐々に格差が顕著になってきたことがわかります。

京都府北部、丹後地域では弥生時代中期（今からおよそ2,100年程前）の墓がいくつか見つかっています。その墓のなかには方形の区画溝で囲まれたもので、墳丘の斜面に石を貼りつけた貼石墓（はりいしぼ）と呼んでいる墓があります。この方形貼石墓は墳丘の流出を防ぐことを兼ねてか、石で表面を化粧したようです。溝

石を貼りつけた墓（日吉ケ丘遺跡：与謝野町教育委員会提供）

に囲まれたその中央の平坦面には死者を納めた埋葬施設があります。京都府内ではこれまでに丹後地域及び丹波北部地域だけで見つかっていますので、日本海側の墓の形と思われます。

与謝野町日吉ケ丘遺跡の貼石墓は長辺 30 ｍを測り、その中央に棺を埋める墓穴を掘り、木棺を納めていたようです。木の棺は土に還っており、その痕跡だけが確認できました。棺内には多量の朱がまかれ、400 個を超える碧玉製の管玉が見つかりました。死者を送るために多量の玉を用意したことがわかります。

日吉ケ丘遺跡と同じ時期の方形貼石墓が、宮津市難波野遺跡にあります。難波野遺跡は、日本三景のひとつ天橋立の北側の狭小な平地上にあり、海岸がすぐそばに位置しています。ここでは２基の方形貼石墓が見つかり、そのうちの１基は一辺が 16 ｍ程度の大きさで、墳丘の高さは約 0.6 ｍ、東辺では周溝底部からは約１ｍあります。貼石は石の長辺を貼石墓の辺に直交して埋め置いています。貼石に使用されている石は、いずれもやや摩滅した花崗岩で、難波野遺跡周辺から採取されたものと考えられます。

丹後地域の方形貼石墓によく似た墓ですが、各コーナー部分が張り出した四隅突出型墳丘墓が中国山地の広島県側や島根県松江市などで見つかっています。弥生時代後期、各地域で地域の特徴が顕著になる時期ですが、日本海地域でも地域ごとに土器の様相・墓の形態が異なっていたようです。

こうした地域ごとのまとまりが、中国の史書が伝える「クニ」なのかもしれません。

（石尾政信）

海沿いに造られた方形貼石墓（難波野遺跡）

王の墓

王の墓（赤坂今井墳墓）

稲作文化が日本（倭国）に定着し、発展をしていく弥生時代中期（約2,100年前）から、ムラ人のなかにそのムラやムラがある平野、さらにクニをまとめる代表者「王」が生まれるようになります。

王は代表者としてムラ・地域をまとめていきますが、王が亡くなると、ムラ人の埋葬方法とは違った特別な墓をつくるようになります。この王の墓は、たとえば出雲・吉備・大和・河内というクニごとに墓の形態・内容が異なっています。

丹後のクニでは京丹後市峰山町赤坂今井墳墓がその王の墓と考えられています。この墓は、現在の福田川河口から、峰山町の中心部に至る狭い谷を見下ろす位置にあり、当時、この道を通る人々の目を引く存在であったものと考えられます。弥生時代後期末頃（約1,800年前）に造られた墓です。墳丘は、丘陵を削ったり、削った土を利用して盛土を行って、南北39ｍ、東西36ｍ、高さ４ｍもの大きさをもつ四角形に整形されています。また、周囲には幅５～７ｍの平坦な面をつくっていました。この墳丘の上からは６基、周辺の平坦部では未調査の部分もありますが16基以上の墓穴が見つかっています。これらは、王とそれを支えた人々の墓と思われます。

墳頂部の墓穴内（第４主体部）を調査すると、葬られていた人の頭と判断される位置で、朱とともに多数のガラスや緑色凝灰岩製の

玉類が出土しました。玉類は頭飾りとして用いられたものと考えられます。また、被葬者の右腰あたりから鉄剣や鉄製の鎗（やりがんな）が出土しています。豊富な副葬品を持つことで注目されましたが、この人物は２番目の地位の人と見られ、もっとも地位の高い人の棺内（第１主体部）は未調査です。

大型の埋葬施設（赤坂今井墳墓第４主体部）

与謝野町大風呂南（おおぶろみなみ）墳墓も赤坂今井墳墓に匹敵する王墓と考えられます。ここでは２基の方形墳墓を検出し、１号墓の中心埋葬施設（第１主体部）からは鉄剣 11 振などの鉄製品や銅製の腕飾り（銅釧（どうくしろ））13 点、ガラス釧（くしろ）１点などが副葬されていました。当時、鉄製品やガラスは原材料を中国大陸や朝鮮半島からの輸入に頼っており、最先端のハイテク素材といってもよい非常に貴重なものでした。

第４主体部の朱と頭飾り（赤坂今井墳墓）

丹後半島では、北部九州と並んで多量の鉄製品や玉類が見つかっており、朝鮮半島と活発な交易を行っていたものと見られます。当時は「邪馬台国の卑弥呼」が擁立される直前に当たり、倭国内は戦乱期にあったと記されています。そのなかで、丹後半島を治めた王は、交易をもとに多量の鉄製品を蓄積しており、倭国内での政治的な重要性は非常に高かったと考えられます。

赤坂今井墳墓・大風呂南１号墓の被葬者はこうした交易を支配した人物と推測されます。

（石崎善久）

戦いの犠牲者

弥生時代は、稲作が行われ、のどかな風景を思い浮かべる方が多いと思いますが、食物生産力の増加は、ムラとムラの戦いを激化させたと考えられます。人が人を殺した証拠は縄文時代にもありますが、それは狩猟用の道具を用いたものです。弥生時代には、大陸から有用な文化とともに、人殺しに特化した武器も入ってきました。

九州などでは首が切り落とされた遺体や、剣や鏃（やじり）が刺さった遺体が見つかっており、戦いなどで殺された人と考えられています。

近畿地方では多くの場合、骨などは腐って検出されませんが、稀に遺体が葬られていたと考えられる場所から石製の武器が出土します。こうした場合、武器は死者に奉られた副葬品と考えることもできますが、出土遺物を詳細に観察すると、骨に当たって破損したものが多く含まれていることがわかります。こうしたことから、見つかった武器によって絶命した可能性が高いと考えられます。

京都府内では京都市東土川（ひがしつちかわ）遺跡、大山崎町下植野南（しもうえのみなみ）遺跡、南丹市池上（いけがみ）遺跡、京丹後市豊谷（とよたに）墳墓群などで、石製武器が出土した墓が発見されています。特に東土川遺跡では、方形周溝墓の溝の中を掘りくぼめて安置した木棺の中から、磨製の石剣（せっけん）や打製の石鏃（せきぞく）が数多く出土しました。多数の矢を受け、剣で刺され壮絶な死を迎えた人であることがわかります。

石剣・石鏃の入った埋葬施設（東土川遺跡）

（中川和哉）

古墳時代の京都

はじめに

古墳時代とは、「古墳」と呼ばれる高塚が、東北地方から沖縄を除く九州地方までの広い範囲で造営された時代です。

弥生時代に水田経営をめぐって誕生したムラの代表者が、より安定的な水田経営をめざし、集団を大きなものとしていきます。その結果、弥生時代の終わりころには、各地に有力な首長層が誕生することになり、やがて、彼らは、穀物に代表される富の蓄積や交易を通じて、大和を中心とした広域な政治的まとまり（ここでは「ヤマト政権」と呼ぶことにする）を誕生させます。

彼ら首長層が権力の証として大きなお墓を築くことを志向し、政治的なまとまりを示すものとして、前方後円墳を築いたのではないかと考えられています。また、前方後円墳は、盛大な首長霊（権）の継承儀礼を行うための舞台であったという考え方も有力です。

国内が大和を中心にまとまったことは、前方後円墳が各地に築かれること以外にも、副葬される銅鏡や石製腕飾類が近畿地方を中心として全国に分布すること、そして炊飯具などの暮らしの道具が地域色を失っていくことからも推定できます。

「青龍三年銘鏡」（大田南５号墳：京丹後市教育委員会提供）

古墳時代の墓

古墳の形には前方後円墳以外にも、前方後方墳、円墳、方墳などの墳形があり、その規模や形は、被葬者の政治的・経済的立場を表すものと考えられています。府内には大小1万基程度の古墳がありますが、その多くは、直径10ｍ前後の円墳や方墳で、各地の有力農民層の墓だと推定されます。

古墳時代の始まりについては諸説ありますが、最も古い大型の前方後円墳である奈良県桜井市箸墓古墳の築造をもって古墳時代の開始とする意見が有力です。この古墳は3世紀中頃の築造であることが、副葬された遺物の推定年代や理化学的な年代測定法により明らかになりつつあります。古墳時代の終わりについては、前方後円墳が築かれなくなり、寺院の造営がはじまる6世紀後半頃とする考え方が優勢です。

京都府は南北に長く、大和政権の発祥の地に近い山城地域、桂川上流域の南丹波地域、由良川流域にあたる北丹波地域、海を擁する丹後地域と地域ごとに様相が違っています。

山城地域では、向日丘陵に3世紀後半から4世紀にかけて100ｍ級の前方後方墳（向日市元稲荷古墳）や前方後円墳（向日市五塚原古墳、同妙見山古墳、同寺戸大塚古墳）が次々と築かれます。同じ頃、南山城地域では、全長180ｍを測る大型の前方後円墳である木津川市椿井大塚山古墳が築かれます。この古墳からは、三角縁神獣鏡33面以上を含む計37面以上の銅鏡が出土しました。三角縁神獣鏡は、全国の首長墳から出土しているもの

府内最古の古墳のひとつ椿井大塚山古墳

と同じ形で造られたものが多いことから、ヤマト政権が全国の首長と同盟関係を結ぶのに深く関わった人物の墓ではないかと推定されています。なお、5世紀になると宇治市から城陽市にかけた台地上に久津川車塚古墳（全長180 m）を中心とした久津川古墳群が築造されます。前期の古墳が少ないこの地に府内最大の古墳群が築かれるのは、この頃、ヤマト政権の大王墓が大和から河内に移動することに連動するものと考えらます。

久津川古墳群の想像復原図（早川和子作画）

古墳出現以前に全長52 mの前方後円形を呈する南丹市黒田古墳を築く南丹波地域では、4世紀後半になって全長84 mの南丹市園部垣内古墳が出現します。そして、隣接する兵庫県篠山市に全長140 mの雲部車塚古墳が5世紀に築かれる頃には、亀岡盆地にはたくさんの方墳が築かれています。

北丹波地域では、4世紀に景初四年銘の盤龍鏡が出土した全長40 mを測る福知山市広峯15号墳が築かれて以降、全長30 m前後の前方後円墳が小水系ごとに築かれています。この地域は円墳や方墳が優勢な地域で、5世紀には綾部市私市円山古墳（直径71 m）や同聖塚古墳（一辺54 m）、福知山市妙見古墳（一辺43 m）などがこの地域を代表する古墳です。

丹後地域では、4世紀の中頃から5世紀前半にかけて、大きな前方後円墳が築かれています。最初に野田川流域に与謝野町白米山古墳、同蛭子山1号墳が築かれ、5世紀を前後する頃には大きく海

府内最後の古墳のひとつ綾部市山尾古墳

八角形墳（亀岡市国分 45 号墳）

が入り込んでいた潟湖のほとりに、日本海側最大の前方後円墳である京丹後市銚子山古墳、同神明山古墳が築かれます。その後、竹野川河口をさかのぼった内陸部に黒部銚子山古墳が築かれますが、それ以降この地域には大型の前方後円墳は築かれません。

京都府内最後の前方後円墳は、6 世紀後半に築かれた巨大な横穴式石室をもつ京都市右京区の蛇塚古墳です。6 世紀には、府内各地に横穴式石室や木棺を埋葬施設とする群集墳が築かれ、6 世紀後半には、丹後半島の中央部、綾部市、八幡市、京田辺市と限られた地域で横穴墓群が築かれています。群集墳や横穴墓群は、飛鳥時代にまで造墓活動が続くものがあります。階段状の列石で化粧された綾部市山尾古墳や八角形の墳形をもつ亀岡市国分 45 号墳などは、律令国家に移行しつつあるヤマト政権から認められた地域首長と考えられます。

古墳時代のムラ

古墳時代の人々の多くは、弥生時代に引き続いておもに竪穴式住居で暮らしていますが、5 世紀頃には屋内炉に代わって竈が一般化するようで、南丹市室橋遺跡などでは、竈付き住居が多数見つかっています。竪穴式住居跡とともに、掘立柱建物跡が見つかることもあり、これらは、米などを蓄えた高床の倉庫の可能性も考えられま

す。多数の掘立柱建物跡とともに、朝鮮半島系土器、鍛冶滓、製塩土器などが出土した精華町森垣外遺跡では、平地式の大壁住居なども見つかっおり、渡来系技術者集団の集落内での居住が推定されます。しかし、このような集落は少数派で、府内で掘立柱建物が一般化するのは飛鳥時代以降になります。

木を刳り抜いて作られた導水施設（浅後谷南遺跡）

祭祀行為に係ると考えられる遺構も幾つか見つかっています。向日市中海道遺跡では、建物の周りを堀で囲んだ神殿風の建物が見つかっています。京丹後市浅後谷南遺跡では、古墳を飾った形象埴輪に表現されているような導水施設が見つかっており、水に係る祭祀行為に使われたものと考えられます。宮津湾の出口に近い宮津市難波野遺跡での多量の土器と玉類の出土状況や、舞鶴湾の出口にあたる舞鶴市千歳下遺跡での銅鏡片、玉類、鉄製品、土器などの集中的な出土状況は、海上交通の安全祈願などに係る祭祀行為の結果だと考えられます。

府内での水田遺構の検出は多くありませんが、古墳の築造に係る大規模な土木工事技術の存在から水田開発も飛躍的に進んだことが予想されます。亀岡市池尻遺跡や南丹市室橋遺跡で見つかった幅３ｍ、深さ２ｍを測る大型の溝などは、灌漑用水路の可能性が考えられます。ヤマト王権が大陸から技術者を迎え、地方豪族の招聘の下、鉄生産、須恵器生産、埴輪生産などが府内各地で行われています。６世紀には、京丹後市遠處遺跡で砂鉄を原料とした鉄生産、南丹市の大向窯跡群で須恵器生産、木津川市の平城山丘陵で埴輪生産などが行われています。

（肥後弘幸）

首長の墓

３世紀後半、『魏志倭人伝』によると、卑弥呼の墓として径百尋の塚を築いたと描かれています。最古の定型化した古墳として奈良県桜井市箸墓古墳が考えられており、大和・河内・播磨・吉備などの連合政権が、その象徴として築かれた古墳とも言われています。

古墳は民衆の墓とは隔絶したもので、首長の墓として全国一斉に造られるようになります。古墳は古墳社会を主導したヤマト政権との関わりの深さによって、その墳形が前方後円墳であるのか、円墳・方墳であるのかが決まったと考えられています。その表面を飾る葺石や埴輪の有無、埋葬施設が割竹形石棺か木棺か、といったこともヤマト政権との関係で決められたと考えられています。自由に大きさ・形・埋葬方法を決めることができるというものではありませんでした。

京都府北部の丹後半島では、京丹後市神明山古墳や同網野銚子山古墳など、100ｍ以上を測る大型の古墳が５世紀前半までに造られますが、５世紀後半以降、100ｍを超える前方後円墳は造られなくなります。ヤマト政権が日本海の対岸にある大陸を意識して、大規模な古墳を造らせましたが、５世紀中ごろにはその役割が終わり、大型の古墳を造る必要がなくなったためとも言われています。

日本海に面して造られた網野銚子山古墳（京丹後市教育委員会提供）

粘土で覆われた棺（瓦谷１号墳）

京都府南部では、大型の古墳である木津川市椿井大塚山古墳や向日市元稲荷古墳が３世紀の間に造られますが、椿井大塚山古墳に続く４世紀後半になると、100ｍを測る前方後円墳は造られません。数本の中小河川で区分される小地域ごとに、中規模な前方後円墳や前方後方墳が造られるようになります。

木津川市瓦谷（かわらだに）１号墳は、旧木津町域を生産基盤とした集団の長が、古墳社会を主導するヤマト政権に自らの支配権を承認してもらった証に造られた墓です。この古墳は、段築と葺石をもたない全長51ｍの前方後円墳で、後円部の中心に長大な埋葬（まいそう）施設が２基ありました。棺は刳（く）り抜き式の木棺を多量の粘土でくるんだ粘土槨（ねんどかく）と、粘土による密封が見られない長大な箱形木棺が、主軸を南北方向に揃えて並んでいます。棺の長さはともに７ｍを超え、内部を仕切板で３つの空間に分け、中央の空間に人を葬っていました。

棺の内外から、銅鏡・武具・武器・竪櫛（たてぐし）・ガラス玉などの多様な副葬品（ふくそうひん）が出土しました。なかでも、列島内ではまだ定式化していない鉄製の甲冑や、40本を一束にして容器（靫（ゆぎ））に納められた状態の鉄製・銅製の鏃などは注目されます。１号墳の周辺には１号墳に従属したかのように、埴輪を利用した棺（埴輪棺）が多数あります。この棺に使った埴輪には蓋形埴輪・盾形埴輪のほか、棺に使用するために作られた特殊な埴輪が使われていました。１号墳の豊富な副葬品や埴輪から、旧木津町の地域を生産基盤とした集団の首長墓であることが想像できます。

（伊賀高弘）

割られた銅鏡

京都府内の発掘調査では、数年に１回程度の割合で古墳時代前・中期の古墳の調査が行われます。その時に調査担当者が期待する遺物として青銅製の鏡があります。発掘調査担当者であれば一度は掘り当ててみたい遺物です。

この時代の鏡は、人の姿や顔を見る手鏡ではなく、古墳に埋葬された人やその継承者が権威を誇示するための道具――威信財として使われたようです。時には「ヤマト政権」から同盟関係の証として配布されたと思われます。鏡を作る材料やその技術は、限られた集団でしか保持していなかったと考えられるからです。

鏡は銅と錫の化合物である青銅製で、表面を凸あるいは凹面で平滑に仕上げ、背面には想像上の獣や神、幾何学文様を描いています。

京丹後市大田南５号墳では、「青龍三年」（西暦 235 年）の年号が書かれた鏡が出土しました。中国の三国時代の「魏」の国から贈られた鏡と考えられています。福知山市広峯 15 号墳では「景初四年」（西暦 240 年）という存在しない年号の鏡も出土しています。このような鏡は木箱や布にくるまれて大事に棺の中に納められますが、時には意図的に鏡を破砕している例があります。このような鏡を出土する古墳はほんの一部ですが、日本各地で点々と見られます。

棺の上から出土した鏡（黒田古墳：南丹市教育委員会提供）

京丹後市愛宕神社１号墳は、一辺約 20 ｍの方墳で、長さ約６ｍの木棺に死者とと

もに銅鏡、鉄刀、鉄斧、鉄鎌、櫛、玉類などが納められていました。鏡は死者の頭部周辺に完全な形で置かれるのが一般的ですが、この銅鏡（獣形鏡）は破片を重ねて死者の足元の棺の壁に立て掛けた状態で出土しました。割れ方や出土した位置から、故意に割られて納められたと想定できるものです。また、南丹市の黒田古墳では割竹形木棺の中に破砕した双頭龍文鏡が１面あり、鏡を取り上げて復元していくとほぼもとの形に復元できました。福知山市寺ノ段古墳の方格規矩鏡も割られた鏡の可能性が高いと考えられています。

復元された黒田古墳の鏡（南丹市教育委員会提供）

このような破砕された状態で鏡が出土する古い例は、九州の弥生時代後期に見られますが、全国的には弥生時代末から古墳時代のはじめに集中し、それより新しい時代の例は非常に少なくなります。また、ひとつの古墳群全体の中で割られた鏡は１、２点しかなく、しかもその銅鏡の多くは、古くから伝えられた中国製のものです。

以上のことから、鏡を破砕して副葬するという行為は、各地域の有力者の死に際して行われた儀式のひとつと考えられます。そして弥生時代から古墳時代へと時代が変わる頃に限って行われたのは、社会の変化とそれに伴う勢力の再編とに関係する儀式だったのではないでしょうか。

なお、古墳時代前期を代表する三角縁神獣鏡は破砕の対象となっていません。

（長谷川　達）

辟邪の埴輪

古墳のなかには、墳丘に様々な埴輪を樹立したものが見られます。ヤマト政権が、定型化した前方後円墳の一部として採用され、最初期の箸墓古墳では特殊器台・特殊壺形埴輪が使われています。特殊器台・特殊壺形埴輪の流れを汲んで、円筒埴輪・朝顔形埴輪が生まれ、続いて家の形を模した家形埴輪が作られます。ただ、形象埴輪も古墳時代前期と中期では、その形を模する対象物が変化します。

４世紀中頃には武具・武器、鳥・水鳥を模した形象埴輪が生まれますが、馬は５世紀前半、その後に人物埴輪が生まれます。

５世紀の前半までの土器は野焼きでした。５世紀前半に朝鮮半島から須恵器と呼ばれる焼き物が日本にもたらされます。須恵器はこれまでの野焼きで焼かれた土師器とは違って、1,000℃以上の温度で焼かれた硬質なもので、それを焼くための窯が造られます。

巫女形埴輪（塩谷古墳群）

埴輪も５世紀中頃以降には、この須恵器の窯で焼かれるようになります。窯で焼かれた埴輪はそれまでの野焼きで焼かれた埴輪に比べて硬質です。野焼きのものは、黒斑と呼んでいる黒色をした大きな斑点がありますが、窯で焼かれたものにはなく、野焼きか窯で焼いたものかが識別できます。

５世紀中頃以降に武人・巫女などの人物を模した埴輪がつくられますが、亀岡市時塚１号墳では盾と人物を合体させた

ような、おもしろい形状の盾持ち人形埴輪が出土しました。この古墳は一辺約 25 m の方墳で、造り出しと呼ばれる前方部を矮小化したような施設をもっています。出土遺物から５世紀の後半に造られたものと見られます。

盾をもち、顔に刺青を入れた埴輪（時塚１号墳）

この古墳の本来の主である人物の埋葬施設は削平られて、失われていましたが、造り出しに１基の埋葬施設が残っていました。この造り出しに埋葬された人は、古墳の中心に埋葬された人の家臣的な人物の墓と見られますが、鉄製の武器や馬具が納められており、武人的な人物と見られます。

盾持ち人形埴輪は古墳の周溝内から出土しました。この埴輪は、盾形埴輪の上段が人面にかたどられた特殊なもので、頭部には耳や角状の装飾があります。また、目の周りには刺青もしくは隈取りと見られる装飾が施され、全体としておどろおどろしい表情をしています。鼻は失われていますが、これは埴輪を焼いている窯の中ではじけて失われた可能性が高いものと見られます。また、唇や眉の部分も立体的に作られています。この埴輪はもともと、邪悪なものをはね返すための防具である「盾」と、邪悪なものをにらむおどろおどろしい「顔」が一体化したものと見られており、古墳の主を脅かす邪悪なものを退けるためにつくられたものと思われます。

この埴輪は、長い間、古墳の主を守るために古墳に立ち続けていたものと見られます。

（石崎善久）

剣は語る

4匹の龍を描いた大刀（湯舟坂2号墳）
京都府立丹後郷土資料館提供

刀を握る柄頭の部分に飾りを付けたものがあります。弥生時代後期の墓である京丹後市三坂神社墳墓では輪っかの形をした中国製の素環頭大刀が出土しています。本来は武器として使用していたのかもしれませんが、飾りの付いた刀の多くは権威を象徴する道具として使用されたようです。

古墳時代後期、京丹後市湯舟坂2号墳では輪っかの中にデフォルメされた4匹の龍が描かれています。4匹の龍はそれぞれ2匹の龍がひとつの宝玉を銜えたように描かれています。湯舟坂2号墳の環頭大刀を平板化し、さらに省略したのが京丹後市丹後町高山12号墳の環頭大刀になります。

環頭大刀も素環頭大刀と同じように、実用のものではなく、権威の象徴として古墳に葬られた人とともに棺に納められています。装飾を施し、鍍金で飾った刀を誰もが作れるわけではありません。そのため、軍団の長として任せられた者が、ヤマト政権から拝領した大刀とも考えられています。

大刀の本体（刃の部分）は木質の鞘に収められていますが、長い年月の間に鞘本体が腐食してなくなってしまいます。この鞘にどのように収めていたのか想像しにくいものに、剣身が波をうったように蛇行する蛇行剣があります。現在、京都府内では綾部市奥大石2

号墳と南丹市城谷口（じょうだにぐち）２号墳から出土しています。

奥大石２号墳から出土した古墳時代中期（５世紀）の蛇行剣は、関東から九州北部の小古墳を中心に約 30 振（ふり）確認されています。各地域の首長墳からはほとんど出土していません。この時期の蛇行剣は、緩やかに２か所で蛇行し、全長が 70cm 前後のものが多いことから、一元的に生産・分配された可能性があります。一方、城谷口２号墳から出土した古墳時代後期（６世紀）の蛇行剣は、九州南部の古墳や地下式横穴墓を中心に約 30 振出土しています。この時期の蛇行剣は、長さ・蛇行回数・形状が一定しないことから一元的な生産ではなかったと考えられます。出土数が全国的に少ないことから権威を象徴する道具立てであったと考えられますが、時代毎に分布域が変化することや各地域の首長墳からほとんど出土しないことから、甲冑（かっちゅう）などに比べると拝領するランクとしては下位に位置付けるべきものと考えられます。

剣身が波打った蛇行剣
（左：奥大石２号墳、右：城谷口２号墳）

古代中国の「蛇龍」には自然を司るという概念が認められます。その蛇龍も自由に操れる中国の農耕神「雨師妾（ウシショウ）」などの能力が中国皇帝には不可欠であったと思われます。大陸交渉が盛んになる古墳時代中期にその概念が大陸から伝わり、蛇に見立てた蛇行剣が作られたと考えています。畿内政権下での各地域の首長は、農耕司祭者から武人へと急速に変化しますが、小地域の首長は、依然として司祭者的な性格が強かったため呪術的な蛇行剣を必要としたのではないでしょうか。

（小池　寛）

方形壇をもつ古墳

古墳時代中期（５世紀）の大阪府堺市の大仙（だいせん）古墳（伝仁徳天皇陵）までは、時の権力者は大きく墓（古墳）を造ることに労力・意識が働いたようです。大仙古墳以後、ヤマト政権が安定して敢えて権力を誇示する必要がなくなり、古墳規模の縮小化が見られます。天皇陵クラスの大規模な古墳は、奈良県橿原市見瀬丸山（みせまるやま）古墳を最後に前方後円墳を造られなくなります。

京都府内での最後の前方後円墳の可能性が高い古墳は、京都市右京区にある蛇塚（へびづか）古墳（６世紀後半）です。蛇塚古墳以降も京都府内では円墳・方墳が造り続けられますが、その規模は縮小していきます。こうした７世紀以降に造られた古墳のなかに、墳丘の表面に石を積み上げて石垣状の方形壇を造ったものがあります。

京丹後市上野（うえの）２号墳は、７世紀前半に造られた古墳で、元の周溝を改変して方形に石垣を積み上げて壇状に成形しています。

方墳の前庭部に上下二段の方形壇が付設する、終末期の古墳に特徴的な墳丘形態の古墳に綾部市山尾（やまお）古墳があります。山尾古墳の墳丘は東西約 9.0 m、前庭部の方形壇の下段幅は推定約 21.4 m を測ります。石室は自然石の乱石積みによる無袖式横穴式石室（むそでしきよこあなしきせきしつ）です。床面はすでに盗掘されていましたが、須恵器が少しだけ出土しました。

方形の石列が築かれている山尾古墳

石室床面に敷かれた平石（山尾古墳）

方形壇を付設する終末期の古墳は、西日本の各地で約10例を数えます。最も発達した方形壇をもつ墳墓は、舒明天皇陵に比定され、実際にその可能性が高いとされる奈良県桜井市忍坂にある段ノ塚古墳です。段ノ塚古墳は、八角墳の前面に左右幅約105ｍにわたる３段積みの方形壇をもつ７世紀中葉の大規模な墳墓です。このほかにも、明日香村の岩屋山古墳や、孝徳陵説がある叡福寺北古墳も方形壇の存在する可能性が指摘されています。

舒明天皇陵が方形壇を備えた八角墳であることから、八角墳は、中央集権国家体制の祖となった舒明天皇の皇統に属する皇族の墳形として認識されていた可能性があります。方形壇は八角墳を採用する天皇陵において定形化したのち、方墳を主墳丘とする一部の墳墓にも採用されていきました。山尾古墳は、主墳丘と方形壇が明瞭に区分されるもので、より古い形態を示しています。石室形態や出土土器などから、おおよそ７世紀第３四半期頃の築造と推定され、八角墳から方墳に方形壇が取り入れられた最初期のものと考えられます。

山尾古墳の被葬者は、段ノ塚古墳に類似する墳丘形態に加えて、後代の文献『三大実録』には周辺の何鹿郡の郡領に舒明天皇の皇統と関連の深い刑部氏の名が見えることなどから、舒明天皇の皇統に近侍した人物だったのではないでしょうか。

（高野陽子）

倭国女王の翡翠勾玉

『魏志倭人伝』によると魏・呉・蜀の三国を統一した晋に、倭国女王壱與が大夫掖邪狗等を遣わし、男女生口30人を献じるとともに白珠５千孔、青大句珠２枚などの貢物を届けたのは、正始８（247）年か９年のことでした。当時、倭国は古墳時代に入った頃で、白珠は真珠、青大句珠は翡翠の大きな勾玉と考えられています。原文の「句」は「勾」のまちがいとされることが多いのですが、「句」は「勾」の本字であり「かぎ」を意味します。勾玉のあの不思議な形は、体から飛び出てしまう魂をひっかけてそれを引き留める鉤と思われます。逆に外部から侵入する邪霊を防ぐ鉤でもあります。

魂（正確には魄）の色は青白く、勾玉も縄文時代以来、青い玉、つまり緑の翡翠で作られました。ところが、既に弥生時代から翡翠は貴重品で、弥生時代にはガラス、古墳時代中期以降は碧玉や赤瑪瑙などの代用品が多くなります。このように、勾玉の歴史は、本質の忘却にともなう代用品の変遷とも言えます。

奈具谷遺跡出土の丁字頭勾玉

倭国女王が魏の皇帝に貢いだ青大句珠は、頭部に数条の刻線がある翡翠の大型丁字頭勾玉と考えられます。この形は弥生時代中期後半頃の北部九州で出現し、後期・終末期には筑紫・出雲・讃岐などで散見される程度です。古墳時代でもその出土例は少なく、女王の勾玉も白珠の５千に対してわずかに２個というのは、それがかなり貴重な品物であったことを裏付けています。

（小山雅人）

飛鳥・奈良時代の京都

はじめに

６世紀後半から８世紀初頭にかけて奈良県の飛鳥地方を中心に都が置かれました。この時代を「飛鳥時代」と呼びます。飛鳥時代になってヤマト政権の統一によって、地方を支配した「豪族の時代」は終わりをつげました。

これまでの身分制度を官職と位階を基本とするものに改め、進んだ政治のしくみや文化を学ぶために中国の隋や唐に使節を派遣しました。この頃から文字（漢字）の使用もはじまりますが、実際に使えたのは貴族・役人や僧侶のような限られた人々でした。また、古墳の築造は一部の有力者に許されたのみでほとんど造られなくなり、それにかわって寺院が建立されました。

694 年、天武天皇の遺志を継いで、持統天皇の治世に本格的な都となる藤原京が造られ、710 年には都が藤原京から平城京に移され、784 年に長岡京、さらに 10 年後には平安京に遷都します。飛鳥時代に続く奈良時代は、律令という中国式の法律によって中央集権的な国家建設が進められた時代です。

奈良時代は、東大寺の大仏造営を頂点として天平文化の華が開きましたが、きらびやかな貴族の生活と対照的に農民たちは度重なる争乱や重

寺院跡が見つかった馬場南遺跡

い税の負担に苦しみました。

京都府は、律令時代に設定された山背（やましろ）・丹波・丹後の三つの国から成り立っています。ここでは最近の発掘調査を中心に、それぞれの国毎に２つの時代の遺跡をながめて行こうと思います。

山背国　この国名は、政権の中心地であった大和の北側に接することに由来し、奈良時代までは「山代・山背」の字が使われていましたが、平安時代以降は「山城」の字が用いられました。

山背国は、都と地方を結ぶ交通の要衝として重要視され、その中心に水運の大動脈である木津川があります。木津川は輪韓川（わからがわ）・泉川（いずみがわ）とも呼ばれており、平城京や大寺院の造営、日常の物資を運ぶために利用されました。現在の国道 24 号線の泉大橋の南たもとには木津川を利用した物資の陸揚げ場所である東大寺木屋所・大安寺木屋所などが設置されていたことが知られています。発掘調査でも、木津川市上津（こうづ）遺跡が港湾関係の遺跡「泉津」として理解されています。

聖武天皇は、740 年に瓶原（みかのはら）（木津川市加茂町）の地に恭仁宮（くにきゅう）を造営し、都が置かれます。恭仁宮は日本国の首都として、日本の中心となりますが、わずか３年余りで難波宮（なにわのみや）（大阪市）に遷ってしまいます。恭仁宮は短命の都であったため本格的な造営は行われなかったと考えられてきましたが、近年の発掘調査で、他の宮都には見られない恭仁宮独自の構造が明らかになってきました。瓶原の地（恭仁宮）から難波宮に遷ったのち、恭仁宮の大極殿の建物を利用して山城国分寺が建てられました。

恭仁宮が営まれた木津川市加茂町（京都府教育委員会提供）

古代の役所の跡は、城

陽市正道官衙遺跡（久世郡衙跡）などが有名ですが、同市芝山遺跡でも官衙か駅家と推定される大規模な建物跡が見つかっています。

官道沿いの集落（内里八丁遺跡）

官道に沿う集落跡としては八幡市内里八丁遺跡があります。古代の山陰道に沿って飛鳥から奈良時代の建物が並び、出土した多数の銭貨は活発な経済活動を物語ります。また、精華町樋ノ口遺跡は平城宮に近く奈良時代の離宮跡の可能性があり、同畑ノ前遺跡では豪族の居館跡が見つかっています。

山城国内には、仏教の伝来とともにいち早く寺院が建てられます。飛鳥時代から奈良時代にかけて、南山城地域には40数か所の寺院が造営されました。近年、話題を集めた馬場南遺跡（神雄寺）も存在し、注目されます。南山城地域には荘厳な伽藍が建ち並び、道行く人の目を奪ったことでしょう。

木津川市釜ヶ谷遺跡は当時の水辺の祭りに係わる遺跡で、けがれを祓う墨書人面土器などの祭祀遺物が多数見つかっています。

釜ヶ谷遺跡の墨書人面土器

奈良県境の丘陵地には、平城京内で使用する大量の瓦を焼いた瓦窯が多数築かれました。木津川市上人ヶ平遺跡では整然と並ぶ大規模な瓦作りの作業所が見つかり、国直営の瓦工房の実態が明らかになりました。

丹波国　古くは「たには」と呼ば

丹波国府の可能性もある池尻遺跡

れ、713年に丹後国が分国されます。現在は旧五郡のうち二郡が兵庫県に含まれています。山背国から山陰道を通って日本海側の地域にいたる交通上の重要な位置をしめています。

丹波国府の所在地については諸説ありますが、近年、大堰川（おおいがわ）東岸部、亀岡市池尻（いけじり）遺跡で役所跡と思われる整然と配置された掘立柱建物跡群が見つかりました。郡衙（ぐんが）や駅家（うまや(えき)）説とともに国府跡の可能性もでてきました。近くの池尻廃寺からは白鳳期の藤原宮式軒瓦が出土しており、中央との結びつきが窺えます。

奈良時代には、国分寺や国分尼寺（御上人林（おしょうにんばやし）廃寺）のほか、亀岡市内を中心に多くの寺院が建立されました。三日市（みっかいち）遺跡では国分寺跡と同じ軒瓦が出土し、国分寺の造営に伴う瓦窯跡であることがわかりました。国分寺跡周辺では、蔵垣内（くらがいち）遺跡をはじめ飛鳥時代から奈良時代にかけての大規模な集落跡が見つかっており、寺や役所を中心に人々が集まる小さな都の景観を呈していたようです。

一方、丹波北部の由良川流域の飛鳥時代には、石積みの方形段をもつ終末期古墳である綾部市山尾古墳が築かれました。同綾中（あやなか）廃寺では外周部に瓦を積み上げて壇状の高まり（瓦積基壇（かわらづみきだん））をもつ施設が見つかっています。奈良時代には、郡衙跡とされる綾部市青野南（あおのみなみ）遺跡や郡寺の綾中（あやなか）廃寺が見られ、漢部（あやべ）氏など新しい渡来系氏族が移り住んだものと思われます。由良川の自然堤防上にある舞鶴市桑飼上（くわがいかみ）遺跡では、大規模な掘立柱建物跡群が見つかっており、由良

川の水運に関係する役所跡の可能性があります。

舞鶴市浦入遺跡では、海水を利用して塩を生産した奈良・平安時代の大規模な製塩炉跡群や大量の製塩土器が見つかっています。ここで作られた塩も都へ送られたのでしょう。ここでは「笠」と刻印された製塩土器が出土しており、加佐郡衙の管轄下におかれた施設の可能性があります。

俵野廃寺で出土した軒丸瓦

丹後国　丹後国は丹波国の一部でしたが、和銅６（713）年に丹波国から分かれました。日本三景のひとつ天橋立を望む平野部に国府が置かれました。宮津市府中にある京都府立丹後郷土資料館の敷地内には中世以降に再建された丹後国分寺跡が残っています。

このほかに、飛鳥時代にさかのぼる寺院跡として京丹後市俵野廃寺があり、軒先を飾る軒丸瓦・軒平瓦や鬼瓦、塔の心礎と思われる礎石が見つかっています。軒丸瓦には、都風のものと地元の工人が笵を制作したと思われる蓮の花の模様を簡略化したものがあり、都を離れた土地での寺造りの苦労がうかがえます。

仏教の普及とともに火葬の習慣が地方にも広まります。京丹後市大宮町左坂横穴群では、丘陵斜面に掘られた小さな横穴内に火葬骨が埋葬されていました。

京丹後市遠處遺跡・黒部遺跡では、砂鉄を利用した奈良時代後半頃の大規模な製鉄遺構が見つかっています。製鉄炉・鍛冶炉・炭焼窯・工房跡からなる古代の製鉄コンビナートで、丹後国だけでなく律令国家の管轄内で鉄の生産を考えるうえで重要な遺跡です。

（辻本和美）

官衙施設と官道

現在、京都府では京都府庁、各市町村には市役所・町役場があります。また、各警察署、裁判所などいろいろの公的施設があります。

飛鳥・奈良時代には、隋・唐の影響を受けて律令国家に移行しますが、その体制のなかで、古代国家が設定した地方行政区として国・郡があります。各国・郡には国庁（国府）・郡衙がおかれます。また、都と国府・郡衙へは山陰道・山陽道・北陸道など幹線道路が整備され、三十里（約 16km）ごとに駅家が設置されていました。

国庁・郡衙を含めた官衙施設の建物は、中心建物（正殿）のほか、その両側に配置された脇殿、税として納められた穀物・米を保管する倉庫群などが整然と配置されています。その建物群は立地する地形にも左右されますが、正方位（真北）を意識して造られます。

発掘調査で見つかった建物群を見ていくなかで、各建物の柱間が約 30cm（一尺）の倍数であるか、建物の方位が北を意識しているか、建物配置が整然と並んでいるか、その調査地が旧国・旧郡のどの場所にあるのか、周辺に古代の道路があるのかなどを検討した上で、その建物群が古代官衙施設であるかどうかを判断します。

大型建物が整然と並ぶ桑飼上遺跡

京都府内で建物遺構から官衙施設として考えられる遺跡には、舞鶴市桑飼上遺跡、綾部市青野南遺跡、南丹市八木嶋遺跡、亀岡市池尻遺跡、城陽市正道官衙遺跡、同市芝山遺跡などがあります。

丹波国府推定地には亀

岡市池尻遺跡がその可能性が高い遺跡として考えられています。

郡衙遺跡には久世郡衙の候補地として城陽市正道官衙遺跡があります。この遺跡は７世紀後半から９世紀前半にかけて整然と並んだ大型掘立柱建物跡が見つかっています。これらの建物は３期に分けて建て替えがおこなわれています。同じ城陽市で正道官衙遺跡から南東方向へ約１kmの位置に芝山遺跡があります。この遺跡でも整然と並んだ大型掘立柱建物群が見つかりました。これらの大型建物跡も方位と建物配置から、１期は大型建物群の確立時期、２期は建物群の衰退期、３期は官道の廃絶に伴う官衙機能の消滅時期と考えます。建物群の時期については柱掘形内から明確な時期を示す土器はあまり出土していません。しかし建物群を造るために墳丘が削平された円墳があり、その古墳の周溝から７世紀後半～８世紀初頭の土器が出土しています。建物の造られた時期はその頃と思われます。また、この遺跡では、幅12ｍの間隔で平行する南北方向の溝が２条見つかっており、道路側溝の痕跡と考えられています。これらの道路状遺構は、古代官道の北陸道や東山道の一部であると推定されています。現在、芝山遺跡の南東側に隣接する丘陵に小字「鷺坂山（さぎさかやま）」の地名が残っていますが、『万葉集』の雑歌に「たくひれの　鷺坂山の　白つつじ　我はにほはね　妹に示さむ（『万葉集』巻九　1694」など、「鷺坂山」を詠んだ歌が残っています。

大型建物が並ぶ芝山遺跡

この道路の一部は現在でも奈良街道として受け継がれています。

（柴　暁彦）

山城の古代寺院

古墳時代の権力者は、政権が安定すると古墳を造営するという意図が薄れたようで、徐々に新たに造られる古墳の規模が小さくなっていきます。代わって、古墳を造る労力を運河や水路といった生産に係わる土木工事に振り分けていきます。そして、6世紀に日本（倭国）には中国・朝鮮半島から仏教が伝わります。時の権力者は古墳を造るということから、仏教を護持し自らの寺院を造営するという意識へと変えていきます。

わが国で最古の本格的な寺院は、奈良県明日香村にある飛鳥寺と言われています。文献によると飛鳥時代には全国に百余りの寺院・草堂があったようです。これらの建物では屋根に瓦が葺かれている場合があり、柱を据えるための礎石や瓦が出土する遺跡を寺院跡と考えることができます。遺跡の調査で新たに見つかった場合の寺院跡は、文献にその寺院の名称が記されていないので、「○○廃寺（はいじ）」と呼んでいます。寺院跡は、一町（約120ｍ四方）もしくは二町四方の区画をもつことがあります。このような広大な寺域をもつ寺院跡の全容が１回の調査でわかることはほとんどなく、発掘調査を長い期間にわたって続けることがほとんどです。最初は不明確であったものが、調査を重ねることにより寺域のなかの建物配置や寺の変遷などがわかってきます。

久世郡に建ち並ぶ寺院の想像復原図
（早川和子作画：城陽市歴史民俗資料館提供）

京丹後市俵野（たわらの）廃寺では

瓦の分布、礫を敷いた場所が見つかっています。これまでに礎石も見つかっていることから寺跡と思われますが、寺の全容はわかっていません。

瓦積の基壇をもつ塔（高麗寺跡：木津川市教育委員会提供）

京都府南部、南山城地域では現在、古代の寺院跡は20数か所確認されており、このうち飛鳥時代創建の寺院としては、太秦広隆寺と並んで府内最古の寺とされる木津川市高麗寺跡や城陽市久世廃寺があります。高麗寺跡は、整美な瓦積基壇の金堂（西）と塔（東）をもつ法起寺式伽藍配置の寺で、朝鮮半島からの渡来人によって建てられたと考えられています。近年の発掘調査により、白鳳期（7世紀後半）に伽藍の整備が行われたことが判明し、屋根の両端に鴟尾をのせた南門跡も見つかっています。かつての久世郡の中心部である城陽市周辺には久世廃寺のほか、正道廃寺、平川廃寺、宇治市広野廃寺の4つの寺跡が集中して分布しています。久世廃寺は、法起寺式伽藍配置で金銅製の釈迦誕生仏が出土しています。平川廃寺は、一辺17mを越える七重塔級の大規模な塔基壇をもつことで知られ、白鳳期（7世紀後半）に建てられ、奈良時代には周辺の寺と一緒に大規模な修復が行われたようです。久世廃寺は久世郡の豪族栗隈氏、平川廃寺は渡来系氏族の黄文氏の氏寺と考えられています。

南山城地域の寺院の多くは、古代最大の争乱「壬申の乱」で勝利した天武天皇側に味方して功績をあげ、その恩賞として国から氏寺の建立や修復に際して援助を受けたとする説があります。さらに南山城の寺院は渡来系氏族と深い関連があったとも考えられています。

（辻本和美）

謎の寺院見つかる！

奈良時代の山背国は、木津川を利用して都に送られる物資や人の往来が頻繁にあり、そのため遺跡や寺院跡が数多く分布しています。その中のひとつに木津川市馬場南遺跡があります。

この遺跡は、街道からやや離れた谷部にあり、調査前は須恵器や瓦の焼成した生産遺跡と考えていましたが、発掘調査を進めていくと「神雄寺」・「神尾」・「神寺」と墨書された土器が60点以上出土したことから、この遺跡が「神雄寺」であることがわかりました。

奈良時代、現在の奈良市を中心に平城京が造営され、藤原京から大官大寺・本薬師寺などが移転され、新たに藤原氏の氏寺である興福寺、国分寺の総本山である東大寺などが造営されます。

これらの寺は奈良時代を代表する大寺院ですが、この当時、修行の場として山林に堂を設けた山林寺院や、個人の信仰のために私邸に祠を設けた持仏堂なども造られています。

馬場南遺跡の場合、狭い谷地形の中に小さな礎石建ちの建物跡（本堂）があり、その前面には掘立柱建物跡（礼堂）が造られています。礼堂の建物は丘陵部を平坦に造成して造られ、平坦地の前面には川を利用した溝が見つかっています。川跡の斜面からは6,000枚以上の灯明を燈す素焼きの皿（灯明皿）が500枚程度のグループで数度にわたり廃棄された状況がわかり、この場所で燃灯供養がおこなわれたことがわかりました。出土

礎石建ちの本堂（馬場南遺跡：木津川市教育委員会提供）

遺物のなかには当時では最高級品である釉薬を施した三彩・単彩（緑釉）の壺・皿・香炉などの多彩な仏器、山や波を表現した彩釉山水陶器など、皇室・高級貴族しか持ち得ない遺物が出土しています。この遺跡は出土した土器の特徴から、聖武天皇が平城京から恭仁宮に遷る時期に始まり、都が長岡京・平安京に遷る時期に廃絶していることもわかりました。

特に注目される遺物として、万葉集巻十の 2205 にある「秋萩の下葉もみちぬあらたまの月の経ゆけば風をいたみかも」を、一字一音の万葉かなで書かれた「歌木簡」が出土しました。これまでに滋賀県甲賀市紫香楽宮、奈良県明日香村石神遺跡で万葉「歌木簡」の出土が知られており、全国で３例目の出土となります。

歌木簡

「神雄寺」には本堂と礼堂が前後に配置され、その前面の広場では数千枚の皿に火を灯して燃灯供養がおこなわれていました。また建物の中では多彩な彩釉陶器が用いられ、法会が営まれたことが想像できます。時にはこの寺に貴族たちが集い、歌会も行われていたようです。

皇室・高級貴族しか持ち得ない山水彩釉陶器が出土していることから、この遺跡は聖武天皇・光明皇后、相楽郡に別業（別荘）をもつ橘諸兄などが関与していたと考えられます。「神雄寺」は正史に記載されない『謎の寺』として、発掘調査によって現在に蘇りました。

三彩陶器（馬場南遺跡）

（石井清司）

恭仁宮の四至

今造る久迩（くに）の都は山川のさやけき見ればうべ知らすらし（『万葉集』巻六 1037）

天平 15（743）年８月、大伴家持が恭仁（久迩）宮を詠んだ歌が万葉集に収められています。この時、家持の目の前に広がっていた恭仁宮とは、どんな姿だったのでしょうか。

恭仁宮は、聖武天皇によって造られた奈良時代の都です。当時、都では天然痘が流行し、天平９（737）年には藤原房前（ふささき）を含む有力貴族が死亡、天平 12（740）年に藤原広嗣（ひろつぐ）の乱が起こりました。この時、聖武天皇は伊勢への行幸を進めており、伊勢の国から平城宮へ帰ることなく恭仁宮にそのまま入りました。突然の遷都でした。明けて天平 13（741）年には恭仁宮で元旦の朝賀の儀式がおこなわれましたが、大極殿ができておらず、宮の大垣の代わりに幕で周囲を囲むというありさまでした。

宮城の門跡（恭仁宮跡：京都府教育委員会提供）

恭仁宮の造営は天平 12 年から始まり、天平 15 年には平城宮からの大極殿の移築が完了したことを伝えています。この時期、紫香楽（しがらき）宮と恭仁宮の造営を並行して進めていたのですが、天平 16 年、恭仁宮造営の開始から３年３か月を経過して、平城京の副都であった難波宮へ遷都してしまいます。このため、恭仁宮の造営は未完成のままに終わりました。恭仁宮の大極殿は遷都の後、山城国国分寺の金堂となり、その南東

には七重の塔が築かれたようです。

あしかけ３年３か月という短命の都でしたが、宮がどのように造られていたのかを解明するために、毎年のように発掘調査が行われています。その調査の結果、次第に恭仁宮の実態がわかるようになりました。

恭仁宮内裏東地区の大型建物（京都府教育委員会提供）

恭仁宮の範囲（四至）は、東西約 560 m、南北約 750 mの範囲で、その四周は大宮垣（おおみやがき）と呼ばれる大規模な築地塀で囲まれていました。また、大宮垣の東西南北の各辺には宮城門が存在したと考えられており、発掘調査でも宮の東面の南門と考えられる八脚門（はっきゃくもん）の遺構が確認されています。宮内部の施設としては、天皇の即位や元旦等の重要な儀礼が執り行われた宮内中枢の建物である大極殿（だいごくでん）が調査されています。恭仁宮では、平城宮の第一次大極殿が移築されたことが分かっています。大極殿の北側には天皇の住まいで、東西に２つの区画が並んでいる内裏があり、その中心部からそれぞれ大きな建物が確認されています。大極殿の南側には役人たちが政務を執る朝堂院（ちょうどういん）がありますが、朝堂院の建物配置などは未だ明らかではありません。また、都の中心部分である宮の周囲には大路・小路で区画された京域が想定されます。しかし、恭仁宮は狭い平地にありましたので、十分な大きさの都がつくれません。歴史地理学では、右京域（旧木津町）と左京域（旧加茂町）が分かれている復元案がありますが、考古学の成果では未だ京域に関連した遺構は見つかっていません。かつては幻の都と言われた恭仁宮ですが、発掘調査の進展で徐々にその姿が具体的に復元できるようになってきました。　（森　正）

奈良山丘陵の瓦窯

持統８（694）年、持統天皇は飛鳥浄御原宮から、京域を整備した本格的な都である藤原京へ遷都しました。宮の中心部である大極殿・朝堂院と大垣などに瓦が使われ、その使用枚数は 150 万枚とも推定されています。

和銅３（710）年に藤原京から遷った平城京では、宮のほか、京内でも一部瓦葺きの建物が建ち並び、平城宮・京での瓦使用枚数は 500 万枚とも 600 万枚とも言われています。

平城宮・京で用いた瓦を製作した瓦工房が、現在の奈良県奈良市と京都府木津川市の境にある奈良（平城）山丘陵に点在します。現在、この奈良山丘陵では 40 地点ほどの瓦窯跡（がようあと）が確認されています。

平城宮・京の造営に伴う瓦窯は、最初は５世紀に朝鮮半島から伝わった須恵器焼成窯に似た窖窯（あながま）で焼成されていました。窖窯は須恵器のように壺や鉢・甕など形や大きさが異なるものを焼くのには効率的でした。一方、瓦は規格があり大きさが揃っており、須恵器ほどには高温で焼く必要がなく、瓦を焼く窯は徐々に窖窯から瓦を専ら焼く平窯（ひらがま）に変化していきます。

瓦窯で見つかった２条の通路

瓦を生産し出荷するまでには、①粘土の採掘→②粘土こね（瓦にあった砂や混和材を混ぜる）→③瓦の形に成形→④乾燥→⑤窯での焼成→⑥焼成した瓦の確認→⑦供給先への搬送、の作業が必要です。

鹿背山瓦窯の想像復原図（早川和子作画）

これらの一連の作業手順がよくわかる遺跡に、聖武天皇の恭仁宮の造営と前後する時期に造られた木津川市鹿背山瓦窯があります。

鹿背山瓦窯では、丘陵の上と下をつなぐ２条の道が見つかりました。溝底には石を敷き詰めて斜面を歩きやすくなる工夫がされ、一輪車の通った跡が明瞭に残っています。この道を利用して瓦や材料の粘土が行き来したようです。丘陵の下には、粘土を採掘した大きな穴が見つかりました。その穴の中には、粘土や粘土に混ぜた土・砂を運ぶための植物繊維を網目に編んだ「もっこ」が残っていました。丘陵の下では粘土と土･砂がこねられ、丘陵の上に運ばれます。ここには小屋があり、その小屋で平瓦や丸瓦、軒瓦や鬼瓦に成形したり、成形した瓦を日陰に置いて乾燥させたりします。

乾燥した瓦は丘陵の斜面に造られた窯で焼成されます。この窯への瓦の出し入れは天井を壊しておこないます。取り出された瓦は、一輪車を使って丘陵の下に降ろされ、製品のチェックを受けた後に都に搬出されたと推測されます。

同じ木津川市にある上人ヶ平遺跡（市坂瓦窯）は、鹿背山瓦窯が操業を終了した750年前後に操業しています。聖武天皇は難波宮から、再び奈良の都平城宮に還都しますが、数年の間に荒れ果てた都を本格的に再造営を進める時期に用いた瓦工房です。この遺跡では、瓦の成形や成形した瓦を乾燥するための作業用の建物が４棟、近接して建ち並び、全体としては体育館程の大きさとなる建物群になっています。

（石井清司）

丹波国分寺とその前史

奈良時代、聖武天皇・光明皇后は仏教に深く関わる政策を遂行します。本来、天皇は神であり、釈迦の教えである仏教とは相反するものですが、平城京での天然痘などの疫病が続き、自身の健康不安、長屋王（ながやおう）の変などの政治の不安定を取り除くために仏教を手厚く保護します。聖武天皇は天平 15（743）年、紫香楽宮（しがらきのみや）で盧遮那仏（るしゃなぶつ）の金銅像の造立を宣言します（大仏造立詔）。仏教の力によって安寧（あんねい）をもたらすという願いをこめたようです。紫香楽宮での大仏造立は実現しませんでしたが、紫香楽宮･恭仁宮･難波宮を経て、平城宮に戻ったのち、聖武天皇は平城外京の東、金鐘寺に大仏を造立し、天平勝宝 4（752）年に大仏開眼供養を行いました。以後、この寺が総国分寺としての東大寺となり、天平 13（741）年 2 月、聖武天皇は諸国に国分寺・国分尼寺の建立を詔します。ただ、天皇が思うようには国分寺・国分尼寺の造営が進んでいなかったようで、後に何度も国分寺・国分尼寺の造営を進めるようにとの詔がでています。

京都府の場合、旧国として山背国、丹波国、丹後国がありますが、「恭仁宮の四至」で記したように、山背国分寺は恭仁宮の大極殿を施入（せにゅう）して造られました。

丹波国分寺跡の塔礎石

丹後国分寺は宮津市府中、京都府立丹後郷土資料館付近にあったと思われます。現在、史跡丹後国分寺跡として建武元（1334）年に再建された礎石群が残さ

れています。

丹波国分寺・国分尼寺は発掘調査が行われており、その周辺を含めて当時の様子がわかりつつあります。

丹波国分寺は、亀岡市千歳町国分に方二町の寺域をもち、東に塔、西に金堂を並べる法起寺と同じ伽藍配置です。その西方約 400 m の河原林町河原尻には、およそ一町半の寺域をもつ丹波国分尼寺が建立されます。丹波国分尼寺は、南から南門・金堂・講堂・尼房を配置する東大寺式伽藍配置です。

丹波国分寺に瓦を供給した瓦窯跡（三日市遺跡）

亀岡盆地では山陰道沿いで国分寺・国分尼寺の建立とともに、国府と判断される池尻遺跡で大型建物が建てられ、大きく開発が進められました。国分寺の造営の際には、北方約 1.4km の三日市遺跡で創建時の瓦が焼かれ、水運（運河）を利用して国分寺へ運んでいました。奈良時代の山陰道は、丹波国分寺･丹波国分尼寺間を北上し、千歳車塚古墳の西側を通り、現在の亀岡市馬路町池尻に至るとされています。河岸段丘や扇状台地上に並ぶ両寺の様は、周辺の集落からはひときわ大きく見え、山陰道を行き交う人々にとっても、律令国家の威厳を示すものであったと思われます。

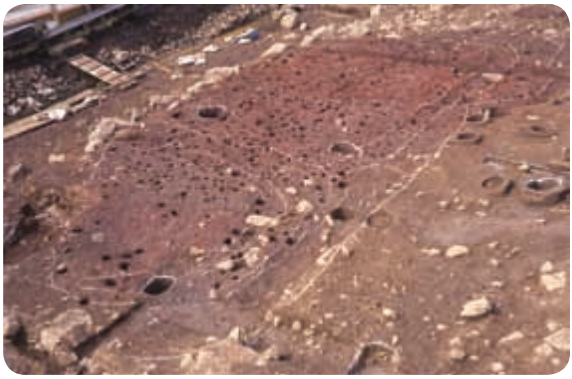
丹波国分寺や丹波国分尼寺が建立された付近は、多くの古墳（国分古墳群）が築かれていました。中でも国分 45 号墳は、八角形墳に復原することができ、土器や金属製品など多くの副葬品の中に銀装の大刀がありました。墳形や副葬品から飛鳥朝廷と深く関わる地域首長の墓と考えられ、このような基盤が律令国家に移行し、国分寺建立に深く関わったと思われます。　（岡﨑研一）

塩と鉄

人が生活していくためには塩分を摂取する必要があります。縄文人がどのように塩分を摂取していたのか、具体的なことはわかりませんが、海水からとった塩を何らかの方法で入手したと考えられています。弥生時代には、山野で植物を採取し、狩りをしていた生活から米を主食とした生活に変化します。

海岸近くにあるムラでは海水や魚・貝から塩分を摂っていたでしょうが、海から遠い山間部のムラでは塩分を確保することは難しかったと思われます。弥生時代の遺跡では、海水から固形の塩をつくる道具として製塩土器や塩を煮詰めるための炉跡も出土しています。ただ、その塩つくりの製塩遺跡は、海岸部にかぎられており、そこで作られた塩は物々交換のひとつとして山間部のムラまで持ち込まれたようです。

本格的に、クニが関与して塩生産をおこなうのは古墳時代中期以降と考えられます。これは、人が塩分を摂取するだけでなく、中国・朝鮮半島から馬・乗馬の風習が伝わり、馬を飼育するために多量の塩が必要になったからだと考えられています。



塩水を固形化するための炉跡（浦入遺跡）（舞鶴市教育委員会提供）

奈良・平安時代には国に納める税金のひとつとして塩が記載されています。

塩の生産に関連した平安時代の遺跡に舞鶴市浦入（うらにゅう）遺跡があります。この遺跡では、濃縮した塩水を多量の燃料（薪（まき））で燃やして固体にするための炉の跡が数

多く見つかりました。炉の周辺には焼けた土と薪を燃やした後の灰、製塩土器が粉々になって出土しました。浦入遺跡では、「笠百私印」と押印された土製の支脚が出土しており、「笠」氏あるいは「加佐」郡を統括した豪族との関係を窺わせる資料と考えられます。

遠處遺跡の製鉄作業風景復原図（早川和子作画）

塩と同じように多量の薪を必要とする生産遺跡に、製鉄遺跡があります。京丹後市遠處（えんじょ）遺跡では、砂鉄を溶かして不純物を取り除き、純度の高い鉄をつくるための炉跡のほか、燃料である炭をつくるための炭窯、純度の高い鉄を鎌や刀などを製品に加工するための建物、工人の住む竪穴式住居跡などが見つかっています。古墳時代後期から奈良時代にかけて、この遺跡で製鉄作業が行われていたようです。

砂鉄から純度の高い鉄に精製するには、多量の燃料を必要とします。周辺の山林を伐採して燃料を確保したようです。自然乾燥させた薪では鉄を溶かすほどの高温にならないので、樹木を炭（白炭）に変えて燃料に使いました。製鉄の炉は炉の本体を壊して鉄を取り出します。そのため、炉本体は発掘調査では残りませんが、炉の底部にある床（炉底）部分や、多量に焼かれた薪の灰、炉から流れ出た砂鉄に含まれる不純物を含んだ鉄滓（てっさい）（スラグ）が多量に流れ出た痕跡が残ります。こういったものから、炉の構造や製鉄の方法を復元します。

（石井清司）

離宮か、寺院か？

樋ノ口遺跡は,木津川市と相楽郡精華町にまたがる奈良時代の遺跡です。この遺跡の始まりは恭仁宮段階の瓦が出土していることから730年代で、終わりは中国製白磁が出土していることから平安時代初期と思われます。遺跡の中心部分は未調査ですが、遺跡の西端部の調査をおこない、南北方向の築地と２棟の掘立柱建物跡を検出しました。築地周辺から瓦が出土していることから築地には瓦が葺かれていたことが想像できます。２棟の建物のうち、１棟は２間×２間で遺跡の南端に建てられており、楼閣(ろうかく)とも推定されます。恭仁宮の瓦とともに、757年以降に平城宮の瓦に似せて地元で作られた瓦が多量に出土しており、この時代に大きく改修されたことがわかります。

この遺跡からは多量の奈良三彩や緑釉陶器、さらには多量の平城宮式の瓦などが出土し、これらの遺構や遺物の内容から離宮か寺かとの論争が繰り広げられました。

足利健亮氏による現代の地名や『興福寺官務牒疏』の記載をもとに「山田寺」であるとする意見もありますが、創建瓦が平城宮のために用意されたもので寺院用ではないこと、1町方格の規模が確保できる地形ではないことから、不定形な離宮がふさわしいと考えています。765年に孝謙天皇が行幸した遺跡かもしれません。

（伊野近富）

樋ノ口遺跡出土の施釉陶器

長岡京期の京都

はじめに

桓武天皇は天応元（781）年に即位すると、延暦３（784）年には70年余りの都であった平城京から長岡京に遷都し、その10年後の延暦13（794）年には長岡京を廃して平安京に遷都しました。

史跡長岡宮跡の石碑

長岡京はわずか10年間の都でしたが、古代日本国の首都として、政治・文化・国際交流の中心地でした。しかし、文献史料が乏しいため、その実態はほとんどわかっていませんでした。そのため、“幻の都”とか、都を平安京に遷すために、仮に造った都とも考えられていました。

なぜ長岡京に遷都をしたのか

なぜ長岡京に遷都をしたのかを知るために、なぜ平城京が廃されたのかを見てみましょう。まず、光仁・桓武天皇の相次ぐ即位で天武系から天智系へと皇統が交替したという背景を理解する必要があります。天武元（672）年の壬申の乱で勝利した大海人皇子は天武天皇として即位しました。その後約100年間にわたり、天武天皇の子孫で皇位が継承されてきました。ところが、称徳天皇（女帝）が死去すると、彼女は独身であり適当な近親者がいなかったため、神護景雲４（770）年に天智天皇の孫である白壁王（しらかべのおおきみ）が光仁天皇として即位しました。光仁天皇は桓武天皇の父にあたります。しかし、光仁天皇が即位したといっても、直ちに皇統が天智系に替わったわけ

長岡宮想像復原図
（早川和子作画：向日市文化資料館提供）

ではありません。光仁天皇の皇太子は、光仁天皇と井上皇后（聖武天皇の娘）の間に生まれた他戸（おさべ）親王であり、天武系と強く関わっていました。逆に言えば、天武系の女性を妻にしていたからこそ、光仁は天智系であっても、天皇になれたと言えるでしょう。

その後、皇后と皇太子が光仁天皇を呪い殺そうとしていたことが発覚し、廃后・廃太子されました。そこで、光仁天皇と渡来系氏族出身の高野新笠（たかののにいがさ）の子である山部親王が皇太子となり、光仁が引退した後、天応元（781）年に桓武天皇として即位しました。ここに、天武系の皇統から天智系の皇統へと移ったのでした。

このように、新たに天智系の王朝を創設したとも言えるような状況の中、桓武天皇は、天武系の皇統を支持する反桓武勢力と対峙する必要がありました。そういった勢力を一掃するためにも新たな都を造りたいと願ったのでしょう。また、僧道鏡が称徳天皇に取り入り皇位に就こうとしたように、仏教勢力が政界に介入することを取り除く必要がありました。平城京内には大寺院が多数ありますので、平城京を廃する必要がありました。

このように考えると、平城京を廃することが肝要であって、新都はどこであってもよかったとも言えます。それでは、なぜ、桓武天皇は長岡村に都を造ったのでしょうか。

第一に、この付近は渡来系氏族、特に秦氏が住まう地であったという点が挙げられます。土地が開け、産業も盛んな地であり、秦氏らの有形無形の援助が期待できます。また、長岡京への遷都と新都

の建設に尽力した藤原種継（たねつぐ）の母は秦氏出身ですし、桓武天皇の外祖父乙継（おとつぐ）が渡来系氏族出身であることも影響を与えたと考えられています。

第二に、桓武天皇が「朕、水陸の便をもってこの邑に遷都す」と述べているように、長岡村付近は水陸交通の便がよいことが挙げられます。水上交通を利用すると、淀川からは西の瀬戸内海に抜けますし、桂川・宇治川・巨椋池（おぐらいけ）からは北や東の諸国に通じます。陸路では、平城京から出た山陰道や山陽道がこの近くを通っていました。この“水陸交通の便がよい”という理由は、長岡村が難波宮と淀川で通じていたという内容で特に重視する考えがあります。発掘調査により、長岡京の大極殿は、難波宮の大極殿を移築したことがわかりました。

平城京を廃して新都に遷都するには、平城京内に多くの反対勢力があったと想定されますが、そういった勢力を押さえ込むには遷都をスピーディーに行い、遷都を既成事実化してしまうことが必要です。新都に移築するために平城宮の建物を解体すると、平城京の人々が目にすることとなり、反対勢力の警戒感を増大させます。平城京から遠く離れた難波宮の建物を新都に移築すると、平城京の人々を刺激せずに新都を造営することができます。難波宮の建築部材を水運で運搬するには、長岡村はうってつけの場所であったと言えるわけです。

長岡宮の築地造営復原図
（早川和子作画：向日市文化資料館提供）

最後に、桓武天皇は乙訓の地で生まれ、幼少の頃を過ごしたため、乙訓の地に

都を遷したという考えもあります。桓武天皇の母高野新笠（たかののにいがさ）は乙訓郡大枝地方に住んでいた土師（はじし）氏出身と推測されており、当時の妻問婚という形態から、母方の家で子供が育てられたと考えられるからです。

なぜ長岡京を廃都としたのか

さて、桓武天皇は延暦３（784）年５月に遷都の発表、長岡の地に下見の使者を派遣、６月には造長岡宮使の任命、11月には長岡京へと遷っていきます。このように、長岡京への遷都は、遷都の発表後、わずか６か月足らずで行われました。この時点では、宮城内の主要な部分だけが完成していたのでしょう。

遷都後も新都の造営工事は盛んに行われていたでしょうが、遷都後、まだ１年と経たない延暦４（785）年の夜、造営長官藤原種継が、何者かの手によって暗殺されてしまいます。その下手人を捕まえて見ると、有力氏族の大伴家持（やかもち）・大伴継人（つぐひと）らが首謀者と判明し、桓武天皇の弟である皇太子早良（さわら）親王が一枚噛んでいたこともわかりました。早良親王は捕らえられ、乙訓寺に幽閉されますが、早良親王はハンガーストライキを行い、無実の罪を訴えますが、体力が弱っていたため、配流先の淡路島に入る前に亡くなってしまいます。

早良親王の死後、皇太后、皇后、夫人が相次いで亡くなり、皇太子が病に伏したり、蝦夷（えみし）討伐軍が大敗して帰って来るなど、天皇の周りに不幸が重なって起こります。また、天然痘が流行したり、大雨で式部省の門が倒れたり、都が洪水の被害を受けるなどの天変地異が相次いで生じています。陰陽寮に占わせると、「早良親王の祟りである」と言われ、その怨霊を鎮めようとしますが、その恐れを取り除くことが出来ません。このように、早良親王の怨霊に悩まされたために長岡京を棄て、新京を造営するに至ったという考えが有力です。

このほかにも、史料に何度かの洪水の記事が見えることから、長

岡京が水害に対して極めて弱い地形であることが判明したために廃都したという考えや、水害に備えて都を改造するためには新たな都を建設するのに匹敵するほどの巨額な費用が必要であったため、改造をあきらめて新都の建設を決意したという考えがあります。

長岡京跡左京二条三坊十五町の貴族の邸宅跡

また、実際に遷都を行ったところ、長岡京が地理的に手狭であったために、新たな都、平安京へと遷都したという考えもあります。実際、都の南東には桂川があり、西南部は丘陵となっており、都城を造ることができない地形となっています。

以上の考えを組み合わせて、長岡京遷都から廃都までを説明する考えもあります。

新王朝の創設の気概を持って天皇に即位した桓武天皇は、中国の天命思想に則り、新王朝には新都を造営すべきと考え、長岡京に遷都しましたが、その地が早良親王の祟りや大雨などの災厄のために穢れたものとなり、その地を廃してやり直すために平安京への遷都を決意した、というものです。

以上、なぜ長岡京に遷都し、すぐに廃都したのか、という考えをかいつまんで紹介しましたが、当時の史料が破棄されており、詳しい事情はよく分からないというのが実情です。

平成22年度には、長岡京内で通算2,000回目の発掘調査が実施されました。これからも地道に調査を続けていけば、短命の都もその姿が徐々に明らかとなるでしょう。

（岩松　保）

条坊制の変遷

古代日本の都城は、中国の隋・唐の都を模して造られました。天皇の住まう内裏（だいり）、政治を行う朝堂院（ちょうどういん）を中心にして国の役所が建ち並び、その周囲には役人や町民が住まう街区が設けられていました。

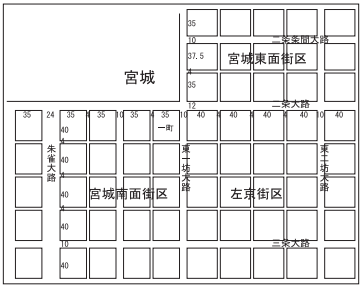
平安京は南北 5.2km、東西 4.5km の長方形で、東西方向に 13 本の大路、南北方向には 11 本の大路が造られていました。大路と大路の間には、基本的には南北･東西に 3 本の小路が配置されて、大路･小路で囲われた方形区画が 1 町（約 120 m四方）という宅地の単位になります。平城京は廃都後、急激に農地化されたため、田畑の形に都城の痕跡が残りました。そのため､田畑の形を読みとることで、条坊計画が復原されました。平城京では、450 尺（1 尺は約 30cm）方眼に割り付けた基準線から大路・小路の幅分を割き取って、1 町が設けられたと考えられています。

この方法では、宅地の大きさは大路に面しているのか、小路に面

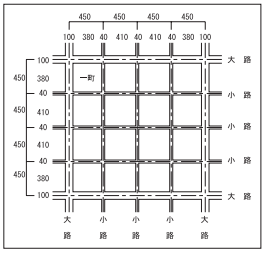
長岡京想像復原図（村上優美子作画）

しているのかで、路面として割き取られる大きさが異なるため、１町の面積に広狭がありました。

平安京では、平安時代前期に編纂された『延喜式』「京程（きょうてい）」の中に平安京の設計プランが記されています。平安京では、まず400尺四方を１町と決め、そこに大路や小路の幅分をつけ加えています。大路に面していようが、小路に面していようが、１町の面積が同じになるように計画されたのです。



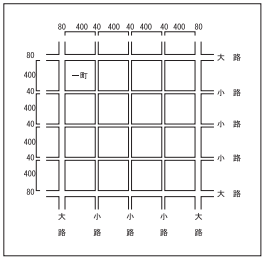
長岡京の計画案（単位は尺）



平城京の計画案
（単位は尺）

長岡京の条坊計画については、全く分かっていませんでしたが、発掘調査の回数を重ねるにつれて、平城京や平安京とは異なった計画で造られていることが分かってきました。

現在、長岡京の条坊計画は、宮城に面する街区（南・東・西街区）の１町の大きさを400 × 350尺、宮城に面しない街区（左・右京街区）の１町を400 × 400尺とし、大路と小路の幅分がその外側につけ加えられたと考えられています。いわば、400 × 350尺と400 × 400尺の二様の大きさの宅地で構成されているのです。



平安京の計画案
（単位は尺）

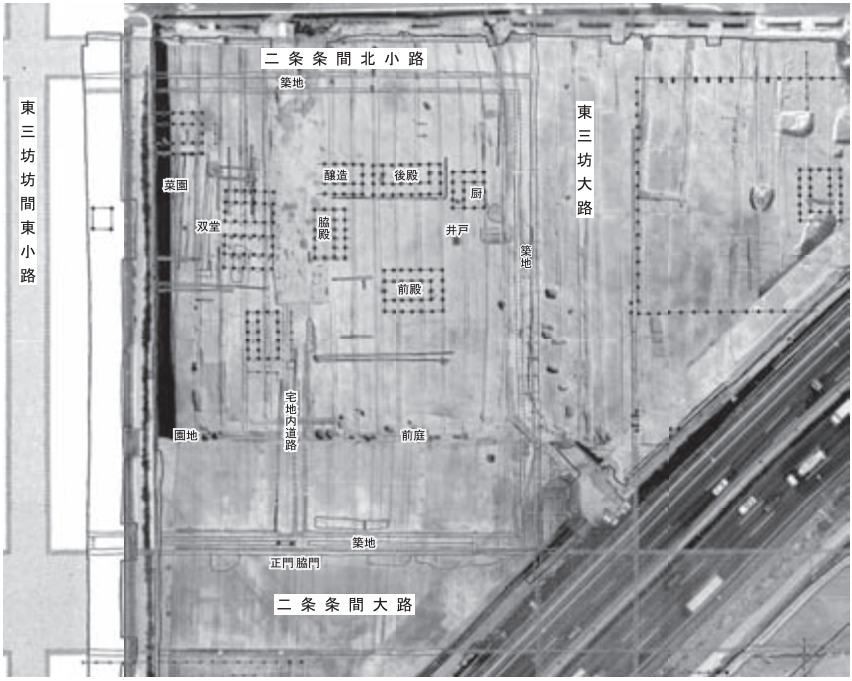
平城京のように大路に面するか、小路に面するかで宅地の大きさが異なる条坊計画と、平安京のように単一の宅地で構成されている条坊計画との、ちょうど中間の形態と考えられています。しかし、細かな点で、研究者の見解の一致を見ていません。長岡京の条坊計画は、数多くの発掘調査の成果を検討した結果、その姿が徐々に明らかになりつつあります。

（岩松　保）

1町域の貴族の館

長岡京跡の調査で、名神高速道路桂川パーキングエリアの建設のため、東西320ｍ×南北210ｍの範囲を調査しました。ここでお話しするのは上がり線（東京方面行き）のパーキングエリアの北西部の調査です。この調査地は、長岡京の呼称では左京二条三坊十五町と東西道路である二条条間北小路と二条条間大路、南北道路である東三坊大路にあたります。

この二条三坊十五町は１町の敷地をもつ邸宅であることがわかりました。この宅地は、周囲を築地で囲まれ、南面する二条条間大路には宅地の中央に正門があり、その東に脇門が並んでいます。また、宅地内には、隣接した２門に対応した２条の南北道路が設けられて



長岡京での貴族の館（長岡京跡左京二条三坊十五町）

います。

貴族の館の中心建物（長岡京跡左京二条三坊十五町）

１町の宅地内は「田」字形に四分割されて空間利用されています。中心的な建物群は、北東部に配置されており、前殿と後殿が「ニ」字型に並んでいます。後殿の西に醸造用の甕を保管した建物があり、その前面には脇殿、後殿の東側には厨・井戸などが造られ、これらの五つの建物は「コ」字型の配置になっています。前殿と後殿の間は公的な空間として利用されたのでしょう。

宅地の南東部には建物は全くなく、北東部の建物群の前庭としての空間となっています。西北の地区では５ｍの間隔で畝溝が何本も掘られ、菜園が作られていたと思われます。その東側には南北に軒を接して２棟の建物があります。２棟全体で双堂が構成されていたと推定されます。柱穴の中から漆喰・檜皮が出土していることから、檜皮を葺き、漆喰で壁を化粧した建物と考えられます。私的な空間として利用されたのでしょう。

西南の区画では北東隅に柵で囲まれた建物が１棟のみで、広い空間が広がります。庭園などの園池の空間でしょうか。

長岡京跡では、数多くの調査が行われていますが、一度にほぼ１町全体を調査した事例は数えるほどしかありません。１町を班給され、大路に門を開くことができるのは高位・高官に限られます。長岡京遷都時に公卿の地位にいた13人の中から、この館の主を１人に絞り込むのは難しいのですが、双堂が東大寺法華堂、佐伯院金堂と類似することなどから、当時の「造長岡宮使」であった佐伯今毛人がその候補に挙げられています。（戸原和人）

地鎮の起源と都の地鎮

現在、建物を新築する際、地神に工事の安全を祈願する地鎮祭が広く行われます。文献上、最も古い地鎮祭は、『日本書紀』持統天皇５（691）年に藤原京を鎮め祭らせたとの記事があります。

地鎮祭は、古墳時代にはすでに行われていたことがわかっています。古墳時代中期の精華町森垣外遺跡では、２個体の土師器高杯を埋納する柱穴などが複数確認されています。一般的に古墳時代中期の居住施設は竪穴式住居が主流ですが、森垣外遺跡のように掘立柱建物が居住施設として多用された集落においては、柱穴内の地鎮が先んじて行われました。

日本における初めての本格的な寺院である奈良県明日香村にある飛鳥寺。この寺院は蘇我氏の私寺で、同じ時代、まだ死者を埋葬する古墳が造営されていた時期ですが、この飛鳥寺の塔の心礎（塔の心柱を支える礎石）の中には馬具や玉類など古墳に副葬されるのと同じ宝物が埋納されていました。古墳時代と飛鳥・藤原京の過渡期の地鎮祭の特徴を示しています。

奈良時代、平城京に都を遷しますが、藤原氏の氏寺である興福寺の中金堂では金銅製の大きな皿や鏡、金の延板など豪華な鎮壇具が納められていました。

古墳時代の地鎮（森垣外遺跡）

次に、長岡京期の事例として、東三坊大路と二条条間北小路の交差点から木の箱に

銭貨を埋納した遺構が検出されています。道路敷設に関する地鎮跡と考えられます。

また、右京五条二坊一町の建物に付随する土坑からは、据えられた状態の須恵器の壺と神功開寶（初鋳 756 年）１枚が埋納されていました。左京七条二坊七町の建物跡の柱穴から四仙騎獣八稜鏡が１点出土しています。これらは、建物を対象にした地鎮跡と考えられます。

長岡京跡の地鎮祭
（東三坊大路と二条条間北小路の交差点）

銭貨の初例には無文銭、「富本銭」がありますが、これらの銭貨は通貨としてよりも、護符としての用途があったようです。

長岡京などの建物で見られるように、銭貨を地鎮具に使用することに現在では違和感があるかもしれませんが、平安京跡の調査でも建物の柱穴から土器とともに銭貨が出土する例がよく見つかっています。

長岡京期以後の平安時代や中近世においても、埋納遺物の種類と員数、埋納遺構の形状、建物に対する地鎮遺構の位置関係など、統一的ではない地鎮祭が、各地で執り行われています。

それは、地鎮祭が密教や神道、民間信仰ごとに異なった作法で行われたためでしょう。

地鎮祭が古墳時代中期には成立し、それ以後、日常生活に溶け込んだため、地鎮祭を統一することができなかったためではないでしょうか。

（小池　寛）

轍から見た長岡京の造営

「轍（わだち）」は、「輪つ道」、「輪立ち」とも書き、車輪が通った痕跡が筋状に残ったものを言います。発掘調査は地面に残る生活の跡を見つけ、その中に含まれる当時使われたものや道具などを見ていく作業ですが、人の足跡や車輪の跡が見つかる例は意外と少ないものです。足跡や車輪の跡は後世に削られて消滅していたり、何度も利用されてその痕跡がなくなるためでしょう。轍が発掘調査で見つかる例としては、湿地などの軟弱な地面に車輪の跡が残り、その上面が洪水によって一気に埋もれ、轍がそのまま残る例があります。また、礫を敷き詰めた路面で、加重のかかる荷物を乗せた車が何度も行き来し、礫が窪み、そのまま残る例もあります。

長岡京の発掘調査では、幅数 cm から 10cm 程度で並行して走る２本の溝を「轍」として認定しており、牛車と呼ばれる二輪車が残した痕跡と思われます。長岡宮・京では、轍は 10 数か所で発見されています。多くは条坊の道路面からですが、宅地内や宮内でも見つかる例もあります。この２条の轍の間隔から、車幅（車輪間隔）がわかります。1.45 m 幅が最も多く、1.35・1.55 m の幅のものも見られます。きれいに残っている轍の断面形は方形ですが、何度も通行しているところでは「U」字形になっています。深さは８～ 20cm とバラツキがあり、地盤の硬軟や牛車の荷重の違い、通行量の違いによるものでしょう。

路面に残された轍（長岡京跡二条条間北小路）

牛車（うしぐるま）には、乗用車としてのものと荷車としてのものがあります。絵図や文献を見ると乗用車は荷車（台車）の上に「箱」と呼ばれる家形が取り付けられていますが、轍の間隔からは、乗用車として使われたのか、荷車として使われたものなのかは分かりません。

瓦窯に残る一輪車の轍（鹿背山瓦窯跡）

牛車は、人力で運ぶ量の５～10倍の様々な荷物を運搬できる車です。長岡京跡二条条間北小路と東三坊大路交差点西寄りの路面で轍が見つかっています。左京二条四坊七町に運河と船着き場が見つかりましたので、ここまで平城京や難波宮の建物が解体されて船に積まれて運ばれ、牛車に積み替えられた上で、都の各場所へと運ばれた時の轍でしょう。また、長岡京跡右京第26次調査では、西二坊大路の路面と宅地内で轍が見つかりました。この宅地の南側に隣接する今里車塚古墳の墳丘が削り取られていますので、墳丘の土を荷車で運搬した時のものかもしれません。

長岡京造営は急ピッチに進められたと考えられていますが、轍痕跡が多く残ることからも、荷車としての牛車が頻繁に利用され、活躍したことが窺われます。最後に蛇足ですが、古代ローマンロードでは、石畳で舗装されている路面に予め轍が作られていました。それは、戦車、荷車を速やかに走らせるためのものです。偶然の一致ですが、長岡京跡の車輪間隔1.45ｍは、日本の新幹線のレール幅、古代ローマの轍幅とほぼ同じ寸法です。

（竹井治雄）

部屋を飾った唾壺

長岡宮西方官衙地区の調査で、木箱に入れられていた球形の体部に漏斗(じょうご)状に広がる口縁部が付く器形の土器が出土しました。『中国陶磁史』によると、頸が細く締まり口縁端部が盤状に立ち上がる細頸壺の小型のものを「唾壺(だこ)」と呼んでます。中国では、この唾壺が貞観13（639）年の墓碑と共に出土しており、唾壺の器形は唐代初期には出現していたことがわかります。日本では、都城・地方官衙・寺院関連の遺跡から出土するものがほとんどで、集落跡から少数例、古墓からの出土は1例ある程度です。日本最古の唾壺出土は長岡宮跡からのもので、平安時代に出土資料が集中し、それ以降の唾壺の出土例は知られていません。

文献に見える唾壺の資料である『類聚雑要抄(るいじゅうざつようしょう)』には、調度品として「母屋簾巻上。中略　屏風前立二階一脚　上屑置唾壺、泔抔等　中略」とあります。京都御所･清涼殿朝餉(あさけ)の間の二階厨子棚には､『類聚雑要抄』記載の「銀唾壺」を基にしたと思われる銀製品の唾壺が見られます。正倉院にはガラス製唾壺があります。

唾壺が当時の日本でどのように使用されていたかはよくわかっていません。乾燥した大陸性気候の中国と異なり、湿潤な日本では咽喉が乾くことが少なく、仮に「つばはき」をするとしても公家・武家社会においては、礼節として懐紙などに包み込んだでしょう。

長岡宮西方官衙の唾壺

唾壺の名のように「つばはき」として使用されたのではなく、文献資料に見えるように調度品として定着したのでしょう。　（石尾政信）

平安時代の京都

はじめに

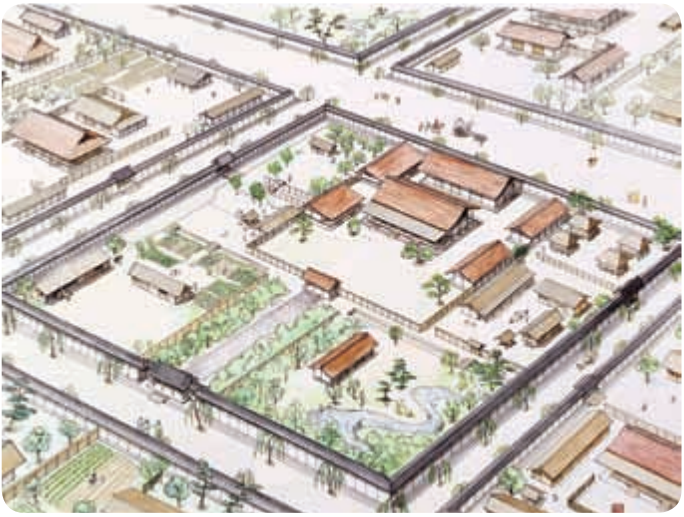
都は、桓武天皇により平城京から延暦３（784）年に長岡京に遷都がなされました。その10年後の延暦13（794）年に、桓武天皇は都を平安京に遷しました。

平安京は、山背国の愛宕（おたぎ）・葛野（かどの）郡（現京都市）に置かれ、明治２（1869）年の東京奠都（てんと）まで続きました。新しい都へと遷都し、当時の京都の国名も「山背国」から「山城国」に変更されました。

平安京が置かれた山城北部は、桂川・賀茂川（鴨川）・宇治川・木津川、さらにそれらが合流した淀川が流れており、水上交通の著しく発達した地域でした。

さらに、陸上交通においても同様で、北陸道（山背道）、山陰道（丹波道）が通過していました。水陸交通の利便は、古代宮都の備えるべき必須条件で、平安京造営の理由の一つといえます。

また、山城国には、その直前の都であった長岡京のほかに、南山城の地に聖武天皇の恭仁京（740年）が置かれたことがありました。山城国への選地には、渡来系氏族である秦氏が深く関わったことも指摘されています。



右京一条三坊九町の邸宅復原図（早川和子作画）

平安時代の京都

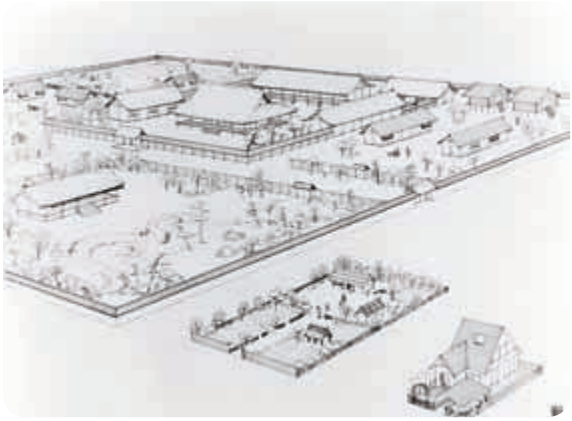
平安京はどんな都だったのか

平安京の平面形態は、唐の宮都長安城をモデルとして、これに日本独自の特色が加味されて設計されました。中軸線をもち左右対称であること、宮域と京域が分離されていることなどは長安城に類似していますが、南北が長いこと、大きさが長安城の３分の１以下にすぎないことなど相違する点もあります。

平安京は、東西 4.5km、南北 5.2km の広さで、中央北寄りには宮域（大内裏）があり、その東・西・南面に京域が広がっていました。中央には幅 84 m（28 丈）の朱雀（すざく）大路があり、平安京の正門ともいうべき羅城（らじょう）門と宮域の入口の朱雀門とを結んでいました。平安京のメインストリートである朱雀大路は、現在の千本通にあたります。

条坊は一条大路を北限とし、南限の九条大路間に 11 本の大路、東京極大路を東限として西限の西京極大路間に 13 本の大路があり、南北を９区分（条）、東西も大路を基準に左京と右京でそれぞれ４区分ずつに分割（坊）されました。

条と坊によって区画され、この坊という区画は東西南北に走る小路によってさらに 16 町分に区画されます。この 16 町分に区画された一区画が１町になり、１町（約 120 m 四方）が都における宅地配給の基準になりました。



古代と現代の住宅の大きさを比較
左：奈良時代の貴族の邸宅
中：平安時代の庶民の宅地
右：現代の一般的な住宅地

京域は左右の京職が管轄し、畿内・七道といった一般行政区画とは異なった特別区とされました。

平安京内の住まい

天皇が政務を行う大極殿を再現した平安神宮

平安貴族や役人は夜明けの鐘とともに、各部署のある朝堂院にむかい、通常、午後には勤務を終えているようです。京内には、この平安貴族、下級役人、庶民が住んでいます。律令時代、都のなかでは人は自由に住まいを選べませんでした。この場所に敷地をかまえなさいという指示、命令がありその敷地に住みます（宅地班給）。資料によると平安時代初期には 150 名程度とも言われる皇族・三位以上の高級貴族は 120 m四方＝ 1 町（約 14,400㎡）以上の敷地が与えられました。一方、下級役人は 16 分の 1 町、庶民は最小単位の 32 分の 1 町（約 450㎡）と決められていました。

平安京の変容

桓武天皇が「此の国、山河襟帯、自然に城と作す」と、理想の都とした平安京。この平安京も 100 年を経過して変容していきます。

平安京へ遷都して 12 年後の大同元（806）年、桓武天皇が死去し、平城天皇が即位します。この頃には平城天皇を含めてまだ平城京への想いがあったようで、平城京にもどることも議論されました。弘仁元（810）年、平城天皇（上皇）の寵愛を受けた藤原薬子の乱による平城還都は失敗し、平城京からの永遠の決別となりました。

嵯峨天皇の時代は弘仁、そして後の貞観の頃に平安文化が隆盛しますが、貞観 18（876）年に大極殿は焼亡し、天皇は内裏から『里内裏』へ移り、内裏が空洞化していきます。

天徳 4 （960）年には内裏が全焼、大極殿・内裏の再建がおこなわれますが、何度となく火災にあい、治承 4 （1177）年・5 （1178）年の火災（太郎焼亡、次郎焼亡）後、大極殿以下、八省院等が再建

されない状態でした。天皇は内裏・大極殿ではなく、「里内裏」に住み、ここに律令国家の崩壊が見られます。

朱雀大路を挟んで西の右京は、桂川に近く低湿であったため衰退していき、荒れた土地になったり、農耕地へと変わっていったことが、天元５（982）年の『池亭記』と呼ばれる日記（慶滋保胤著）に記されています。一方、左京は宅地が密集・発達し、さらに一条大路を越えて北野、東京極大路を越えて鴨川周辺、さらに白河街区へと新たに市街が展開し、平安京の形は変化していきました。

発掘調査でもその様子がうかがえます。市街が拡大していった左京北辺三坊、左京五条三坊十一町などの左京域の調査では、近世・中世の遺構が重複していることから、平安時代の遺構が残る状況は期待できません。右京一条三坊九町などの右京域では、早くに衰退していったことから近世・中世の遺構・遺物が少なく、平安時代の遺構が近世・中世の遺構に壊されずに見つかる傾向にあります。

鴨川は平安京の京外ですが、鴨川の東（洛東）にまで人家が進出し、11 世紀後半になると、白河天皇造営の法勝寺をはじめとした『六勝寺』と呼ばれる天皇の御願寺が造られるようになります。白河天皇は譲位後平安京の南に、後院（鳥羽殿）を造営します。11 世紀中頃には、時の権力者であった藤原道長が宇治に別業（別荘）を建てます。道長の長男頼通は、宇治の別業を寺に改め平等院を造営します。都を離れ、天皇・皇族・貴族は御願寺、別業を京都周辺に造り、そこから都周辺部が繁栄していきます。都では商工業に励む町へと変貌してい

礎石や雨落溝が残る観音堂（尊勝寺跡）

きます。

庶民の暮らし

平安京の京内に暮らしていた人は12万人とも言われています。『源氏物語』など平安貴族の優雅な生活を想い浮かべる人が多いでしょうが、実際の都のなかでは、庶民は優雅という言葉とはほど遠い生活をしていたようです。

平安時代の土器（左京一条二坊十四町）

庶民の多くは持ち家がなく、貴族の屋敷で仕事につきますが、健康を害し、働けなくなると、その勤めていた屋敷から追い出されます。その後、亡くなってしまったのか、路上に死骸が打ち捨てられている様子が『餓鬼草紙』に描かれています。

京に住む人々の排便は大路・小路の側溝に廃棄され、側溝の清掃を罪人に課すこともあったようですが、都の中は衛生面ではあまり良くなかったようです。そのため、赤痢などが流行し、多くの死体が河原に遺棄されたようです。また、都の造営のために北山などの森林が伐採され、その結果、鴨川などで洪水が起こることになったようです。

高級貴族、皇族は洛東や白河、鳥羽、宇治へと別荘を建て、一時の清涼感を味わえましたが、庶民は都での環境の悪化、商業の発展により貧富の差が大きくなったことが想像できます。

都を離れた地方では、役人の赴任、地方からの年貢の貢納などに街道の整備とともに港・津が整備され、水路・陸路とも発達したようです。国府や郡衙などの役所と駅家や津などの重要な拠点とを結び、情報や人の交流・ものの交易が盛んにおこなわれました。

（村田和弘）

平安京の邸宅

京都市内は住宅が密集しており、広い範囲を一度に発掘調査することはあまりありません。そのため、平安京跡の発掘調査では、小規模な調査を繰り返し、その点と点を繋ぎあわせて道路幅や各町内の建物の様子を復元していきます。

左京域は中世以降も繁栄しますが、平安時代中期以降、右京域は低湿地であったため人びとは居を移して衰退し、田畑に変わっていきました。発掘調査をすると、右京域では平安時代の遺構・遺物がよく残っている場合が多いのに対して、左京域では平安・鎌倉・室町・江戸時代と繰り返し建物が建て替えられており、平安時代の遺構・遺物はほとんど見つかりません。

このような平安京の中で、広い範囲の調査をおこない、1町（約120ｍ四方）域のほぼ全域を明らかにすることができたのが、京都府立山城高等学校敷地内の調査でした。

京都府立山城高等学校の場所は、平安京の住所表示に従うと、平安京のなかの北側で右京一条三坊九町・十町にあたります。発掘調査の結果、大路（幅24ｍ）、小路（幅12ｍ）にかこまれた、1町（約14,400㎡）の規模をもつ宅地であることがわかりました。

右京一条三坊九町の中心建物跡

この場所は宮にも近く、下級役人が五条以南に住居を与えられていることからすると優遇された場所にあたります。

建物は1町の北半部に中

心となる建物群があります（91頁イラスト参照）。建物配置は、東西に長い建物が２棟並行して並び、建物の構造から南側にあるのが主殿で、北側にあるのが後殿と推定されます。儀式・公的建物である主殿に対して後殿は私的な建物と考えられます。これら建物の両側には東側・西側ともに２棟の南北に長い建物（脇殿）が並び、計６棟の建物が整然と「コ」の字形に計画的に配置されていることがわかりました。

右京一条三坊九町の四脚門跡

四脚門復原図

中心建物の南延長部には、鷹司（たかつかさ）小路に面して南門（正門）跡があります。南門は、二本の門柱と四本の脚柱から構成された、格式の高い四脚門（しきゃくもん）であったことがわかりました。

都では、三位以上の貴族には１町以上の宅地、三位以下には半町、庶民には32分の１町の宅地を与えたとされています。右京一条三坊九町で見つかった宅地は、１町分の宅地を与えられていること、建物が「コ」の字形に整然と配されていること、平安宮と同じ軒瓦が使用されていること、正門には格式の高い四脚門を使用していることから、三位以上の貴族、もしくは皇室に関わった人物の邸宅と考えられます。ただ、残念なことに、邸宅の所有者については、文献に残っておらず、現時点では学問的に確定することは困難です。

（村田和弘）

尊勝寺と六勝寺

平安時代の後期、藤原道長･頼通の摂関政治の栄華が去り、「院政」の時代にはいります。律令制では本来、天皇が政治を行いますが、院政では天皇譲位後の上皇が実権を握って政治をおこなうようになります。この院政の時代を代表するのが白河上皇です。白河上皇は延久４（1072）年に即位し、在位 14 年の後、位を譲り、43 年間院政を敷きました。永長元（1096）年に出家して法皇になります。

白河上皇のことばに、「賀茂川の水、双六の賽、山法師、是ぞ朕が心に遵（したが）わぬ者」（『源平盛衰記』）とあります。

木材を伐採することで森林が荒廃し、賀茂川の洪水がたびかさなったり、双六に代表される博打が横行し、僧侶の乱逆など、安定しない都の状況でした。ちょうど、律令政治が衰退し、貴族から武家の時代に替わる過渡期の頃でした。

白河上皇は、不安定な都を離れ、応徳３（1086）年に、平安京の南に遷都したかのような御所鳥羽殿（南殿･北殿）を新たにかまえ、続く鳥羽上皇は御所の造営を続け院庁として整備しました。

白河上皇はこの離宮で天皇に代わって上皇（院）が政治の中心となる院政を敷きました。それに先だって、洛東の白河（現在の京都市左京区岡崎）の地は貴族の別荘地として開発が進められていましたが、この地に白河天皇は「国王の氏寺」である御願寺（法勝寺）を造営しまし

尊勝寺の観音堂遺構

た。

法勝寺は承保２（1075）年に造営を始め、承暦元（1077）年に落慶法要がおこなわれました。以後、岡崎の地には尊勝寺（堀川天皇）、最勝寺（鳥羽天皇）、円勝寺（鳥羽天皇皇后待賢門院璋子）、成勝寺（崇徳天皇）、延勝寺（近衛天皇）とおよそ 70 年間の間に、歴代天皇の発願によって造営された御願寺が６か寺建立されました。寺の名にいずれも「勝」の字をもつことから、「六勝寺」と総称されていました。

発掘調査成果によると、法勝寺は東西幅二町（約 240 m）、南北幅二町ないし三町（約 360 m）と広大な寺域をもち、その中央には東西 56 m、南北 30 mと推定される壇状の高まりがあり、その壇の上に金堂が建てられ、金堂の南西約 100 mには園池が造られていました。金堂の南には高さ約 80 mとされる八角九重塔が建てられました。近年では、八角九重塔跡の調査で、大規模な地業跡や九重塔を示すと見られる「九」の文字や、塔の本尊「大日如来」を意味する梵字が書かれた軒瓦の破片が見つかっています。

尊勝寺の調査では、礎石建物跡と基壇、雨落ち溝、瓦溜まりが見つかりました。建物は東西６間（21.6 m）×南北２間（7.2 m）の規模で、身舎の周囲には二重に庇を巡らせており、東西約 33 m×南北約 19.2 mの巨大な建物であったことがわかりました。

鎌倉時代の文献『中右記』によると、６体の観音像を納めた観音堂が出てきます。発掘調査で見つかった建物は、東西６間と観音像の数と一致したもので、観音堂と推定されます。

（竹原一彦）

観音堂正面の石敷きと礎石（尊勝寺跡）

丹波国府を求めて

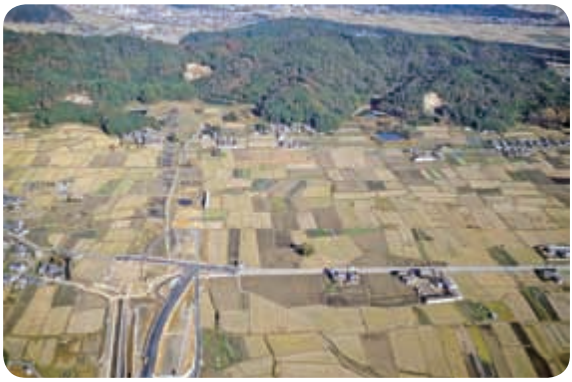
日本の行政区の原形は飛鳥時代に遡ります。古代国家は60余りの国とその管下に郡（評）・郷に分かれており、土地と人々を統一的に支配していました。60余りの国には中央から役人が赴任しますが、実際には地方を治めていた豪族が郡司に任命され、実務をおこなっていました。京都府内での古代の国は、丹波・丹後・山城国で、各国には国府と呼ばれる地方行政機関が設置されました。国府には、国司が政務を執り儀式をおこなう国庁とそれに付随する館（たち）、正倉（しょうそう）などの建物が、都の中央政庁である朝堂院を真似て整然と建てられていました。しかし10世紀以降には、儀式の場が簡略化され、実務的な政務の場へと変化していきます。

もともと丹後・丹波の両国は一つの国でしたが、和銅6（713）年に丹後国が丹波国から分割されました。その結果､丹波国は桑田･船井・何鹿・多紀・氷上・天田の各郡が丹波国に属することとなり、現在の京都府中部から兵庫県篠山地方、大阪府能勢の一部までを含んでいました。

池尻遺跡の大型建物跡

では、丹波国の中心、丹波国府はどこにあったのでしょうか。実は、現在でも丹波国府と特定できた遺跡はありません。

国府の場所を検討する場合、いくつかの条件が想定できます。国府は地方行政の中心地であることから、都と行き来がし易い街道沿いにあったと推定されます。また、中央政庁を模した建物群で


千代川遺跡遠景

真南北を意識した大型建物群が広範囲にあり、その中に正殿と想定される建物や執務をおこなう脇殿、税を貯える倉庫群が存在し、儀礼をおこなうための広場の存在が国庁の必要条件と推定されます。また、租税の記載や都との連絡のために用いられた墨･筆･硯などの筆記具、文字が記された紙や板（木簡）、字が書かれた土器（墨書土器）、都から赴任した貴族が使用する高級な器（緑釉陶器・灰釉陶器・外国製陶磁器など）といった遺物が出土する遺跡が国府の可能性が高い遺跡として考えられます。

これらの条件をあてはめて、丹波国府の可能性が高い遺跡を検討していくと、時代とともに国府が移動していたことが次のとおりに推定できます。

奈良時代前半の国府は、周囲が塀に囲まれた敷地内に大型建物が整然と建ち並ぶ亀岡市馬路町池尻遺跡が有力な候補地としてあげられます。同じ亀岡市千代川町千代川遺跡では、大型の建物や区画施設は見つかっていませんが、調査で数多くの墨書土器や緑釉陶器・灰釉陶器などが見つかっています。奈良時代後半から平安時代前半にはこの地に国府が移動したのかもしれません。平安時代後期から鎌倉時代の国府は、具体的な遺跡は特定できませんが、現在の南丹市八木町屋賀にあった可能性が、承安４（1174）年の年紀のある「丹波国吉富庄絵図」から見て取れます。

以上のように、丹波国府の位置は未だ確定できていませんが、今後の発掘調査や様々な研究に期待が寄せられています。

（石崎善久）

天橋立 ～宮津市府中の賑わい～

丹後国府推定地と天橋立

日本三景のひとつである天橋立の北側付けね部分に、宮津市府中（ふちゅう）があります。「府中」という地名は国府がこの地に存在したことをうかがわせる地名で、宮津市教育委員会が発掘調査をおこなった中野（なかの）遺跡では、奈良時代の軒平瓦・硯・墨書土器など一般集落では出土しない遺物が見つかっています。

この地には、元慶元（877）年に丹後国内最高の位階を得て、「丹後国一の宮」として知られる籠（この）神社があります。平安貴族や中世武士が数多くこの地を訪れたようです。

府中地区の中世の賑わいを彷彿させるものとして、雪舟が1501年から1506年の間に描いたと言われる『天橋立図』があります。この絵は、南東から北西方向に天橋立と阿蘇海を鳥瞰したもので、画面の中段、ほぼ水平に天の橋立が描かれ、右手奥に成相寺、その麓に丹後一の宮で籠神社、中央左方である天橋立の東側には智恩寺が描かれています。府中地区の狭い平野には

雪舟が描いた『天橋立図』（京都国立博物館提供）

海岸に沿って家々が密集しており、その間に街道と松並木が描かれています。

近年、雪舟の『天橋立図』に描かれた情景を彷彿とさせる発掘調査の成果がありました。

丹後一の宮である籠神社

籠神社の東、真名井川の東側にある難波野（なんばの）遺跡で発掘調査を実施したところ、平安時代後期から鎌倉時代の井戸のほか、壁や屋根は残っていませんでしたが建物の柱の根元がそのまま残った状態で見つかりました。柱を埋めた土砂の観察から、真名井川の土石流によって一気に建物が崩壊したものと推測されます。建物の周辺からは一般集落ではほとんど出土しない高級食器類である輸入陶磁器や漆絵漆器類、貴族の遊具である独楽（こま）、多量の箸、下駄などが出土しています。都から貴族・将軍・武家を招き、宴会をした様子を彷彿させます。

また、現在の道路を拡幅するために、籠神社の鳥居を移転することになり、移転後にそれまであった鳥居の下を調査したところ、直径 0.8 m と 0.9 m の木柱の残欠が 2 か所で見つかりました。出土した遺物から鎌倉時代頃の古い段階の鳥居と推定されています。そのほかにも、16 世紀中頃の溝や数条の柵列、溝の南側では地面が固く締まった道路面と、多量の松毬（まつまり）を含む植物遺体などが見つかっています。

これらの考古資料は 200 年前後の時間幅があり、厳密には雪舟の『天橋立図』に描かれた情景とは異なりますが、籠神社を中心にして、中世の丹後国府中の賑わいをうかがわせるものです。

（石尾政信）

都人の器生産

奈良時代、長屋王邸の宴会では多種の食材が用意されましたが、庶民の食事は質素なものでした。食事に使う食器には、土師器と須恵器と呼ぶ焼き物が利用されました。土師器は素焼きの土器で、米や稗（ひえ）、菜物を盛る食器でした。須恵器は土師器より硬質で、水もれが少なく、酒や水を入れ、おかずを盛る食器でした。

素焼きの土師器は地面に簡便な穴を掘り、そこで焼かれたものですが、須恵器は丘陵や山の斜面に造られた窯で焼成されたもので、摂氏1,100℃以上の高温で還元炎（かんげんえん）焼成されます。使用する粘土も砂粒をなくすために水簸（すいひ）（粘土を水に溶かして砂粒を沈殿させて取り除く）して、精良なものを用います。成形には轆轤（ろくろ）を多用します。

須恵器生産は５世紀初めに朝鮮半島から伝わった技術で、古墳の副葬品としても利用されることが多く、装飾された壺や器台なども作られます。飛鳥時代になると、器種・器形に統一化が見られるようになります。古墳時代の須恵器は大阪府堺市を中心とした陶邑（すえむら）で主に生産されましたが、その後、全国に生産地が広がっていきます。

篠窯最終段階の窯（篠西長尾５-６号窯）

窯場の場所を選ぶには、須恵器を焼成するための良質な粘土が採取できること、粘土をこねるための水があること、そして窯の燃料である薪を確保できること、消費地に近いことがその条件となります。

都が平安京に遷ると、

都に近い亀岡市篠町で都で使う大量の土器が生産されました（篠窯跡群）。

篠窯跡群でつくられた器

篠窯跡群は、京都市内から京都縦貫自動車道・国道９号線に乗り、老ノ坂を越えたところにあります。篠窯跡群は、８世紀中頃の丹波国府や国分寺に製品を供給する地方窯として築かれますが、長岡京や平安京に都が遷されると、飛躍的にその生産量が増大します。平安時代前期にはその生産のピークを迎えましたが、11 世紀の初めには終息を迎えます。この期間の間に東西約 3.5km・南北２km の範囲に、総数百数十基の窯が築かれました。

平安京へは、西山にある老ノ坂峠を越える陸路とともに、保津川・桂川を利用した水路があります。重量のあるものは、船・筏を使って平安京へ運ばれたと思われます。

さて、１回の窯の操業には多量の薪を必要とします。篠窯では、各地点で多くの窯が同時に操業していたので、燃料の薪が不足してしまいます。そのため、その地点の薪を伐採し尽くすと窯場をやや離れた所に移動し、植生が回復するおよそ 80 ～ 100 年を経た後に元の窯場に戻りました。

篠窯は、大消費地である平安京の貴族達が使用するために、高級食器である施釉の単彩陶器（緑釉陶器）や特産品としてこね鉢などを生産し隆盛を誇りますが、11 世紀になると、緑釉陶器は今の愛知県の窯場へ、こね鉢は今の兵庫県の窯場へと生産の主体が移り、篠窯は衰退していきました。

（水谷壽克）

直線道路「久我畷」

久我畷（こがなわて）は、平安京の朱雀大路の延長線である「鳥羽作り道」から山崎駅を結ぶ北東から南西方向の直線道路で、歴史地理学では、平安京造営時に造られたと推定されています。

久我畷が文献にはじめて現れるのは『徒然草』で、鎌倉時代のことです。『太平記』などにも見られます。応仁の乱のさなか、応仁元（1467）年に久我畷において、山名氏と細川氏が政権を争って合戦をしたのは有名な話です。また、秀吉が天下をとった大山崎の合戦でも、武士たちが久我畷のあたりで戦いを繰り広げました。

これらの記述では、久我畷は馬が足をとられるような田んぼの畦道でした。

大山崎町下植野南（しもうえのみなみ）遺跡内の調査で、「久我畷」を踏襲したと考えられている道路を 130 mにわたって調査しました。平安時代前期にさかのぼる久我畷を確認できるものと期待されました。

調査では、平安時代後期には道路が敷設されていたことがわかりました。この段階では２本の溝に挟まれた幅 10 mの道路であり、その上面はある時期に部分的に小石で舗装されていました。ぬかるみを埋めたのか、重い荷物を運ぶために整地したのかもしれません。中世後半には畔道程度の狭い道路にかわっていました。

発掘調査で見つかった久我畷（下植野南遺跡）

現在利用されている道も古代から踏襲されていることがわかりました。

（松尾史子）

中世の京都

はじめに

平清盛による平氏政権の成立から豊臣秀吉による天下一統までを中世と呼んでいます。この時代は武家政権が成立して政治権力が分散化し、荘園などの土地支配や人々の支配・従属関係も重層化した時代でした。この萌芽は、白河法皇による院政が始まった11世紀後半に現れますので、院政期は中世初期と考えることができるでしょう。また、南北朝の騒乱を境に中世前期と中世後期に区分することができます。ここでは、屋敷(やしき)・居館(きょかん)・城(しろ)と墳墓(ふんぼ)・経塚(きょうづか)をキーワードに、この時代を特徴付ける遺跡を概観していきます。

屋敷・居館・城

久世郡久御山町の佐山(さやま)遺跡の居館は中世初期に成立しました。巨大な濠で囲まれた1町四方を占めると推定されるこの居館は、古代にこの地にあった荘園の管理施設である政所(まんどころ)を前身として造られたと考えられます。福知山市の上ヶ市(うわがいち)遺跡では大溝に囲まれた中世前期の居館が見つかりました。これらの居館の主は、荘園を寄進して荘官の地位を得た開発領主、もしくは荘園領主が現地に派遣した荘官と考えられ、寄進地系荘園の盛行とともに現れる遺跡ということができます。

佐山遺跡の濠

相楽郡精華町椋ノ木(むくのき)遺跡では遺構の分布状況の変化から、11世紀までは建物が

散在している景観であったのが、12世紀中頃には条里型の方格地割に沿った屋敷地の中に建物がまとまり、屋敷地の周囲は溝で囲まれるという景観に変化したことがわかります。屋敷を囲む溝などからは、中国製の陶磁器や東海地方産の陶器鉢など、遠隔地産のさまざまな遺物が出土します。この頃から、手工業生産の増大と流通の発展により焼物などの物資が大量に遠隔地まで運ばれることが多くなります。椋ノ木遺跡は、木津川左岸の相楽郡と綴喜郡の境界にあったと想定される川湊を押さえ、木津川舟運とかかわりを持っていたと考えられます。

これらの屋敷地は濠や溝と柵で囲まれていることが多いのですが、高い土塁を築いて防御を固めているものはありません。大規模な土塁を築くようになるのは、中世後期のことです。この変化は福知山市の大内城跡でよくわかります。

椋ノ木遺跡の溝に囲まれた屋敷地

大内城跡の居館建物跡

大内城跡は東西に延びる尾根上に立地しています。中世前期には低い土塁と柵で囲まれた屋敷地の中に数棟の建物が建ち並んでおり、平資基や池大納言平頼盛を領家とした六人部荘を管理する荘官の居館と推定されています。この居館は中世後期になると高い土塁と腰曲輪を備えた山城に変貌します。この変化は国人に成長した在地領主層が地域

の有力農民層を被官化し、軍事力を背景に周辺の国人と合従連衡を繰り返していたこの時代を表すものです。鎌倉時代までの遺物が大量に出土するのに対して、南北朝時代以降の遺物がほとんど出土しないことも居館から城への変化を示しています。このように、調査を行っても遺物があまり出土しない山城が多く、平時は麓で生活していたと考えられますが、中世後期の平地居館跡はほとんど見つかっていません。一方で、綾部市の平山城館跡や舞鶴市の大俣城跡（おおまたじょう）は、多量の遺物が出土することから、戦時に逃げ込むだけではなく、山城で日常生活が営まれていたものと推定されます。平山城館跡では、大きな平坦面のある曲輪（くるわ）に大小３棟の建物が建ち並び、白磁皿や土師器皿が出土する住居用の建物と青磁や天目茶碗（てんもくちゃわん）などが出土する茶室などに使い分けられていたと推定されます。また、１段高い曲輪には、礫敷きの礎石建物があり、甕が多く出土することから倉庫などに使われていたようです。

平山城館跡の畝形の竪堀群

大俣城跡

平山城館跡の西側斜面では14条もの竪堀（たてぼり）が見つかりました。竪堀は城に攻め上る敵兵が斜面に沿って横方向に移

動するのを防ぐものですが、これを連続して掘ることで防御機能を高めています。大俣城跡は小規模な山城ですが、屈曲する虎口とその前後の城道、曲輪の両端に取り付く竪堀など、城全体の構造がよくわかりました。これらの山城の最盛期は、明智光秀による丹波攻略が行われた頃です。

墳墓・経塚

中世初期から前期の屋敷地の一画には、しばしば墓が営まれます。この時期は、大きな親族集団である「氏」から直系家族である「家」が成立してゆく時期で、屋敷墓と呼ばれるこれらの墓はそれぞれの「家」の始祖の墓と考えられます。椋ノ木遺跡で見つかった屋敷墓のひとつには、白磁椀２点と土師器皿 10 点が副葬されていました。同時期の他の例では椀と４～５点の皿を副葬する例が多く、この墓は２倍の副葬品を持っていたことになります。この時代には墓に埋葬される人はまだ少なく、遺体の多くは河原などに運んで処理されたと考えられますが、鎌倉時代になると墓に埋葬される人が多くなり、共同墓地が成立します。福知山市大道寺跡では尾根の基部に営まれた経塚と先端の総供養塔に挟まれた空間に合計 26 基の火葬墓群が見つかりました。京田辺市小田垣内遺跡では、戦国時代の土塁の中から石仏４基が立ったままの状態で見つかりました。石仏は石で囲まれた室町時代の墓の上に墓標として立てられていたのですが、戦時に急いで城が築かれたため、そのまま土塁に埋められたようです。与謝郡与謝野町の福井遺跡や地蔵山遺跡では、このような中世の墓地の姿を今も見ることができます。

大道寺跡の墓地の入口では、経典が残っていたことや全国で初めて竹製経筒の存在が確認されたことで特筆される大道寺跡経塚が見つかりました。この経塚は、墓地の成立に当たって墓地を結界し供養する目的で営まれたと考えられます。

経塚とは、釈迦入滅後、正法・像法の時代を経て、仏法が正し

く行われなくなる末法の世が来るとする末法思想に基づき、弥勒下生の時まで経典を伝えようとしたものです。

日本では永承７（1052）年が末法元年と信じられており、藤原道長が寛弘４（1007）年に造営した奈良県の金峯山経塚を最初として全国に流行します。11世紀末には追善供養を目的とした経塚が現れ、12世紀後半以降は経典の保存という目的と共に墓との結びつきを強めます。

土塁に埋められた石仏（小田垣内遺跡）

宮津市エノク経塚

京都府は全国的に見ても多くの経塚が営まれた地域で、特に平安京周辺と丹後地域に集中しています。平安京周辺の経塚には京都市の鞍馬寺経塚や花背別所経塚のように多彩な埋納品を伴う経塚が見られます。これらは平安京の貴族を願主として12世紀を中心に造営されました。一方、丹後地域の経塚は鏡を埋納する例があるものの全体的に埋納品は乏しい傾向です。営まれる時期も12世紀後葉からで、大道寺跡経塚や同じく福知山市の高田山経塚のように墓地に伴って経塚が見つかる例が散見されます。丹後地域を中心に、丹波北部・但馬地域には、地面に掘った竪穴の側面に横穴を穿って土師器筒形容器などに納めた経典を埋めるという独特の構造のものも分布します。大道寺跡経塚もこの型式の経塚です。宮津市のエノク経塚では、ひとつの塚にこのような経塚が４基営まれていました。　（森島康雄）

荘園領主の館

「荘園」という言葉をご存じでしょうか。『広辞苑』によると「‥貴族・社寺の私的な領有地」とあります。飛鳥～平安時代の日本国は、民衆と土地を政府が直接支配しており、その土地（公領）で収穫した米などの産物の一部を税として納めていました。日本の各国には中央政府から任命された貴族が国司として派遣され、地方に住まう豪族が郡司としてその任務を補佐していました。

ところが、平安時代の中期になると税負担の増大から民衆が公領を離れ（逃散）るようになります。そして彼らは、山林・原野に設けられた貴族や社寺の私有地（荘園）の新田開発に参加することとなり、公領が荒廃していきました。地方豪族である郡司も荘園の増大によって勢力を弱め、没落していきます。

貴族が、国司としてその任命された国に赴任していくことを受領といいますが、受領は赴任した国で私営田経営をおこない、その地方の有力者（荘園領主）へと成長していきます。後に、この荘園領主が自衛のために武器を持ったのが武士で、彼らは連携を深めて武士団を形成していきます。その代表が源氏と平氏の

大内城跡想像復原図（早川和子作画）

武士団です。

平安時代末期、権勢を誇った平氏政権の中で、清盛に次いで第２位の地位にあったのが平頼盛です。全盛を誇った平氏は、壇ノ浦の戦い（1185 年）によって滅亡しますが、ひとり頼盛だけは八条院の庇護を受けて助かります。

屋敷地内につくられた領主の墓（大内城跡）

頼盛は丹波国六人部（むとべ）荘（福知山市六人部）の領家（荘園領主）でした。本家は八条院（鳥羽天皇の第３皇子、1137 ～ 1211 年）で、全国に莫大な荘園を持っていました。

鎌倉時代初期に下六人部を中心に六人部新荘ができ、「平高盛」という人物が現地の荘官として勤めていました。「盛」という名を持つことから、あるいは頼盛の子であった可能性があります。少なくとも、平氏一族であることは間違いなく、鎌倉時代になっても、頼盛一族の勢力が根づいていたことを窺わせます。

この六人部荘は福知山盆地の南東部、由良川に注ぐ土師川と竹田川の合流地点にあり、この合流地点をのぞむ高台に、平安時代末期から鎌倉時代の荘園領主の館と推測される大内城（おおうちじょう）跡があります。大内城跡は、土塁で囲まれた一辺 80 ～ 100 m の方形の館内に、西面する主殿を中心に、北側に倉・台所など、南側に井戸と馬小屋などの施設が配置されていました。西側には建物はなく、広場でした。館の東北隅には、館の創設者と歴代の館主の墓が造られています。

屋敷内では多数の中国製陶磁器片が出土したことから、遠く中国からもたらされた数多くの貴重品を使用していたことがわかりました。

（伊野近富）

居館を囲む巨大な濠

古代～中世の時代、人々は新田を開拓し、領地を開発していきました。稲（米）を効率よく育てること、新田開発により大規模な営田を行うために、区画整理をおこないました。これが条里制（じょうりせい）です。

条里制は１町（約 109 ～ 120 ｍ）を単位に方形に区画されたもので、古い地図などを見ると方形区画された状況がわかります。

山城盆地中央部の久世郡久御山町佐山（さやま）遺跡の周辺でも条里制区画の跡が残っていました。発掘調査により、この平安時代後期から鎌倉時代にかけての条里型地割に沿って、幅７～８ｍの巨大な溝が検出されました。調査を進めていくと、この溝は１町（120 ｍ）四方の方形居館を取り囲み、水をたたえた濠で、当初は幅１ｍ前後の溝によって周囲を区画されたものでしたが、11 世紀後葉までに巨大な濠を巡らせるように改められ、13 世紀中葉まで存続したことがわかりました。濠で囲まれた屋敷地の内部では、総柱の掘立柱建物跡４棟、井戸２基、屋敷墓２基などが検出されました。

11 世紀後葉とは、1086 年に白河上皇が院政を開始し、在地領主が勢力を伸ばしてきた時代です。「石清水文書」（『平安遺文』2959）には、保元３（1159）年に石清水八幡宮の極楽寺領に「居屋狭山」の名が見えます。これは佐山遺跡の居館の存続年代にあたることから、発掘調査で見つかった方形居館は史料に見える「居屋狭山」であり、居館の主は在地領主層であっ

佐山遺跡全景

たと考えられます。

この濠からは、「政所（まんどころ）」と墨書された灰釉陶器や皇朝十二銭（こうちょう）のひとつである延喜通寶（えんぎつうほう）（初鋳907年）が出土したことから、平安時代中期に置かれた「荘園政所」があった場所と推定されます。このことが地域支配を進める在地領主層の拠点として、この地が選ばれた背景と考えられています。平安時代中期に置かれた在地領主層の荘園管理施設としては、国内で最古段階のもので、しかも最大級の規模を誇るものです。

濠の護岸遺構と動物の骨（佐山遺跡）

この佐山遺跡の北側にはかつては巨大な遊水池であった巨椋池（おぐらいけ）があり（昭和初期に干拓）、また南には木津川の本流が流れ、周辺は、古来、水運の盛んな地域として知られています。

佐山遺跡は京都盆地の中でも最低所にあり、増水による浸水被害を受けやすい場所にあります。水害に何度も襲われたためか、濠はたびたび掘削され、修復されています。このことから、巨大な濠（ごう）は防御機能があったとしても、その主たる機能は主に治水であったと考えられます。また、もう一つの機能として、舟運を利用するための「運河」としての機能も指摘されています。濠の南西部では濠の底に杭を打ち込み、横木をあてがった護岸遺構が見つかっており、舟着場の遺構と考えられています。

濠は水路で巨椋池や木津川と結ばれ、その水路網は淀川水系と通じる交通路となっていたようです。

（高野陽子）

中世の城

室町時代後半期は戦国時代とも呼ばれ、自分の勢力拡大を目指す人たちによる戦乱が各地で起こりました。戦国時代の後期には、全国を支配しようとするための戦い、いわゆる天下統一を目指した戦いも繰り広げられました。このような戦乱の時期に、戦いや防衛の拠点として、多くの城が築かれました。これらの城のなかには、見晴らしが利いて攻められにくい山の上に築かれたもの（山城）があります。また、単に堀（空堀、水堀）や土塁で囲うだけでなく、守りやすく攻めにくいような工夫が様々にされたものもあります。敵が進入しにくくするために通路を折り曲げたり、進入してきた敵を足止めして周囲から攻撃するための空閑地を設けた入り口（枡形虎口）を設けたりしています。

綾部市平山城館跡では、斜面に縦方向の堀を14条連続して掘った畝形竪堀群が見つかりました。これは敵が斜面を横方向に展開して攻撃してくるのを防ぐためのもので、比較的ゆるい斜面に設けられます。

舞鶴市大俣城跡では、通路を二回折り曲げた虎口が良好に残っていました。柱穴も見つかっており、門が造られていたのかもしれません。

平山城館跡の畝形の竪堀群

この時期の山城は、戦いの時に使われるもので、日常生活は麓の館で行われたと考えられています。平山城館や大俣城は、丘陵先端部や小高い山の上に築かれ

田辺城跡の石垣（京田辺市）

ており、山城と呼んでいいのかという問題はありますが、食器として使われたと考えられる国産陶器や高級品の中国製磁器などが多数出土しており、日常生活が営まれていたと見られます。また、平山城館跡では、生活空間から一段高い狭い平坦地に倉と考えられる礫敷きの礎石建物が見つかっています。後の天守の祖形のような建物かもしれません。

舞鶴市中山城跡では、陶磁器類の出土が少なく、非常時に使われた城と見られます。

京田辺市田辺城跡では、丘の東斜面から石垣を築いた虎口が見つかりました。虎口は、方形の平坦地で、正面（西側）に石垣を築いています。その石垣に沿って、南側に上部へ通じる石段が造られています。石垣と石段の間には、平瓦で護岸された溝が設けられています。北側と南側にも石を抜き取った跡などがあり、その部分にも石垣があったと考えられます。東側には門の礎石と考えられる石が置かれています。このような状況は、近世の城の枡形虎口によく似ています。石垣の石材は、面をそろえて平積みされています。石垣の傾斜角度は86°前後で、ほぼ垂直です。石材は、黒っぽい自然石と白い花崗岩の割石を使用しています。白黒を対比させて装飾的な効果を意図しているのかもしれません。この石垣には、自然礫を使った裏込めが施されています。15世紀頃の瓦が出土しており、その時期に築かれた石垣と考えられ、数少ない中世の石垣と言えます。土造りが多い京都府の中世の城の中で、石垣を使用した珍しい城です。

（引原茂治）

地震痕跡

『地震考古学』という研究分野があります。発掘調査で明らかになった地震痕跡を調べ、古文献資料を合わせて地震の発生時期とその大きさ、人々への影響などを考えるものです。考古資料には過去の災害をそのまま残す遺構もあります。

断層・土石流・液状化現象という自然現象があります。断層は地震動によって大きな力がかかり、岩盤などに縦あるいは横方向に地割れ・地形に段差が生じる現象です。京丹後市通り３号墳の埋葬施設では大きな埋葬施設に縦横のずれがあることがわかりました。土石流は大雨により地盤がゆるみ、地表面の土が一気に流れだす現象で、宮津市難波野遺跡、舞鶴市浦入遺跡でその痕跡が見つかっています。液状化現象は、地表からあまり深くないところにある水分を多く含んだ砂層や礫層が地震動によって圧縮されると、その反動で表層の土を割って水分と砂礫が噴き出す現象で、八幡市木津川河床遺跡などで確認されています。

断層・噴砂がどの時代に起こったかは、被害を受けた遺構の年代と、その上層にある被害を受けていない遺構や遺物を含んだ層の年代を検討することで推定できます。液状化現象や噴砂の跡がたくさん見つかった木津川河床遺跡では、弥生時代から中世までの遺構が引き裂かれていました。また、噴砂のほかに液状化によって地面が幅数ｍ、高さ１ｍ程

地割れでずれた埋葬施設（通り３号墳）

度盛り上がる曲隆という現象の跡も見つかっています。これらの地震痕跡を覆って堆積している地層から江戸時代の遺物が出土していることから、これらの地震の痕跡は室町時代から江戸時代までに起きた地震によるものと考えられます。液状化現象は震度５以上の地震で起こることから相当大きな地震であったと想定できます。

木津川河床遺跡の噴砂

曲隆で床面が凸凹になった竪穴式住居跡（市田斉当坊遺跡）

京都府南部では木津川河床遺跡のほか、久御山町佐山（さやま）遺跡、同町市田斉当坊（いちださいとうぼう）遺跡、八幡市内里八丁（うちさとはっちょう）遺跡、同市門田（かどた）遺跡などの各遺跡で地震痕跡が見つかっています。

文献資料によると文禄５（1596）年閏７月、M 8.0 クラスの大地震が京阪神地域を襲い、各地が甚大な被害に見舞われました。特に伏見での被害が甚大であったため「伏見地震」と呼ばれています。この地震で、時の権力者豊臣秀吉が隠居屋敷として伏見に造ったばかりの指月（しげつ）伏見城の天守閣が崩れ落ち、新たに木幡山に伏見城を築いたことが文献に記されています。

木津川河床遺跡などの地震痕跡は、この「伏見地震」に関わる地震の痕跡であることがわかりました。　（松尾史子）

お経を埋める

仏教の経典を書写し供養して、それを地中に埋納した場所を「経塚（きょうづか）」と呼びます。経塚の造営は、1052年に末法の世が訪れるという末法思想が広がる中で、経典を後世に伝えようとして始まりました。その主な目的は、釈迦入滅後56億7000万年後に弥勒菩薩が下界に現れ、三会の説法を行う際に備えて経典を残そうとするものです。やがて経塚は、極楽往生・解脱・現世の幸福を望むなど阿弥陀信仰や追善供養を求めるなど、時代が下るにつれてその目的は純粋な仏法護持から自己本位なものへと変容していきました。

平安時代のはじめは天皇を中心とした律令制の時代でしたが、11世紀になると貴族による摂関政治から上皇を中心とした院政へと移り、政情が不安定になってきました。都では商業が発達したことで、富む人と貧しい人との格差が広がり、疫病の流行や地震・戦乱などの災禍が続きました。こういった時代背景の中で、貴族を中心に末法思想が広がり、盛んに経塚が作られました。

経塚の多くは丘陵高所に設けられることが多く、偶然の機会で発見されることが多いものです。京都府北部の発掘調査例を見ると、経塚は最初に縦方向に穴を掘り、さらに横方向に穴を掘り進めます。この横方向の穴に、経典を入れた金属製・土製・竹製の経筒を納めます。その経筒はさらに外容器である陶器に納める二重の構造になっています。外容器に石で加工し

経塚検出状況（大道寺跡）

銅製経筒（大道寺跡）

た底板に陶器の口縁部を下にして伏せたもの（京丹後市茶臼ケ岳経塚など）、陶器を正位置に置き、別の容器を転用して蓋にしたものなどがあります。さらに丁寧なものでは、宮津市エノク古墓のように、横穴の入口部分に板石をおいて塞いだものも見つかっています。

納められた経典はその多くが紙に書かれたもので、長い歳月の中でほとんどが土に還り、残っていません。しかし幸い、福知山市大道寺跡の経塚では経典が残っていました。

大道寺跡の経塚は、丘陵上の中世火葬墓群の一画にあります。ここでは13世紀初頭頃の経塚1基を検出しました。経塚は一辺約1.3m、深さ約0.6mの縦方向の土坑の側面に横穴を穿ち、外容器・経筒が納められていました。外容器には、須恵質の甕と片口鉢を転用した蓋を使っていました。外容器の中には、銅製経筒1口と竹製経筒2口が納められており、銅製経筒1口から妙法蓮華経8巻と阿弥陀経1巻の一部が残っていました。経筒が銅製であったこと、外容器の中に土が入らなかったこと、発見時に雨水が入った状態であったことから現在まで経典が残っていたものと思われます。竹製の経筒にも経典があったのかもしれませんが、残っていませんでした。なお、竹製経筒は文献でのみ知られていましたが、実際の竹製経筒の出土は本例が初めてでした。

（竹原一彦）

残っていた経典（大道寺跡）

高僧の墓

「三宝院宝篋印塔」は、真言宗醍醐派総本山醍醐寺境内の中の菩提寺と呼ばれる所にあります。菩提寺は醍醐寺第65代座主賢俊が14世紀前半に再興し、住房としたところでです。その東端は廟所となっており、宝篋印塔・五輪塔が立ち並び、室町時代以降の歴代門跡を祀っています。この中にある「三宝院宝篋印塔」は、鎌倉時代末期の様式を伝えるもので、寺伝によると、この宝篋印塔は賢俊の菩提を弔うために建立されたとされています。

宝篋印塔が置かれた基壇は二段となっており、一段目の壇の上には宝珠を配した板石が各辺に3枚ずつ据えられ、二段目は葛石で囲んだ壇となっています。その上に地覆石、上下2石からなる台座を乗せ、宝篋印塔が据えられています。発掘調査をしたところ、宝篋印塔の真下は上下三層となっており、最下層で甕の抜き取り跡、中・上層ではそれぞれ人骨を納めた信楽壺と常滑壺がありました。宝篋印塔の四周では、基壇の板石下で各辺に3基ずつ計12基、基壇の外側に3基ずつ計12基の埋葬施設が見つかりました。埋葬施設は、まず、中央1か所と基壇外側12か所で大甕が据えられ、骨が納められます。次いで、それらの甕・骨が抜き取られ、内側に甕・骨が移されて、中央に信楽壺が納められます。最後に現状の基壇が、甕列の上に設けられ、塔下に信楽壺が置かれたことがわかりました。歴代の醍醐寺の僧侶がこの宝篋印塔に祀られていたのかもしれません。

（増田孝彦）

三宝院宝篋印塔（修理前）

近世の京都

はじめに

天正 10（1582）年、天下統一を目指した織田信長は、家臣明智光秀の謀反による「本能寺の変」によって 49 歳の生涯を閉じました。

明智光秀は、羽柴（豊臣）秀吉との「山崎の戦い」に敗れ、京都小栗栖において落命したと言われています。

「山崎の戦い」に勝利した羽柴秀吉は、これまでの織田信長の意志を継ぐかのように天下統一へと進み、賤ケ岳（しずがたけ）の戦いを経て、織田体制から豊臣体制へと確立していき、天正 13（1585）年、「関白」に任命され、天下統一を完成します。以後、豊臣秀吉の天下統一から、徳川家康の江戸幕府の開府に始まり、明治維新による江戸時代の終わりまでの時期を近世と呼びます。

京の大改造

天下統一を実現した豊臣秀吉は、天正 19（1592）年、京の大改造を行い、これまでの条坊の半町ごとに南北に小路（突抜（つきぬけ））を通し、正方形の街区を長方形の街区に替えました。また京中の屋敷替えを強行し、京を囲むように土塁と堀を築造し、「御土居（おどい）」を境に「洛中（らくちゅう）」と「洛外（らくがい）」が生まれます。御土居によって商業と農業を分離し、洛中に大名屋敷が造営されました。現在、御土居は京都市北部の西加茂や鷹峯などに断片的に残るのみですが、南側の下京区などでも、発掘調査により御土居の基底

現在も残る御土居

部やそれに伴う堀跡などが見つかっています。

上京と下京を中心とした商業都市では手工業が充実し、多くの物資が京に集まり、その物資を扱う総合商社、高利貸を営む豪商（ごうしょう）が生まれます。高瀬川を開削した角倉了以は有名ですが、絵図などによると多くの豪商が店を構えていたようです。

近世の城跡

近世大名が築いた城跡は、近世遺跡として、早くから調査対象になっています。京都のみならず、全国的に見ても、近世大名の経営した城下町が母体となっている都市は多くあります。したがって、近世の城跡は、その地域の人たちにとって、もっとも身近な親しみやすい近世遺跡と言えましょう。

宮津市宮津城跡（宮津市教育委員会提供）

舞鶴市田辺城跡（舞鶴市教育委員会提供）

中世の城郭では堀・土塁などで防御していましたが、近世直前の織田信長は安土城で石垣を築き、天主を備えた本格的な城を築きました。信長の家臣である明智光秀は、丹波攻略の起点として亀山城（現在の亀岡市）を天正４（1576）年に築きます。亀山城は、豊臣氏の時期を経て江戸時代へと受け継がれます。特に江戸時代初めには天下普請

によって改修されています。これまでの調査で、中級武士の屋敷跡の地割などを確認しています。

明智光秀とともに丹波・丹後攻略を織田信長から命じられた細川藤孝は、攻略後に丹後国を与えられ、その基地として宮津城を宮津湾に面した海辺に築きました。

この宮津城は、関が原の合戦以後、京極氏などが城主となっています。発掘調査で石垣や堀の跡などが見つかっています。

最近の調査で、17 世紀前半頃に、頻繁に造り替えが行われたことがわかっています。同じ北部の舞鶴湾に注ぐ伊佐津川河口に築かれた舞鶴市田辺城跡は、細川藤孝の築造によるもので、今は市街地化していますが、本丸部分がその面影を残しています。発掘調査で良好な状態で残る石垣や堀跡などが見つかっています。また、石垣の基礎になっている胴木も確認されています。

丹波地域では、南丹市園部城跡で調査を行っています。園部城は、但馬出石から丹波園部に転封された小出吉親によって、江戸時代の初めに築かれ、以後、幕末まで小出氏の居城となりました。小出吉親は城主格の大名ではないので、正確には園部陣屋と呼ぶべきかもしれません。ただ、今に残る城門や隅櫓（すみやぐら）の様子は、城と呼んでも差し支えない景観です。城跡は現在学校敷地となっており、その改築等に先立って発掘調査を行って

南丹市園部城跡出土の鍋島

護岸された小さな池（三山木遺跡）

います。本丸跡では、石組の溝などが見つかっています。

それぞれの城の築造とともに、武家の住まい、商業地として城下町が整備されていきます。

地方村落

豊臣秀吉・徳川家康以降、武士と百姓が明確に区別されるようになります。京の町屋では工業・商業が盛んでしたが、都を離れた村落では農業を主体とした生活が営まれるようになりました。江戸時代の地方村落を考える上で、興味深い遺構が京田辺市の三山木遺跡で見つかっています。それは、丸太と板材で護岸された小さな池です。内部は丸太で４区に仕切られています。寛政９（1797）年の年号をもつ絵図に、この池と見られる池が描かれており、「クスハラ池」という池の名前が書かれています。池の名前のほかに、「浅井様入」とも記されています。浅井氏は、江戸時代に田辺地域に支配地を所有していた旗本クラスの小領主です。この池に何らかの利権を持っていたと考えられます。絵図には、このような小さな池が30か所描かれており、池の名前や公家、武家などの名前が書かれています。それぞれに何らかの利権が付随していたものと見られます。

京都周辺では古くから皇室領、公家領、寺社領などが複雑に入り組んでおり、それに武家領なども加わり、複雑な状況が見られます。このような小さな池の存在は、そのまま、江戸時代における山城地域の支配の形を物語るものと言えましょう。

福知山市戸田遺跡は、由良川中流域に位置する遺跡です。近年、由良川の洪水により大きな被害を受けました。この遺跡の調査で

は、江戸時代を通じて各時期の陶磁器類が多数出土しました。また、東南アジアからもたらされたと考えられる甕片も出土しました。これらの陶磁器類は、江戸時代に、遺跡周辺の地域が、由良川を使った水運による交易などで、かなり繁栄していたことをうかがわせます。今ではごく普通の集落ですが、かつては違う様相であったことも想像できます。同じ意味で、木津川流域に位置する木津川市木津遺跡でも同様の様子が想定されます。

錫杖が副葬された墓（中山城跡）

墓の様子

平安京ができると、京外の化野（あだしの）や鳥辺野（とりべの）に墓地を設けますが、中世以降には、時として屋敷の裏に中世の墓（屋敷墓）が見つかる例があります。近世においても屋敷地に墓の見つかる例があります。

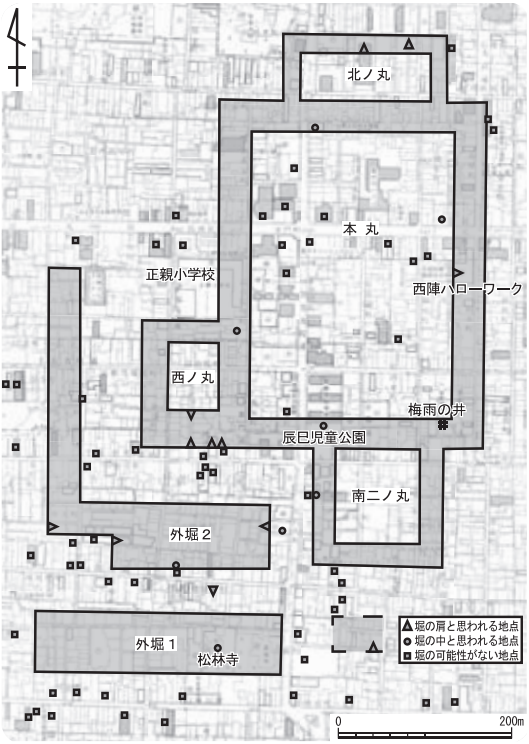
都を離れた地域では、方形の座棺を用いた近世墓が見つかることがあります。庶民クラスの人々の墓と見られます。一方、舞鶴市中山城跡では、小さいマウンドをもち、錫杖（しゃくじょう）が副葬された、僧侶もしくは修験道に関係する人の墓も見つかっています。また、京都市内の法成寺跡の調査では、花崗岩の切石を用いた石槨（せきかく）の中に銅板張りの木棺を納めた、立派な墓が見つかりました。公家の墓と考えられます。

近世は、多くの文献があり、都市・村落の様子が文献資料から語られていますが、考古資料からもその様子を覗い知ることができます。

（引原茂治）

天下人の政庁

聚楽第は、豊臣秀吉が上京のはずれに築いた城郭です。天正16（1588）年の春、後陽成天皇の聚楽第行幸が行われましたが、この行幸は、先頭が聚楽第に到着した時に、最後尾はまだ御所を出発していなかったほどの壮大なものでした。この時の様子は、近年、尼崎市と上越市で発見された屏風からも窺い知ることができます。行幸の２日目、諸大名は天皇の前で秀吉の命に背かないことを誓う起請文を提出しました。これによって、諸大名や家臣が朝廷の官制に編成され、その頂点に関白秀吉が立つ豊臣政権が成立しました。聚楽第は、秀吉が名実ともに天下人となったこの重要な儀式のために用意された舞台でした。聚楽第は関白の政庁であったので、天正19年に甥の豊臣秀次に関白職とともに譲られました。そして、文禄４（1595）年に関白秀次が謀反の疑いで切腹させられると秀吉の命で破却されてしまいます。



聚楽第跡復原図

平成３年に大宮通中立売下ル和水町で行われた発掘調査では、深さ8.4ｍ、幅約40ｍと推定される本丸東堀が発見されました。破却に際して堀を埋め戻した土からは、本丸で使用されていた大量の瓦が出土しました。こ

のうち、軒丸瓦・軒平瓦・鬼板瓦・熨斗瓦などの軒先と棟を飾る瓦のほとんどは金箔瓦でした。これらの瓦は使用時期の特定できる基準資料として国の重要文化財に指定されています。

聚楽第跡の堀

徹底した破却によって地上からほとんど姿を消して幻の城とも言われていた聚楽第でしたが、この発見をきっかけに復原研究が大きく進展し、現在では、聚楽第の堀の位置を推定することが可能になりました。

聚楽第の堀の推定位置を地図上に描くと、本丸東堀は平安京の大宮大路、本丸北堀は平安京の一条大路の位置にあたります。本丸の北東隅が平安京大内裏の北東隅とほぼ一致しているのです。北ノ丸は秀次の時代に付け加えられた郭の可能性が高いので、秀吉の時代の聚楽第は、平安京大内裏の北東隅にピタリと位置を合わせるように築かれたと言えます。

小牧・長久手の戦いで徳川家康に敗れた秀吉は、武力による天下統一戦略から天皇や朝廷の権威を利用する戦略に変更を余儀なくされていました。関白政権の確立を象徴する儀式の舞台となる聚楽第を築く場所として、平安京大内裏の故地を選んだことは偶然ではないでしょう。

聚楽第跡から出土した金箔瓦

（森島康雄）

木幡城の盛り土

豊臣秀吉は京に築いた聚楽第を甥の秀次に譲り、自らの隠居屋敷として文禄元（1592）年に、宇治川畔の指月（しげつ）山で伏見城の造営に着手しました。しかし、1593年に秀吉は息子秀頼が誕生すると、秀次と不仲になり、1595年に秀次を切腹させます。そして、聚楽第を取り壊し、その殿舎を伏見城に移築し、隠居屋敷を大規模な城郭へと造り直します（指月伏見城）が、文禄５（1596）年の大地震によって倒壊してしまいます。翌日、秀吉は木幡山に伏見城を再建することを命じます（木幡伏見城）。

伏見にある桃山丘陵には天守を中心に、二の丸や三の丸といった郭が造られ、その周囲に大名屋敷が建ち並び、現在の市街地に城下町が建設されました。現在も松平筑前・板倉周防、治部小丸などの地名が残り、大名屋敷が建ち並んでいたことがうかがわれます。

京都府立桃山高等学校は毛利長門東町にあり、毛利氏の大名屋敷があったところとされています。平成５年に桃山高校の校舎の改築に際して、発掘調査を実施しました。

桃山高校の調査地

表土下、50～70cmの深さで建物跡や柵列、土坑などが見つかりました。調査対象地南半は、既設の校舎の基礎によって大きく攪乱（かくらん）を受けていました。その中の土層を見ると、建物跡などの遺構が見つかった面より

１ｍ下に大量の瓦が廃棄されていました。この中に金箔瓦がありますので、伏見城関連のものに間違いありません。最終的に、西に下る傾斜面に最大２ｍ程度の盛り土がなされているのを確認しました。

この調査地の西隣の調査地では、上層から掘られた土坑から大量の金箔瓦が出土しています。このことから、盛り土層を挟んで上下の遺構は、ともに伏見城関連のものと判断されました。下層の遺構は指月伏見城、上層の遺構は木幡伏見城の遺構と判断されます。

現在の桃山高校敷地の西側は、４ｍの崖面が南北にありますが、人工的なものだとわかりました。木幡山伏見城を築造するにあたり、丘陵を削り、土砂を盛り上げて建設に邁進した秀吉の並々ならぬ思いと、彼の絶大な権力の一端が偲ばれます。　　（岩松　保）

上層で見つかった建物跡（木幡伏見城）

盛り土層の下で集められた瓦

指月伏見城段階の地形

宮津城の変遷

宮津城跡は、宮津市鶴賀（つるが）に所在し、宮津湾に面した大手川河口部に築かれた近世の平城（ひらじろ）です。本丸と二の丸は明治維新の廃城により、城の痕跡をとどめておらず、市街地化されています。しかし、三の丸や城下町については、江戸時代以来の町割りを残しており、現在の地名や堀跡などから江戸時代の絵図と対比することができます。

宮津城は、天正８（1580）年に細川藤孝によって築造され、慶長５(1600)年の関が原の戦いの前に自ら宮津城を焼き払い、田辺城（舞鶴市）に籠城し、西軍の兵力の一部を足止めしたと伝えられています。この功積により細川氏は九州（豊前国）に封じられました。

宮津城の絵図（宮津市教育委員会提供）

その後、田辺城には京極高知が入り丹後国を支配し、晩年、宮津城に移り大規模に改修しました。

京極高知が元和８(1622) 年に死ぬと、宮津藩主となった京極高広により城の再整備がおこなわれ、寛永２（1625）年に近世の城として造り替えられ、完成したとされています。

近年の調査では、

三の丸南西隅部で見つかった石垣は、江戸時代に描かれた絵図にも残る枡形虎口を構成する遺構で、石側の南北端に土塁が取りつく構造に復原できます。この枡形虎口が築かれた時期は、京極氏が丹後に入った直後の可能性があります。

三の丸南西部では、屋敷地を画する石垣が見つかりました。出土遺物の年代からは細川期のものではなく、慶長５年に京極高知が丹後に入った時期に築かれた可能性があります。また、この石垣を埋める大規模な改変が行われたのは、京極高広が藩主になって城下の整備をおこなった元和８（1622）年から寛永２（1625）年の間と考えられます。発掘調査によって、初期の宮津城の遺構は、比較的短期間に改変を繰り返していることがわかりました。

（村田和弘）

宮津城の現風景

三の丸南西隅の枡形虎口の石垣

勘兵衛の屋敷跡

天下統一を目指した豊臣秀吉は、京・大坂などの都市全域の直轄領化を進めました。中世の公家・寺社・武家らが領主として町の屋敷地内から地子を徴収していましたが、秀吉は都市内での地子を免除する法令を出しました。この法令の恩恵を受け、都市に商人が集まり、税の免除により収入を増やしました。また、聚楽第・伏見城・大坂城の造営、朝鮮半島への出兵などの多大の経費を必要としましたが、その経費を得るため、商人の一部に特権を与えました。商人は陸運・水運の整備、秀吉のもとでの貿易の保護政策（重商政策）とともに、活発な海外貿易で多大の利益を得た豪商が生まれました。京では角倉了以、茶屋四郎次郎がその代表です。

ここで取り上げる勘兵衛町は、京都市上京区にある京都府庁西側に位置します。具体的には北は出水（でみず）通、東は西洞院（にしのとういん）通、西は油小路（あぶらのこうじ）通、南は下立売（しもだちうり）通に囲まれた町域のほぼ中央に位置しています。

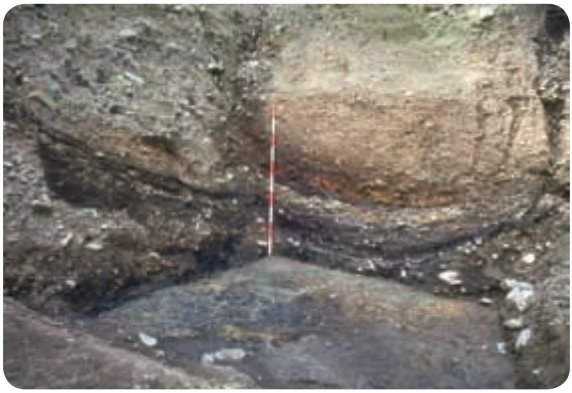
勘兵衛町については、慶長年中（1596 ～ 1615）に京の富者として名を馳せた三人の勘兵衛のうちの一人が居住したことが町名の起源であると、江戸時代の京都の地誌類を集めた『京都叢書』に記載されています。

発掘調査地の空中写真（下方の建物が京都府庁）

発掘調査では、現在の勘兵衛町と丁字風呂町及び西大路町の町境と一致する箇所で柱列や溝などを確認しており、京都の

町割りが、江戸時代から踏襲されていたことがわかりました。

勘兵衛がどのような活躍をしたかについては、わからないことが多いのですが、富者としての勘兵衛が有した財力の一部を示すかのような遺構と遺物を確認しました。



多くの遺物が出土したゴミ捨て穴の断面

発掘調査地は、勘兵衛町の南東部分に当たり、そこで一辺４ｍ以上、深さ２ｍのゴミ捨て穴を確認しました。穴の底部が四角形に掘り込まれ、壁が垂直に立ち上がることから、破壊される前は財宝などを火災から守るための石室だったと考えられます。この石室からは、中国製磁器や朝鮮王朝磁器をはじめ織部焼や志野焼などの陶器類、調度品や漆器椀、箸、下駄、刷毛、銭貨、釘、鞘（さや）金具、硯、碁石、砥石、焼き塩壺などが多量に出土しました。特に、中国製の華南三彩盤と同じ釉調をもつ男子像は、今のところ国内に出土例がありません。

出土した漆器椀面

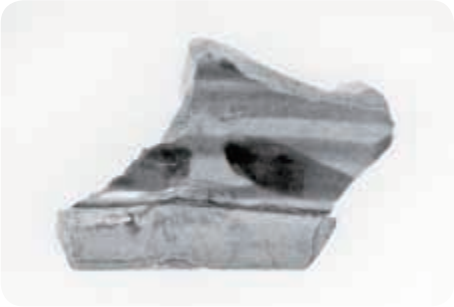
三彩釉をもつ男子像

勘兵衛屋敷の北側には、茶屋四郎次郎邸が所在しており、同時代に活躍した二人が、互いに切磋琢磨しながらも親交を深めたのではと想像が膨らみます。

（小池　寛）

江戸時代の陶磁器

近世の遺跡では、城跡や物資の中継地点、村落で数多くの陶磁器が出土します。陶磁器の中には、その遺跡の性格をそのまま映す資料があります。宮津城の調査では、堀の中などからヨーロッパ製の陶器や朝鮮王朝（李朝）の椀などが出土しています。ヨーロッパ陶器は茶道の水指として、朝鮮王朝の椀は茶碗として使われたものと考えられます。近世武家文化の一端を偲ばせます。南丹市園部城跡では、18 世紀頃の九州肥前（佐賀県）産の鍋島焼皿などが出土しています。鍋島焼は、佐賀藩直営の焼き物であり、大名間などの贈答用に作られた精巧な磁器で、原則として一般に出回ることはないとされている焼き物です。いかにも近世大名の城跡からの出土遺物としてふさわしいものです。なお、亀岡市以北では、これ以外に鍋島焼の出土は確認されていません。



宮津城跡出土のヨーロッパ陶器

宮津城跡出土の朝鮮王朝陶器

木津川市の木津遺跡では、溝や土坑から多くの陶磁器片が出土し、室町時代前期から江戸時代中期に至る日常雑器の変遷が明らかになりました。南西から北東方向に延びる断面「V」字形の溝には、14 世紀から 15 世紀前半までの土師器皿が大量に捨てられていました。近世の土坑や池に切られた溝からは、15 世紀後半の土師質や瓦質の羽釜（はがま）や擂鉢（すりばち）が出土

しました。その溝を切っている池からは、16世紀前半の土器や陶磁器が出土しました。もう1か所の池からは、16世紀中頃から後半の土器・陶磁器が出土しました。土師器皿や羽釜のほかに、美濃産の天目茶碗や灰釉の皿や椀、中国製の青花小皿が含まれます。

木津遺跡から出土した日常雑器類

長楕円形の土坑からは、17世紀後半の遺物が出土しています。ここから出土した焙烙は、16世紀の土師器羽釜と、17世紀末から18世紀前半の焙烙（素焼きの平たい土鍋）の中間的な形をしています。木津地域に特徴的な焙烙の原形が羽釜であったことがわかります。18世紀の入ると、焙烙の形に退化も認められ、年代の目安にできるほどです。

瓦質の甕を埋置した墓と見られる遺構からは、肥前陶器（唐津）の銅緑釉皿が出土しており、17世紀末頃の年代が与えられます。

便所の可能性が考えられる埋桶遺構などからは、17世紀末から18世紀前半の陶磁器類が出土しています。肥前磁器（伊万里）の「くらわんか手」の染付椀・皿類が圧倒的に多く、肥前陶器の刷毛目椀がこれに次ぎます。ほかにも肥前磁器と思われる青磁の大皿などがあります。包含層からも、肥前陶器三島手の大鉢が出土しています。

京都市内の資料によると、16世紀末から17世紀初頭にかけては、黄瀬戸・志野・織部・唐津などの侘び茶関係の陶器が大量に出回わり、その後、ほとんど唐津系陶器一色になり、中頃には初期伊万里系染付磁器が出現し始めます。16世紀の食器はまだ中世的ですが、18世紀の食器は現代に直結していることがわかります。（小山雅人）

いかさま師の末路

今から20年ほど前、京都府庁の庁舎新築のため、発掘調査をしました。ここは、かつて南北方向の西洞院大路と東西方向の近衛大路の交差点であったところです。平安時代の道幅が24～30ｍあったものが、徐々に町屋に侵食され、戦国時代には西洞院（にしのとういん）大路は10ｍほどになっていました。この交差点の南東部で金箔瓦を含む瓦溜りと一部重複した遺構が見つかりました。そこには、数片の骨片と、骨角製のサイコロ１点、鉄製のナタ１点があったのです。おそらく、墓であったのでしょう。このサイコロは一部欠けていて、中を見ることができました。なんと内部は球形に刳り貫かれていたのです。出土した場所は道路に近いところで、おそらく築地に葺かれていた瓦を捨てた場所に墓を作っていたのです。

サイコロは普通のとおりに目を付けていました。すなわち、１と６のように裏面の数字を足すと７になるものです。しかし、中は一方に偏って刳り貫かれていたのです。イカサマサイコロの出土です。中に砂でも入れれば一方が重くなり、この場合は１の数字側に穴を開けていたようです。ナタはこの墓の主が建築関係の仕事に従事していたことを窺わせます。

出土した「いかさま」のサイコロ

１日の作業が終わり、サイコロを振って賭け事をしていたのでしょうが、イカサマが発覚して・・・。

約400年前の出土品で、一つのドラマが作れそうです。

（伊野近富）

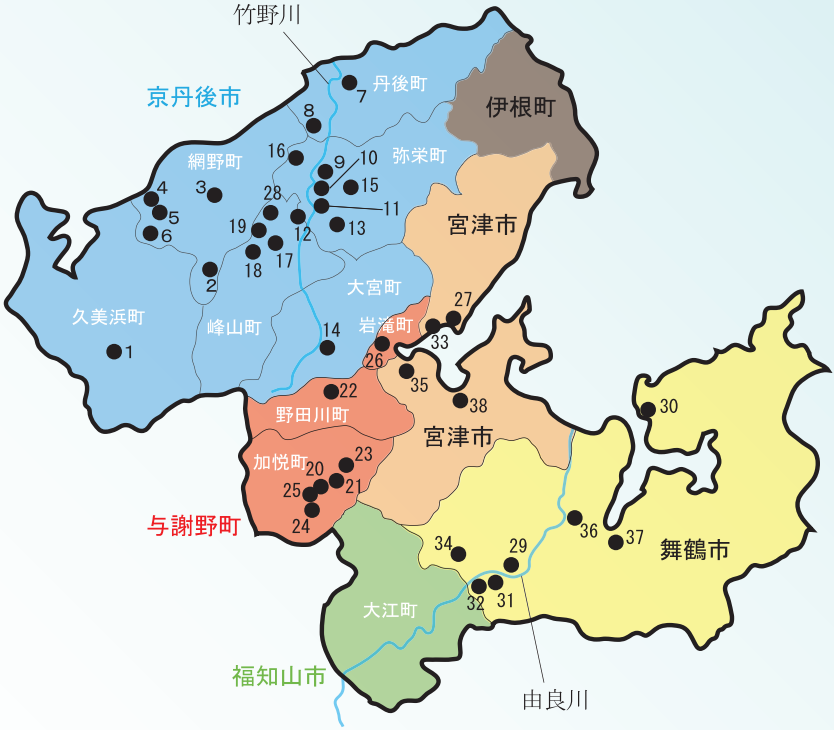
昔むかし・・・。

～京都府の遺跡をよむ～

第2部　解説した主要遺跡一覧

（イラスト：早川和子作画）

丹後地域


竹野川
京丹後市
丹後町
伊根町
網野町
弥栄町
宮津市
大宮町
久美浜町
峰山町
岩滝町
野田川町
宮津市
加悦町
与謝野町
舞鶴市
大江町
福知山市
由良川
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38

丹後地域

番号	遺跡名	所在地	時代	特記内容	解説
1	湯舟坂２号墳	京丹後市久美浜町須田	古墳時代	円墳・横穴式石室	52
2	浅後谷南遺跡	京丹後市網野町高橋	古墳時代	導水施設	45
3	網野銚子山古墳	京丹後市網野町宮家	古墳時代	大型前方後円墳	46
4	浜詰遺跡	京丹後市網野町浜詰	縄文時代	集落跡	11
5	松ヶ崎遺跡	京丹後市網野町木津	縄文時代	集落跡	10,13,17
6	俵野廃寺	京丹後市網野町俵野	飛鳥時代	寺院跡	64
7	神明山古墳	京丹後市丹後町宮	古墳時代	大型前方後円墳	44
8	高山古墳群	京丹後市丹後町徳光	古墳時代	横穴式石室	52
9	黒部銚子山古墳	京丹後市弥栄町黒部	古墳時代	大型前方後円墳	44
10	奈具谷遺跡	京丹後市弥栄町溝谷	弥生時代	トチの実加工施設	27
11	奈具岡遺跡	京丹後市弥栄町溝谷	弥生時代	玉作り集落	27,33
12	大田南古墳群	京丹後市弥栄町和田野	古墳時代	５号墳から青龍三年鏡	48
13	愛宕神社１号墳	京丹後市弥栄町堤	古墳時代	20ｍの方墳	48
14	三坂神社墳墓群	京丹後市大宮町三坂	弥生時代	素環頭大刀	52
15	黒部遺跡	京丹後市弥栄町黒部	奈良時代	製鉄遺跡	61
16	遠處遺跡	京丹後市弥栄町鳥取	奈良時代	製鉄遺跡	61,75
17	扇谷遺跡	京丹後市峰山町丹波	弥生時代	環濠集落	31
18	途中ケ丘遺跡	京丹後市峰山町新治	弥生時代	環濠集落	31
19	赤坂今井墳墓	京丹後市峰山町赤坂	弥生時代	ガラス・碧玉製の頭飾り	38
20	温江遺跡	与謝野町温江	弥生時代	環濠集落、人面付き土器	23
21	日吉ケ丘遺跡	与謝野町日吉	弥生時代	貼石墓	37
22	寺岡遺跡	与謝野町石川	弥生時代	貼石墓	29
23	蔵ケ崎遺跡	与謝野町明石	弥生時代	灌漑施設	26
24	白米山古墳	与謝野町後野	古墳時代	大型前方後円墳	43
25	蛭子山１号墳	与謝野町明石	古墳時代	前方後円墳	43
26	大風呂南墳墓群	与謝野町岩滝	弥生時代	ガラス釧	39
27	難波野遺跡	宮津市難波野	弥生～鎌倉時代	貼石墓、祭祀	29,37,103
28	通り３号墳	京丹後市大宮町石丸	古墳時代	地震痕跡	118
29	志高遺跡	舞鶴市志高	縄文時代	石器、船着き場	13,35
30	浦入遺跡	舞鶴市千歳	縄文時代、奈良時代	丸木舟、製塩遺跡	14,74
31	桑飼下遺跡	舞鶴市桑飼下	縄文時代	石器類	12,19
32	桑飼上遺跡	舞鶴市桑飼上	奈良時代	掘立柱建物跡	62
33	中野遺跡	宮津市中野	奈良時代	軒平瓦、墨書土器	102
34	大俣城跡	舞鶴市大俣	中世	山城跡	110
35	エノク経塚	宮津市須津	平安～鎌倉時代	経塚	111
36	中山城跡	舞鶴市中山	近世	山城跡	117,127
37	田辺城跡	舞鶴市北田辺	近世	城跡	124
38	宮津城跡	宮津市鶴賀	近世	城跡	133,136

解説した主要遺跡一覧

丹波地域

番号	遺跡名	所在地	時代	特記内容	解説
39	案察使遺跡	亀岡市保津町	縄文時代	縄文土器	6,10
40	武者ヶ谷遺跡	福知山市堀	縄文時代	京都最古の縄文土器	10
41	三河宮ノ下遺跡	福知山市大江町	縄文時代	ハート形の頭部の土偶	23
42	天若遺跡	南丹市日吉町	縄文時代	落とし穴	24
43	今林遺跡	南丹市園部町	弥生時代	高地性集落	31
44	池上遺跡	南丹市八木町	弥生時代	集落	25
45	黒田古墳	南丹市園部町	古墳時代	古墳	49
46	園部垣内古墳	南丹市園部町	古墳時代	古墳	43
47	山尾古墳	綾部市坊口町	古墳時代	環状列石をもつ古墳	54
48	国分 45 号墳	亀岡市千歳町	古墳時代	八角墳	44
49	時塚 1 号墳	亀岡市馬路町	古墳時代	方墳、盾持ち人形埴輪	51
50	奥大石 2 号墳	綾部市上杉町	古墳時代	蛇行剣	53
51	城谷口 2 号墳	南丹市八木町	古墳時代	蛇行剣	53
52	池尻遺跡	亀岡市馬路町	奈良時代	国府候補地	101
53	丹波国分寺跡	亀岡市千歳町	奈良時代	国分寺	73
54	丹波国分尼寺跡	亀岡市河原林町	奈良時代	国分尼寺	73
55	三日市遺跡	亀岡市馬路町	奈良時代	国分寺造営の瓦窯	73
56	蔵垣内遺跡	亀岡市千歳町	飛鳥～奈良時代	集落跡、古墳	60
57	綾中廃寺	綾部市綾中町	奈良時代	瓦積基壇	60
58	千代川遺跡	亀岡市千代川町	平安時代	国府候補地	101
59	篠窯跡	亀岡市篠町	奈良～平安時代	陶器窯	105
60	広峯 15 号墳	福知山市天田広峯	古墳時代	古墳、景初四年銘鏡	43
61	大内城跡	福知山市大内	中世	居館	112
62	平山城館跡	綾部市七百石町	中世	山城跡	109,116
63	大道寺跡	福知山市今安	中世	経塚	110,121
64	園部城跡	南丹市園部町	近世	城跡	125

由良川
綾部市
南丹市
夜久野町
綾部市
和知町
美山町
福知山市
福知山市
三和町
瑞穂町
日吉町
京北町
丹波町
京丹波町
八木町
京都市
園部町
亀岡市
保津川
41
63
40
60
61
47
50
62
57
42
43
45
46
64
51
44
52
55
58
56
54
53
48
39
49
59

丹 波 地 域

解説した主要遺跡一覧

山城地域

番号	遺跡名	所在地	時代	特記内容	解説
65	岡崎遺跡	京都市左京区	旧石器時代	大型偶蹄類の足跡化石	5
66	伊賀寺遺跡	長岡京市下海印寺	縄文時代	50 基の竪穴式住居跡	12,21
67	薪遺跡	京田辺市薪	縄文時代	竪穴式住居跡	21,22
68	友岡遺跡	長岡京市友岡	縄文時代	石冠	22
69	内里八丁遺跡	八幡市内里	弥生時代	水田跡	26
70	下植野南遺跡	大山崎町下植野	弥生時代	方形周溝墓	28
71	木津城山遺跡	木津川市木津	弥生時代	台状墓、竪穴式住居跡	29,31
72	市田斉当坊遺跡	久御山町市田	弥生時代	玉作り集落、噴砂	33
73	東土川遺跡	京都市南区	弥生時代	石剣・石鏃の入った墓	40
74	椿井大塚山古墳	木津川市山城町	古墳時代	大型前方後円墳	47
75	久津川車塚古墳	城陽市平川	古墳時代	前方後円墳	43
76	瓦谷 1 号墳	木津川市州見台	古墳時代	前方後円墳	47
77	上津遺跡	木津川市木津	奈良時代	泉津	58
78	恭仁宮跡	木津川市加茂町	奈良時代	都城	68
79	樋ノ口遺跡	精華町山田	奈良時代	離宮跡か	76
80	釜ヶ谷遺跡	木津川市木津	奈良時代	墨書人面土器	59
81	正道官衙遺跡	城陽市寺田	奈良時代	久世郡衙の候補地	63
82	芝山遺跡	城陽市寺田	奈良時代	大型掘立柱建物跡群	63
83	高麗寺跡	木津川市山城町	飛鳥時代	府内最古の寺	65
84	久世廃寺	城陽市久世	奈良時代	金銅製釈迦誕生仏	65
85	馬場南遺跡	木津川市木津	奈良時代	万葉歌木簡、神雄寺	66
86	鹿背山瓦窯	木津川市鹿背山	奈良時代	瓦窯	71
87	上人ヶ平遺跡	木津川市州見台	奈良時代	瓦工房、市坂瓦窯跡	71
88	長岡京跡	長岡京市、向日市	長岡京期	都城	82 ～ 90
89	森垣外遺跡	精華町南稲八妻	古墳時代	地鎮	86
90	平安京跡	京都市	平安時代	都城	92 ～ 97
91	鳥羽殿跡	京都市南区	平安時代	後院	94
92	平等院	宇治市宇治	平安時代	寺院	94
93	尊勝寺跡	京都市左京区	平安時代	寺院、六勝寺	99
94	佐山遺跡	久御山町佐山	中世	居館	115
95	椋ノ木遺跡	精華町下狛	縄文～古墳、中世	集落跡、条里	107
96	田辺城跡	京田辺市田辺	中世	山城跡	117
97	小田垣内遺跡	京田辺市普賢寺	中世	土塁、石仏	110
98	木津川河床遺跡	八幡市八幡	中世	集落跡、噴砂	118
99	三山木遺跡	京田辺市三山木	近世	集落跡	126
100	聚楽第跡	京都市上京区	近世	城郭、金箔瓦	128
101	指月伏見城跡	京都市伏見区	近世	城郭	130
102	木津遺跡	木津川市木津	近世	集落跡	137

山 城 地 域
京都市
鴨川
桂川
向日市
久御山町
宇治市
宇治川
長岡京市
大山崎町
八幡市
城陽市
京田辺市
宇治田原町
井手町
和束町
笠置町
山城町
加茂町
精華町
南山城村
木津川市
木津川
木津町
65
100
93
90
91
101
66
88
73
70
68
72
94
98
81
92
69
84
82
75
67
96
97
99
95
89
74
83
71
78
79
86
77
80
102
87
76
85

縄文時代の石製装飾品（志高遺跡・三河宮ノ下遺跡・千代川遺跡）

平遺跡の縄文土器（縄文時代後期・晩期）

雲宮遺跡の弥生土器（弥生時代前期）

左坂墳墓群の弥生土器（弥生時代後期）

市田斉当坊遺跡の碧玉（弥生時代中期）

市田斉当坊遺跡の玉作り関係遺物（弥生時代中期）

奈具岡北１号墳の陶質土器・初期須恵器（古墳時代中期）

内里八丁遺跡の土師器（古墳時代前期）

五領池東瓦窯跡の軒瓦類（奈良時代後期）

平安京左京一条二坊の土器群（平安時代前期）

平安京跡（府庁１号館）の桃山陶磁（江戸時代初期）

聚楽第城下の大名屋敷の金箔瓦群（安土桃山時代）

掲載した資料は、当調査研究センターが所蔵する資料のほか、下記の関係機関より資料提供を受けた。

京都府教育委員会、京都府立丹後郷土資料館、京丹後市教育委員会、与謝野町教育委員会、宮津市教育委員会、舞鶴市教育委員会、南丹市教育委員会、亀岡市教育委員会、木津川市教育委員会、向日市文化資料館、城陽市歴史民俗資料館、独立行政法人京都国立博物館、早川和子、村上優美子、出水佰明（順不同、敬称略）

編集後記

「遺跡でたどる京都の歴史　旧石器～近世」は、平成19（2007）年から平成22（2010）年にかけて、『京都府埋蔵文化財情報』（第102号・第104～111号）に連載物として3年間にわたって掲載しました。その開始にあたっては、30周年記念事業の中で冊子としてまとめることを一つの目標として、当調査研究センターの調査課職員全員が執筆しました。

この冊子は『京都府埋蔵文化財情報』に掲載した原稿をもとに、旧石器時代から近世までを通史的に1冊の刊行物としてまとめたものです。編集にあたり、30周年実行委員会の中に記念事業実行委員会を立ち上げ、『情報』掲載時の本文の内容・体裁を一部変更しました。

私たちの思いの一つは、この本の中で紹介した遺跡の上に実際に立ってほしいというものです。しかし、収録した多くの遺跡は発掘した当時とは大きく変化している場合も多く、現地に足を運ぶことも叶わないこともあるでしょう。せめて、紹介した遺跡に思いをはせていただき、あわせて、当時の調査員や調査補助員、調査に参加していただいた地元の方々が発掘作業に体験した楽しみや驚き、苦労を思い描いていただけたらと思います。

本書の編集は、石井・村田を中心に編集作業を進め、構成などについては記念事業実行委員会で検討しました。

※30周年記念事業実行委員会；石井清司・田代弘・戸原和人・竹原一彦・岡崎研一・村田和弘・松尾文子・伊賀高弘

昔むかし・・・。～京都府の遺跡をよむ～

平成 23 年 3 月 25 日

発行　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002　向日市寺戸町南垣内 40 番地の 3
Tel　075-933-3877　　Fax　075-922-1189

印刷　三星商事印刷株式会社
〒604-0093　京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel（075）256-0961（代）　Fax（075）231-7141